千葉県八千代市

内野南遺跡ｉ地点発掘調査報告書

－宅地造成に伴う埋蔵文化財調査－

２０１７

三信住建株式会社
八千代市教育委員会
株式会社地域文化財研究所

例　言

1．本書は宅地造成に伴い埋蔵文化財の発掘調査が実施された、内野南遺跡 i 地点の発掘調査報告書である。

2．調査は三信住建株式会社より委託を受けた株式会社地域文化財研究所が八千代市教育委員会の指導の下に行った。

3．遺跡の所在地及び面積、調査期間、担当者など調査体制は下記の通りである。

所　在　地　千葉県八千代市吉橋字内野 1063-3 他

面　　積　1,070㎡

調 査 期 間　平成 29（2017）年 2 月 20 日～4 月 6 日

調査担当者　大橋 生

調査参加者　［発掘調査］泉　祐司　今野秀樹　小野裕司　表　豊　小玉富夫　齋藤 穣
佐藤敬一郎　田中成光　古里兼吉　槇　勝雄　宮内　孝　深山恒男　山本清二
［整理調査］川村理華　木村春代　小林真千子　野村浩史　藤井陽子　増田香理

4．整理調査及び本書の作成は株式会社地域文化財研究所において大橋が担当した。

5．執筆分担は第 1 章第 1 節が八千代市教育委員会、その他が大橋である。
出土遺物については齋藤弘道氏に御教示いただいた。

6．調査記録及び出土品は、一括して八千代市教育委員会が保管・管理している。

7．調査においては下記の方々にご指導・ご協力を賜った (順不同・敬称略)。

三信住建株式会社　八千代市教育委員会 教育総務課 文化財班
足立洋一　金子亮介　齋藤弘道

凡　例

1．遺構図は国家標準直角座標Ⅸ系（世界測地系）を基準に作成し、方位は座標北を示す。

2．遺構等は以下の略号で示した。

竪穴住居跡：SI　土坑：SK　ピット：P　撹乱：K

3．遺構図における土層説明で、微・少・中・多量は土層内における含有物の割合を 4 区分したものであり、それぞれ、微量は 1 ～ 5 % 未満、少量は 5 % 以上～ 15% 未満、中量は 15% 以上～ 30% 未満、多量は 30% 以上を示す。粒は 20mm 未満、ブロックは 20mm 以上を示す。

4．遺構･遺物の色調表記は『新版標準土色帖 2003 年版（財団法人日本色彩研究所ほか)』を使用した。

5．本文中の遺物出土点数は、未接合でも同一個体と判断される場合、点数は 1 つとした。

6．文章及び出土遺物観察表の計測値は（　）が復元値、〈　〉が残存値を示す。単位は cm 及び g である。

7．遺物写真図版は原則として 1/3 とした。

8．遺物番号は本文、挿図、写真図版共に一致している。

9．遺構実測図・遺物実測図中の網掛けおよび土器類記号は下記のとおりである。

焼土　　繊維

10．遺構図中の●は土器、○は土製品、▲は石器・石製品を表す。

目　次

例言　凡例　目次
第１章　調査経過と遺跡の立地環境
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査方法と調査経過 …… 2
第３節　基本土層 …… 2
第４節　遺跡の位置と環境 …… 3
第２章　検出された遺構と遺物
第１節　調査の概要 …… 11
第２節　竪穴住居跡 …… 11
第３節　土坑 …… 26
第４節　ピット …… 31
第５節　遺構外出土遺物 …… 32
第３章　まとめ …… 33
写真図版　報告書抄録

挿図目次

第 1 図 確認調査トレンチ配置図 …… 1
第 2 図 基本堆積土層図 …… 2
第 3 図 周辺遺跡分布図 …… 3
第 4 図 調査範囲及び既往の調査地点 …… 4
第 5 図 調査区全体図 …… 6
第 6 図 4 区全体図 …… 7
第 7 図 5 区全体図 …… 8
第 8 図 6 区全体図 …… 9
第 9 図 7 区全体図 …… 10
第 10 図 SI1・SI2 ① …… 12
第 11 図 SI1・SI2 ② …… 13
第 12 図 SI1 出土遺物 …… 13
第 13 図 SI2 出土遺物 …… 14
第 14 図 SI3 …… 15
第 15 図 SI3 出土遺物 …… 16
第 16 図 SI4 …… 18
第 17 図 SI4 出土遺物 …… 18
第 18 図 SI5 ① …… 19
第 19 図 S15 ② …… 20
第 20 図 SI5 出土遺物① …… 21
第 21 図 SI5 出土遺物② …… 22
第 22 図 SI6・SI7 …… 24
第 23 図 SI6 出土遺物 …… 24
第 24 図 SI7 出土遺物 …… 25
第 25 図 SK1·2·3·4 …… 27
第 26 図 SK5·6·7·8·9・SK9 出土遺物 …… 29
第 27 図 SK10·11·12·13 …… 30
第 28 図 P05 出土遺物 …… 31
第 29 図 遺構外出土遺物 …… 32
第 30 図 縄文時代陥し穴分布図 …… 34
第 31 図 縄文時代前期中葉～後葉遺構分布図 …… 35

表目次

第 1 表 内野南遺跡調査一覧表 …… 4
第 2 表 SI1 出土遺物観察表 …… 13
第 3 表 SI2 出土遺物観察表 …… 14
第 4 表 SI3 出土遺物観察表 …… 17
第 5 表 SI4 出土遺物観察表 …… 18
第 6 表 SI5 出土遺物観察表 …… 22
第 7 表 SI6 出土遺物観察表 …… 25
第 8 表 SI7 出土遺物観察表 …… 25
第 9 表 土坑出土遺物観察表 …… 28
第 10 表 ピット出土遺物観察表 …… 31
第 11 表 ピット一覧表 …… 31
第 12 表 遺構外出土遺物観察表 …… 33

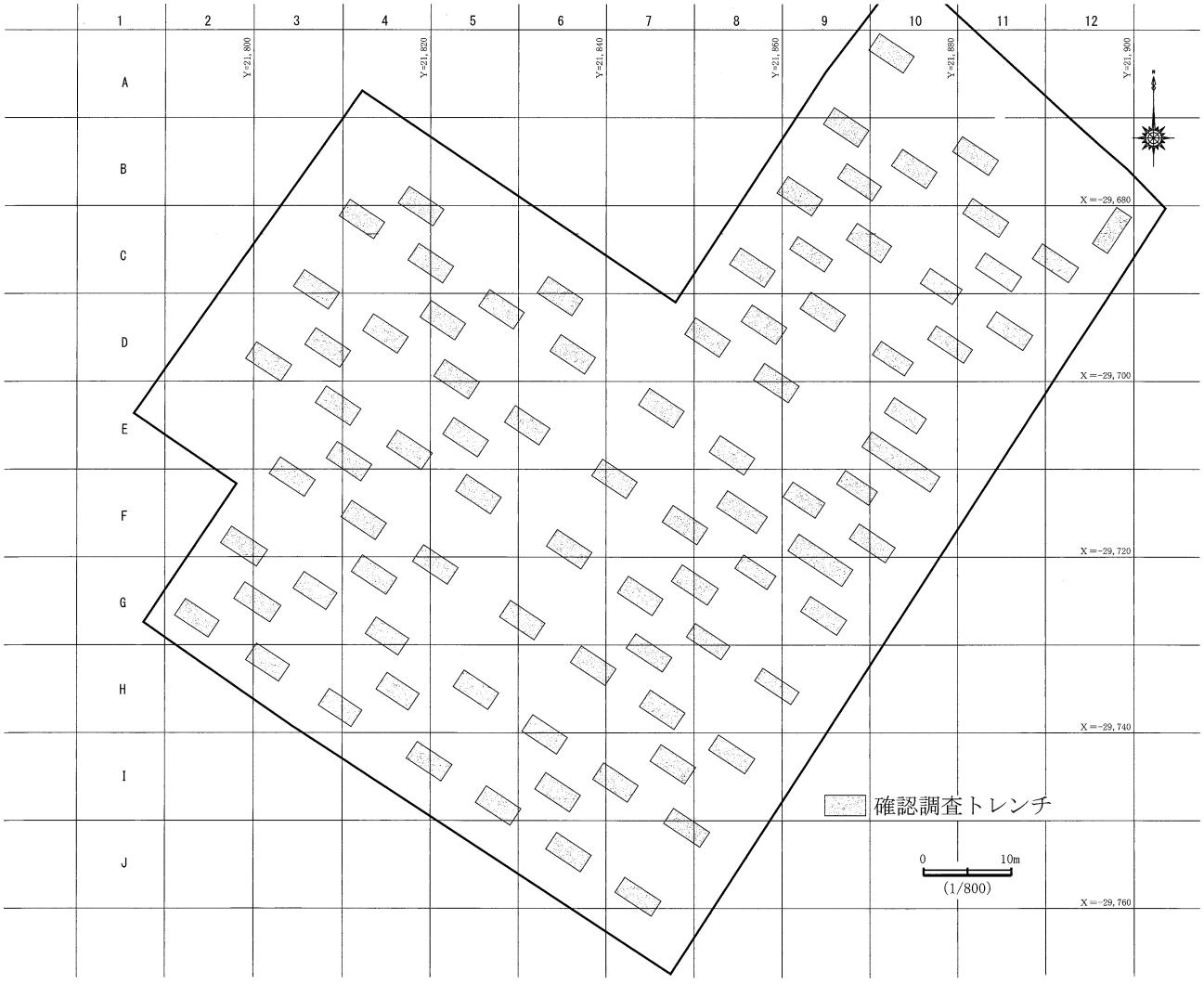
写真図版目次

図版 1　調査区全景／1 区全景／2 区全景／3 区全景
4 区全景
図版 2　5 区全景／6 区全景／7 区全景／SI1 土層断面
SI1 遺物出土状況／SI1 全景／SI1 炉 1 全景／
SI1 炉 2 全景
図版 3　SI2 土層断面／SI2 遺物出土状況／SI2 全景
SI2 炉全景／SI3 土層断面／SI3 遺物出土状況
SI3 全景／SI3 炉 1 全景
図版 4　SI4 土層断面／SI4 遺物出土状況／SI4 全景
SI5 土層断面／SI5 遺物出土状況／SI5 磨製石
斧出土状況／SI5-P16 石製垂飾出土状況／SI5
全景
図版 5　SI5 炉 1·2·3 全景／SI5 炉 4·5 全景／SI6 土層
断面／SI6 全景／SI6 炉 1 全景／SI6 炉 2 全景
SI7 土層断面／SI7 遺物出土状況
図版 6　SI6·7 全景／SK1 全景／SK2 全景／SK3 全景
SK4 全景／SK5 全景／SK6 全景／SK7 全景
図版 7　SI1·2·3 ①出土遺物
図版 8　SI3 ② ·4·5 ①出土遺物
図版 9　SI5 ②出土遺物
図版 10　SI5 ③ ·6 出土遺物
図版 11　SI7,SK9,P05, 遺構外出土遺物

第１章　調査経過と遺跡の立地環境

第１節　調査に至る経緯

平成 28 年 7 月 25 日、三信住建株式会社代表取締役社長　信田博幸氏（以下、事業者）から「埋蔵文化財の取扱いについて（確認）」の文書が八千代市教育委員会（以下、市教委）に提出された。市教委は現地踏査を行い、開発面積 14,602.76㎡の内、6,720㎡が周知の埋蔵文化財包蔵地（内野南遺跡）に含まれると判断し、8 月 1 日、その旨を事業者に回答した。回答後、事業者と協議を行い、遺跡の範囲、性格等を明らかにするための確認調査を実施するに至った。9 月 30 日、事業者から文化財保護法 93 条の届出が提出され、市教委は準備が整った 12 月 19 日に確認調査を開始した。調査は、平成 29 年 1 月 12 日まで行い、縄文時代の竪穴建物跡 7 棟、土坑 7 基を検出し、協議範囲は 1,070㎡となった。この結果を受け、市教委と事業者で協議が行われ、記録保存（発掘調査）の措置をとることになった。調査の実施については、事業者から株式会社地域文化財研究所が挙げられた。市教委は、同社から調査計画書・積算書の提出を求め、適正な調査実施が可能と判断した。平成 29 年 2 月 17 日、事業者、株式会社地域文化財研究所、市教委との間で発掘調査の実施に関する協定書を締結し、同日、市教委は、文化財保護法 92 条の届出を千葉県教育委員会に進達し、本調査実施に至った。



第１図　確認調査トレンチ配置図

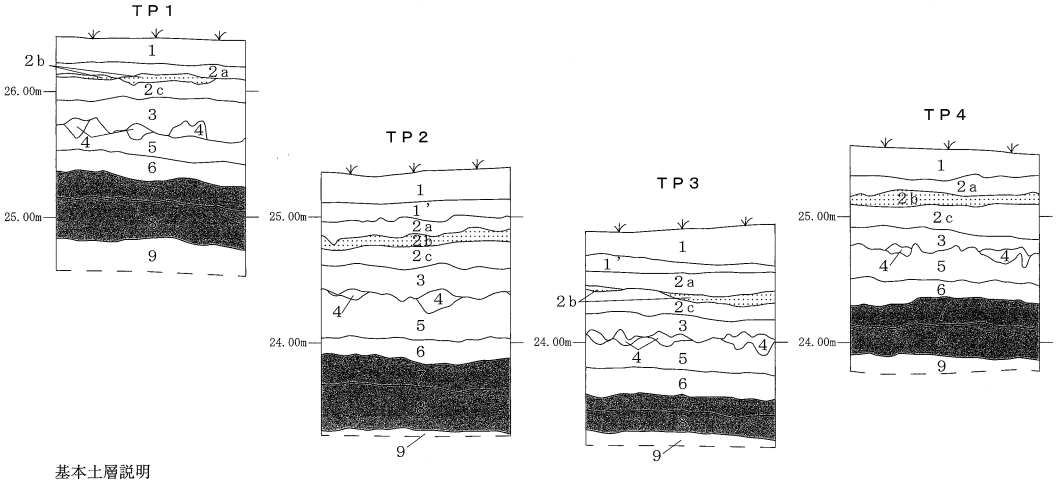
第２節　調査方法と調査経過

発掘調査は、平成29年２月20日から４月６日までの１ヵ月半にわたって実施した。確認調査で検出されている遺構を中心に、事業範囲内に７か所の調査区を設定し、北西側より１～７区として調査を実施した。２月20日から重機による表土掘削を開始、24日より遺構確認を行い、縄文時代前期黒浜式期を主とした竪穴住居跡７軒、土坑13基、ピット62基を検出した。28日からは各調査区ごとに各遺構の調査を開始し、３月には各遺構ごとに随時、写真撮影及び実測等の記録作業を進め、４月６日までには各調査区、各遺構の調査を終了した。

遺構覆土出土遺物については、原則として出土位置を３次元で記録している。また、遺構の実測については平面・土層断面共に縮尺1/20を原則とした。写真撮影にあたっては35㎜モノクロフィルム、35㎜カラーリバーサルフィルム、デジタルカメラ（1000万画素）を併用し、適宜、記録撮影を実施している。

第３節　基本土層

今回の調査地点は台地の縁辺部にあたり、北西から南東へ傾斜している。以前には工場として利用されており、南側は盛土がなされ整地されていた。基本土層の確認は、表土層も含め、斜面に直交するように土層の観察・記録を実施した。３区東壁、４区西壁、６区東壁、７区東壁で実施し、更に2.0ｍ×2.0ｍのテストピットを掘り下げ、基本土層を観察・記録している。本跡では２ｂ層＝新期テフラ層が確認調査で検出されており、黒浜式期の各遺構はその新期テフラ層下位の２ｃ層中より形成され、ローム層への掘り込みは浅い。そのため遺構確認面はローム層上面ではなく２ｃ層中にて検出している。現地表より遺構確認面までは斜面上位で約0.5ｍ、斜面下位では表土が除々に深さを増し、深い地点で最大1.5ｍ程となる。各テストピットは立川ローム層第二黒色帯相当と考えられる層を掘り抜いた。現地表から９層上面までは1.5～2.0ｍを測る。旧石器時代の遺物は検出されなかった。



基本土層説明

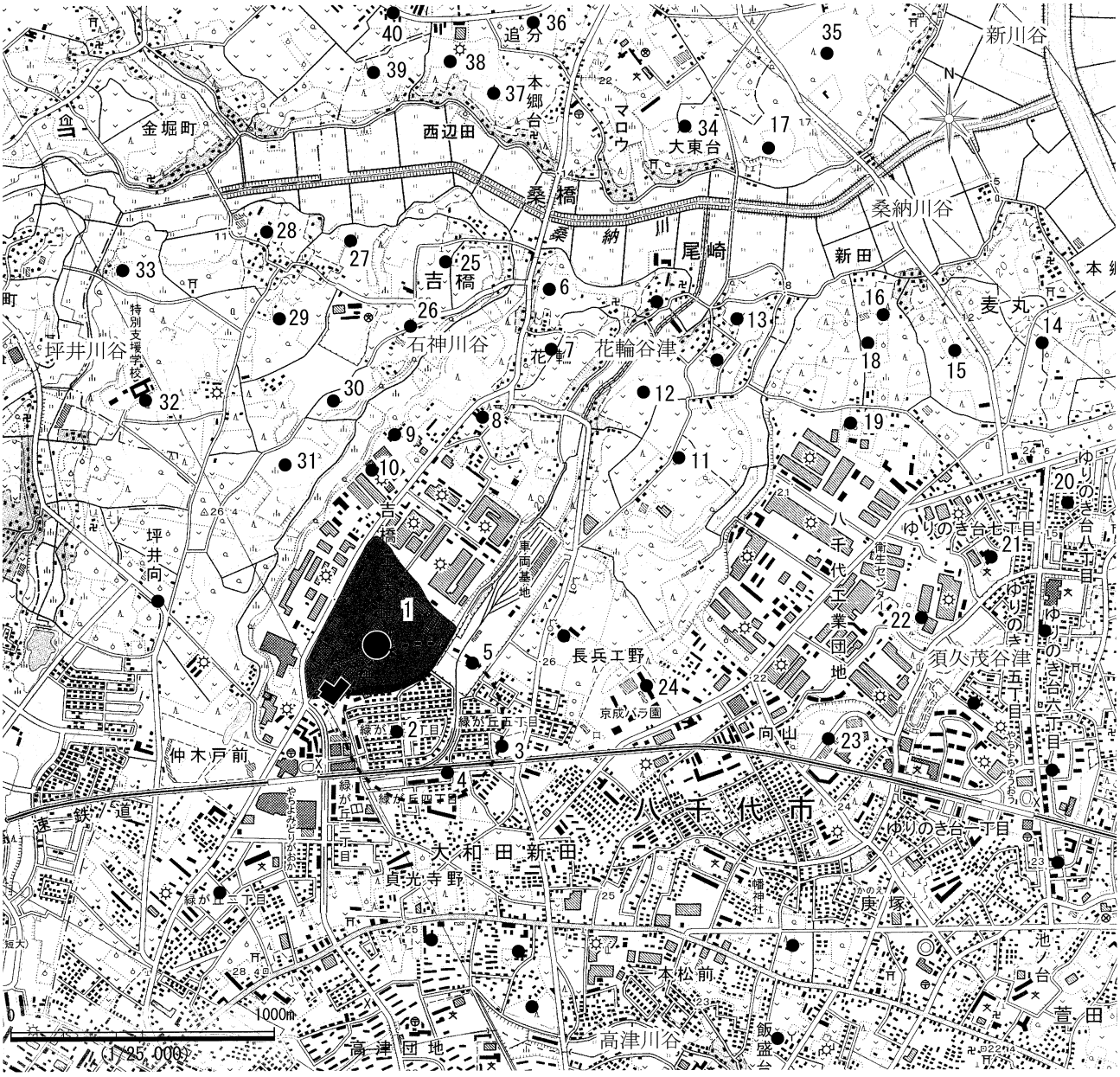
1. 表土層（整地層）。
1'. 10YR 3/2　黒褐色土　表土層。
2a. 10YR 3/3　暗褐色土　Ⅱａ層相当。
2b. 10YR 4/3　にぶい黄褐色土　斑文状。Ⅱｂ層相当：新期テフラ。
2c. 10YR 3/4　暗褐色土　Ⅱｃ層相当。
3. 10YR 4/4　褐色土　Ⅲ層ソフトローム相当。
4. 10YR 4/4　褐色土
5. 10YR 3/4　暗褐色土
6. 10YR 4/4　褐色土
7. 10YR 3/3　暗褐色土
8. 10YR 3/4　暗褐色土
9. 10YR 4/6　褐色土

第二黒色帯相当。

第２図　基本堆積土層図（S=1/60）

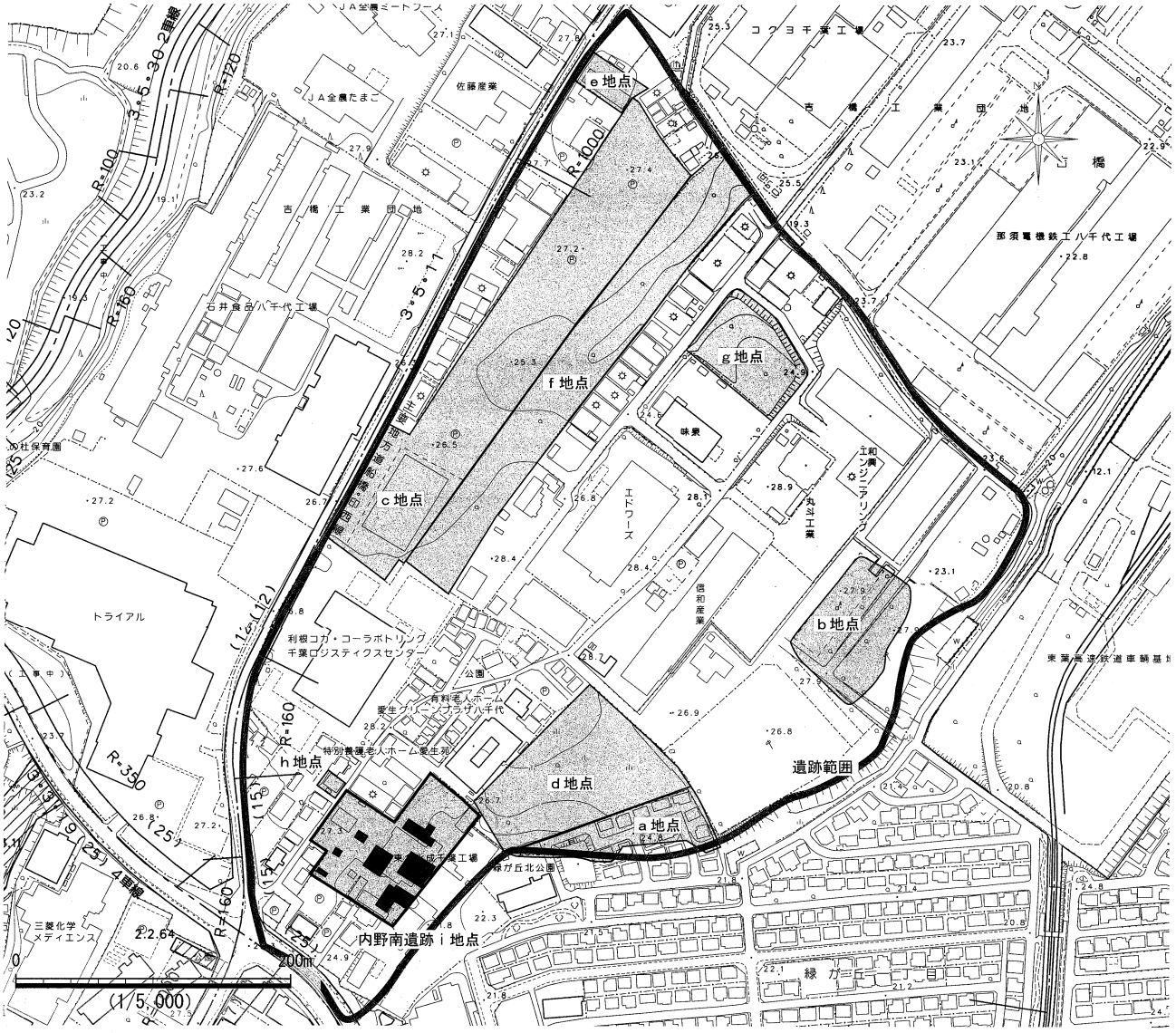
第４節　遺跡の位置と環境

八千代市は下総台地北西部に位置し、市域を占める台地には樹枝状に谷が入り込み複雑な地形を形成している。本跡は、印旛沼へと続く新川の支流桑納川より更に分かれる石神川と花輪川により形成された石神川谷と花輪谷津に挟まれた半島状の舌状台地の最奥部に立地している。その範囲は広く、東西約 370 m、南北約 360 mに及ぶ。そのうち、今回のｉ地点は花輪谷津側に面した縁辺部で標高 25



1. 内野南遺跡
2. 仲ノ台遺跡
3. ヲイノ作遺跡
4. ヲイノ作南遺跡
5. 大和田新田芝山遺跡
6. 妙見前遺跡
7. 渋内遺跡
8. 内野遺跡
9. 西内野遺跡
10. 西内野南遺跡
11. 吉橋芝山遺跡
12. 平作遺跡
13. 勘子山遺跡
14. 麦丸遺跡
15. 水神遺跡
16. 新田遺跡
17. 桑橋新田遺跡
18. 新田台遺跡
19. 麦丸台遺跡
20. 権現後遺跡
21. ヲサル山遺跡
22. ヲサル山南遺跡
23. 向山遺跡
24. 長兵衛野南遺跡
25. 吉野郡幾遺跡
26. 吉橋新山遺跡
27. 大作遺跡
28. 背戸遺跡
29. 東向遺跡
30. 西芝山遺跡
31. 西芝山南遺跡
32. 八王子台遺跡
33. 川向遺跡
34. 大東台遺跡
35. 桑納遺跡
36. 追分遺跡
37. 本郷台遺跡
38. サゴテ遺跡
39. 爪作遺跡
40. 金堀台貝塚遺跡

第３図　周辺遺跡分布図（S=1/25,000）



第４図　調査範囲及び既往の調査地点（S=1/5,000）

第１表　内野南遺跡調査一覧表

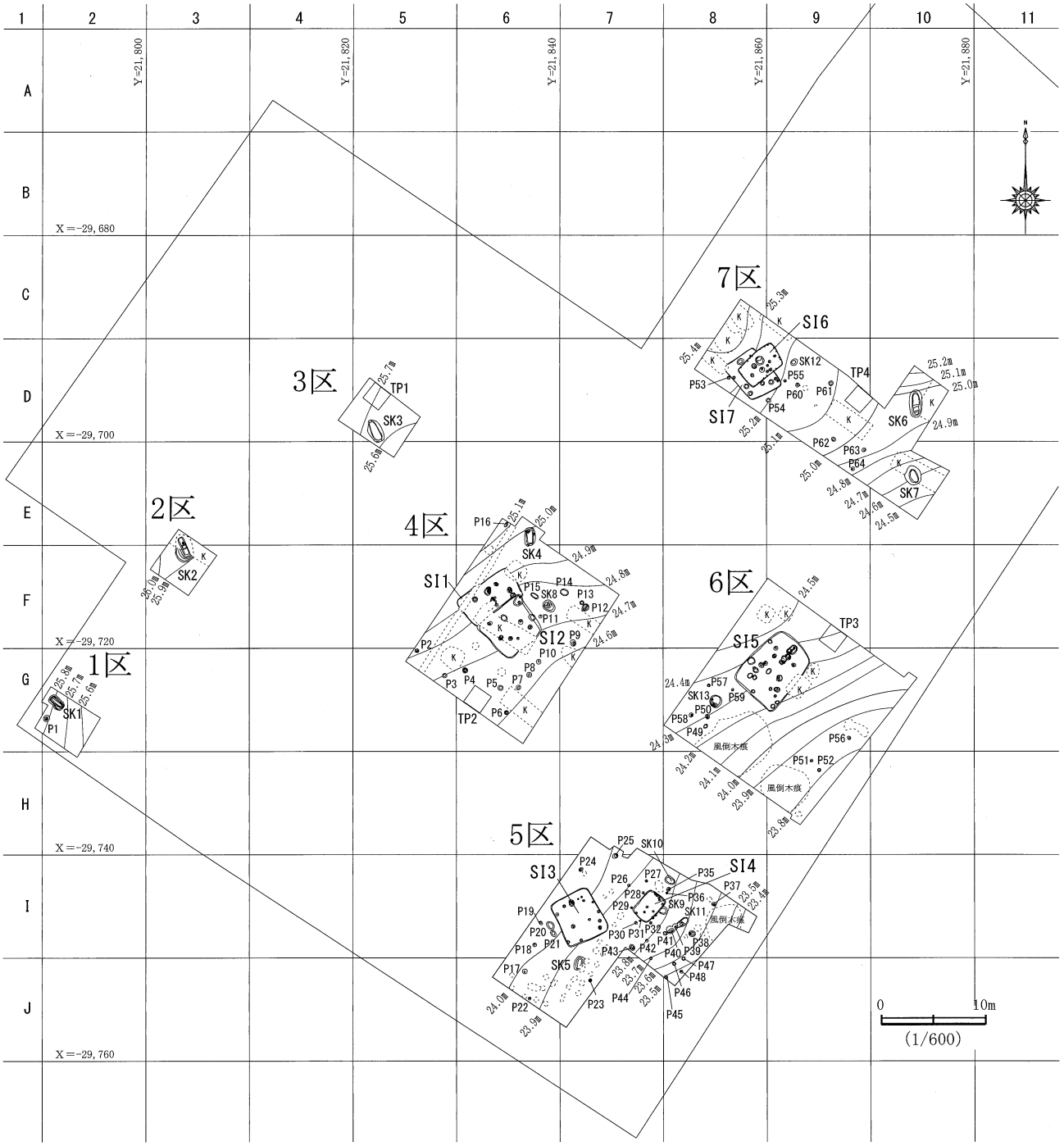
遺跡名・地点名		文　献		主な遺構・遺物
内野南遺跡	a 地点	2000	『千葉県八千代市内野南遺跡ａ地点発掘調査報告書』 八千代市遺跡調査会	炉穴5(縄文時代早期)・土坑8(縄文時代早～前期),縄文土器(稲荷台式・三戸式・茅山式・黒浜式・浮島式・加曽利Ｅ式・加曽利Ｂ式),縄文時代石器(叩石・石皿・磨石・剝片),礫,竪穴住居跡1(奈良時代),土師器・須恵器(奈良時代)
	b 地点	1999	『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成10年度』「内野南遺跡ｂ地点」八千代市教育委員会	陥し穴1・土坑1(縄文時代),縄文土器(早期・中期・後期)
	c 地点	2004	『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成15年度』「内野南遺跡ｃ地点」八千代市教育委員会	陥し穴5・土坑2(縄文時代),縄文土器(早期・中期・後期),縄文時代石器(石鏃・剝片)
	d 地点	2008	『千葉県八千代市内野南遺跡ｄ地点発掘調査報告書 －集合住宅建設に伴う埋蔵文化財調査－』 八千代市教育委員会・斎藤信孝	竪穴住居跡8(縄文時代早期後半3・前期前半1・前期後半3)・炉穴5(縄文時代早期後半)・ピット182(縄文時代早期後半12・前期前半2・前期後半17),陥し穴1(縄文時代)・道路状遺構1(黒浜式期),縄文土器(稲荷台式・茅山上層式・黒浜式・浮島式・興津式・諸磯ｂ式・前期末葉～中期初・加曽利Ｅ式・加曽利Ｂ式・曽谷式・後期安行式・晩期安行式),土製玦状耳飾り1,縄文時代石器(敲石・磨石)
	e 地点	2012	『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成23年度』「内野南遺跡ｅ地点」八千代市教育委員会	遺構なし,縄文土器(後・晩期)
	f 地点	2014	『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成25年度』「内野南遺跡ｆ地点」八千代市教育委員会	遺構なし,縄文土器(加曽利Ｂ式・安行1式),縄文時代石器(剝片),焼礫
	g 地点	2014	『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成25年度』「内野南遺跡ｇ地点」八千代市教育委員会	遺構なし,焼礫(縄文時代),土師器(奈良・平安時代)
	h 地点	2017	『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成28年度』「内野南遺跡ｈ地点」八千代市教育委員会	遺構なし,縄文土器(後期)
	i 地点	—	本地点	竪穴住居跡7(黒浜式～諸磯a(古)式期),陥し穴7(縄文時代),土坑6(縄文時代前期),ピット62(縄文時代前期),縄文土器(黒浜式・諸磯a(古)式・諸磯ｂ(新)～諸磯ｃ(古)式、後期),縄文時代石器(打製石斧・磨製石斧・敲石・磨石・石鏃・浮子・剝片),石製品(垂飾)

～26 mに位置し、支谷との比高差は約12～13 mを測る。これらの台地上には今回の調査に係わる縄文時代前期中葉黒浜式期の長期にわたる集落を確認している西八千代遺跡群をはじめ、他にも各時代の重要な遺跡が数多く点在している。以下では本地点の時期である縄文時代前期中葉黒浜式期を中心に周辺遺跡を概観する。

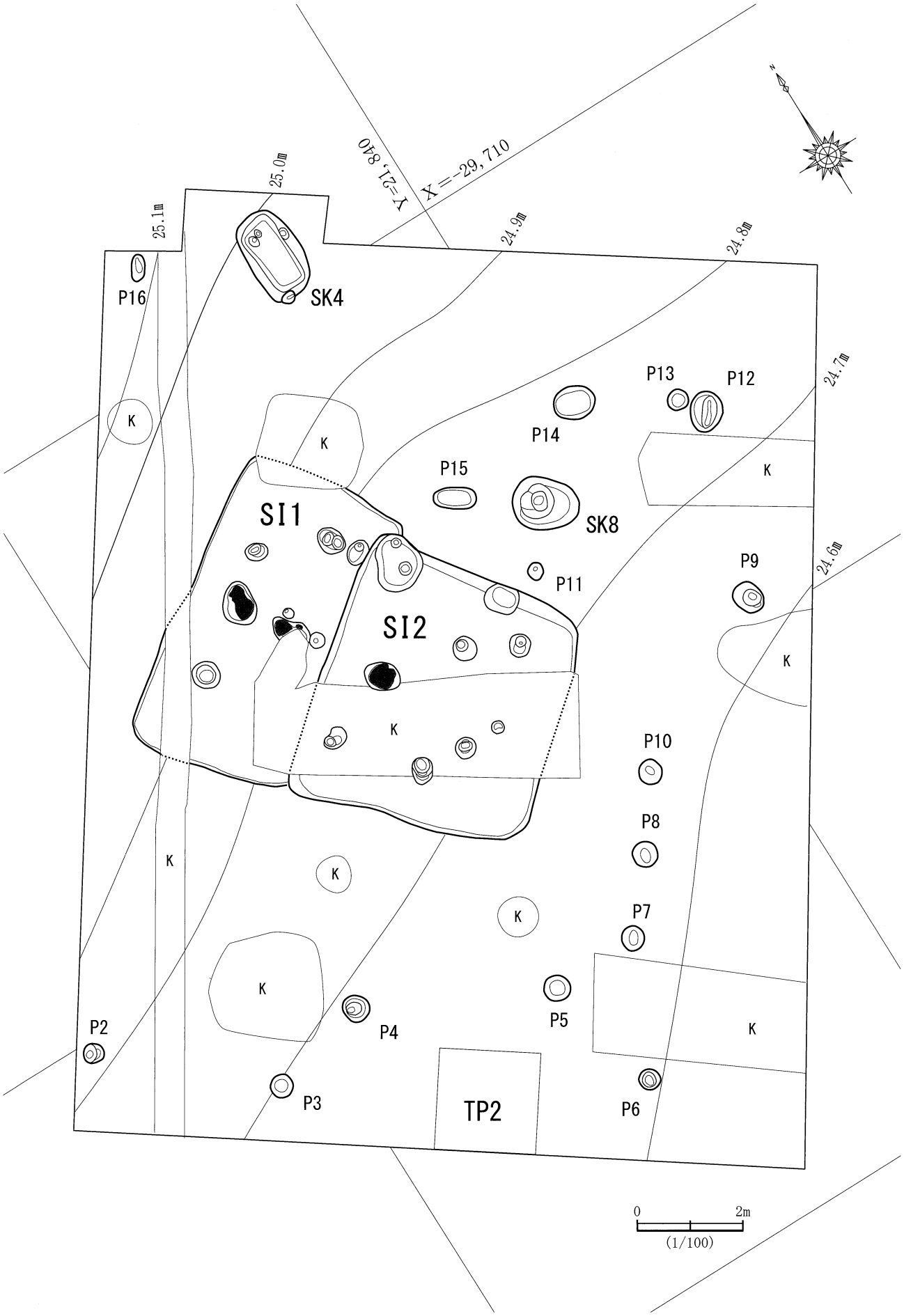
本跡と同じ台地上には、縄文時代早期・後期の土器が出土している渋内遺跡(7)、前期中葉黒浜式、中期阿玉台式･加曽利Ｅ式、後期安行式土器が出土した妙見前遺跡(6)、陥し穴群、土坑群が検出され、中期阿玉台式土器を主とし、他に早期田戸下層式、前期浮島・興津式、中期五領ヶ台式、後期安行1式、晩期安行式土器が出土した西内野遺跡(9)などが確認されている。また、本跡を含む花輪谷津の最奥部には谷の先端部を取り囲むように近接して、内野南遺跡(1)、仲ノ台遺跡(2)、ヲイノ作遺跡(3)、ヲイノ作南遺跡(4)、大和田新田芝山遺跡(5)がある。いずれも前期を主体としている。内野南遺跡(1)では本地点も含め、陥し穴14基、早期後半の炉穴10基、黒浜式期住居跡8軒と詳細は後述するが早期後半から晩期までの各時期の遺物が出土している。仲ノ台遺跡(2)では陥し穴21基、黒浜式期住居跡10軒、浮島式期の小竪穴状遺構1基と関山式・黒浜式・浮島式・興津式・諸磯式土器が検出されている。ヲイノ作遺跡(3)では陥し穴3基、早期の炉穴5基、黒浜式期住居跡1軒、加曽利Ｂ式期住居跡1軒と茅山式・花積下層式・関山式・黒浜式・浮島式・興津式・諸磯式・加曽利Ｂ式土器が検出されている。ヲイノ作南遺跡(4)では陥し穴18基、早期の炉穴3基、黒浜式期住居跡24軒と茅山式・関山式・黒浜式・浮島式・諸磯式・五領ヶ台式・阿玉台式・加曽利Ｅ式・加曽利Ｂ式土器が検出され、また､マガキを主体とした前期の地点貝層が検出されている。大和田新田芝山遺跡(5)では陥し穴49基、早期の炉穴3基、黒浜式期住居跡3軒、加曽利Ｂ式期住居跡1軒と条痕文系･黒浜式･浮島式･興津式･五領ヶ台式・阿玉台式・加曽利Ｅ式・加曽利Ｂ式土器が検出されたほか、アサリやハイガイなどの前期の地点貝層が検出されている。以上の花輪谷津の最奥部の5遺跡から当地域の歴史的変遷を追うと早期の炉穴21基や早期以降の多時期のものが含まれるとみられるが陥し穴105基がこれまでに確認されており、縄文時代早期後半から主に狩猟場とされていた状況が窺える。前期では花積下層・関山式期の痕跡は少ないが、黒浜式期以降、人口増大に伴い集落が増加傾向を示す古奥東京湾岸の状況に重なるように、黒浜式期の住居跡は総数46軒が確認されている。その後、前期後半には衰退し、中期の痕跡は更に少なく土器が認められる程度で、そして後期加曽利Ｂ式期には住居がわずかに確認されている。更に時期を経て平安時代の住居跡6軒も検出されている。仲ノ台遺跡(2)､ヲイノ作遺跡(3)､ヲイノ作南遺跡(4)は300 m程の範囲に近接して存在し、3遺跡の黒浜式期住居跡35軒は、該期の中心的な性格を有していたものとみられる。やや離れるが同じ谷沿いとなる内野南遺跡(1)、大和田新田芝山遺跡(5)も有機的な関連性が想定される。市内には他にも本跡より南東へ約3.8kmの大留入遺跡では黒浜～諸磯式期の陥し穴4基､本跡より東へ約5kmの新林遺跡では浮島･興津式期の土坑41基、二重堀遺跡では浮島・興津式期の竪穴状遺構1基、土坑37基、本跡より北東へ約5kmの瓜ヶ作遺跡では黒浜～興津式期の住居跡17軒が確認されている。古奥東京湾岸の前期黒浜式期の人口増加に付随する状況が窺える。

内野南遺跡は市域の南西部に位置し、今回の調査は八千代市吉橋字内野1063-3他に所在するｉ地点となる。内野南遺跡も今回も含めこれまでに9ヵ所の調査が実施されている。既往の調査地点については第1表に整理した。内野南遺跡は縄文時代早期後半～前期を主とし、未調査部分も多いが広い遺跡範囲に比して遺構の分布密度はやや希薄である。主な遺構としては、a･d地点で早期の炉穴が計

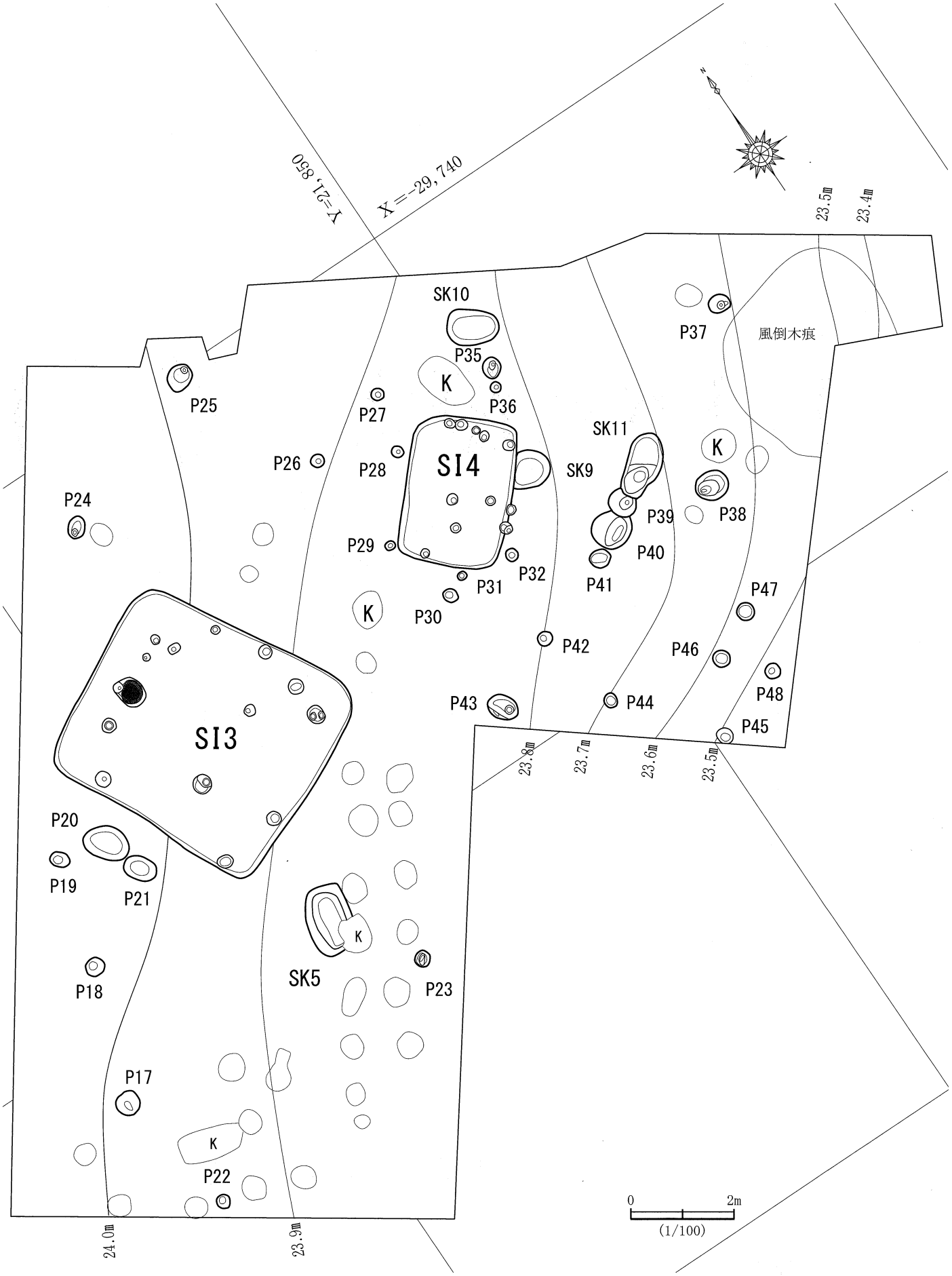
10基、b･c･d･i地点で計14基の陥し穴が検出されている。d地点では茅山上層式期の住居跡3軒、黒浜式期の住居跡1軒、浮島Ⅲ式期の住居跡2軒、興津Ⅰ式期の住居跡2軒で計8軒の住居跡と黒浜式期の道路状遺構が検出されている。出土遺物としては縄文土器が早期稲荷台式・三戸式・茅山式、前期黒浜式・浮島式・興津式・諸磯式、中期加曽利E式、後期加曽利B式・曽谷式・安行式、晩期安行式までみられる。他に石器も敲石・磨石・石皿・石鏃・打製石斧・磨製石斧などが出土し、またd地点では「下堤型」の土製玦状耳飾も出土している。縄文時代以外にはa地点で奈良時代のコーナーカマドを有した竪穴住居跡が1軒検出されている。本跡周辺の石神川や花輪川は新川谷より古印旛湾へ注いでいたが、現在、新川は東京湾へと放水されており、本跡より東京湾までは直線で約10kmである。縄文海進期では古奥東京湾までは更に距離は縮まっていたと想定される。



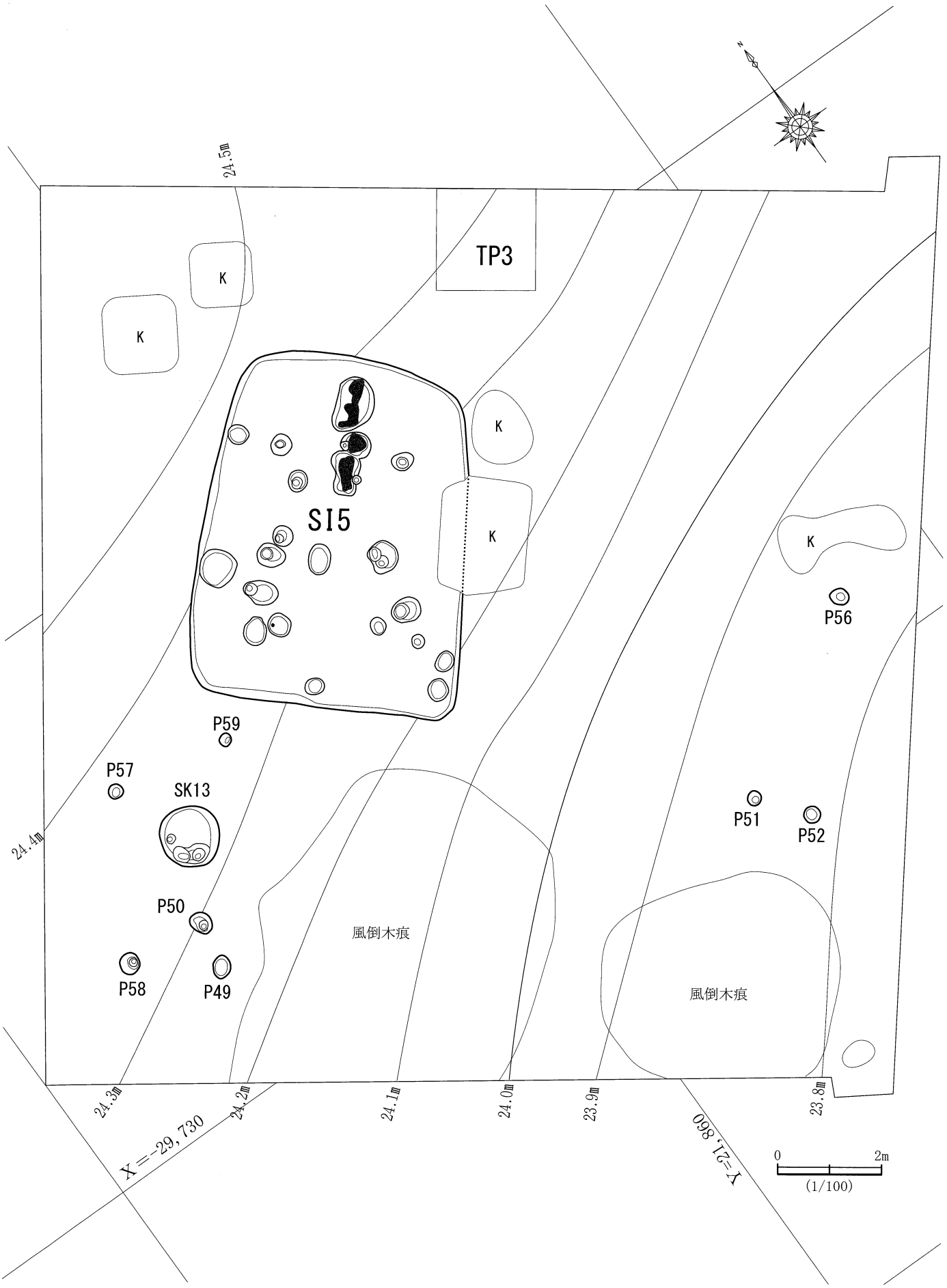
第5図　調査区全体図


X=-29,710
Y=21,840
25.0m
25.1m
24.9m
24.8m
24.7m
24.6m
SK4
P16
K
SI1
SI2
P13
P12
P14
P15
SK8
P11
P9
P10
P8
P7
P5
P4
P3
P2
P6
TP2
0
2m
(1/100)

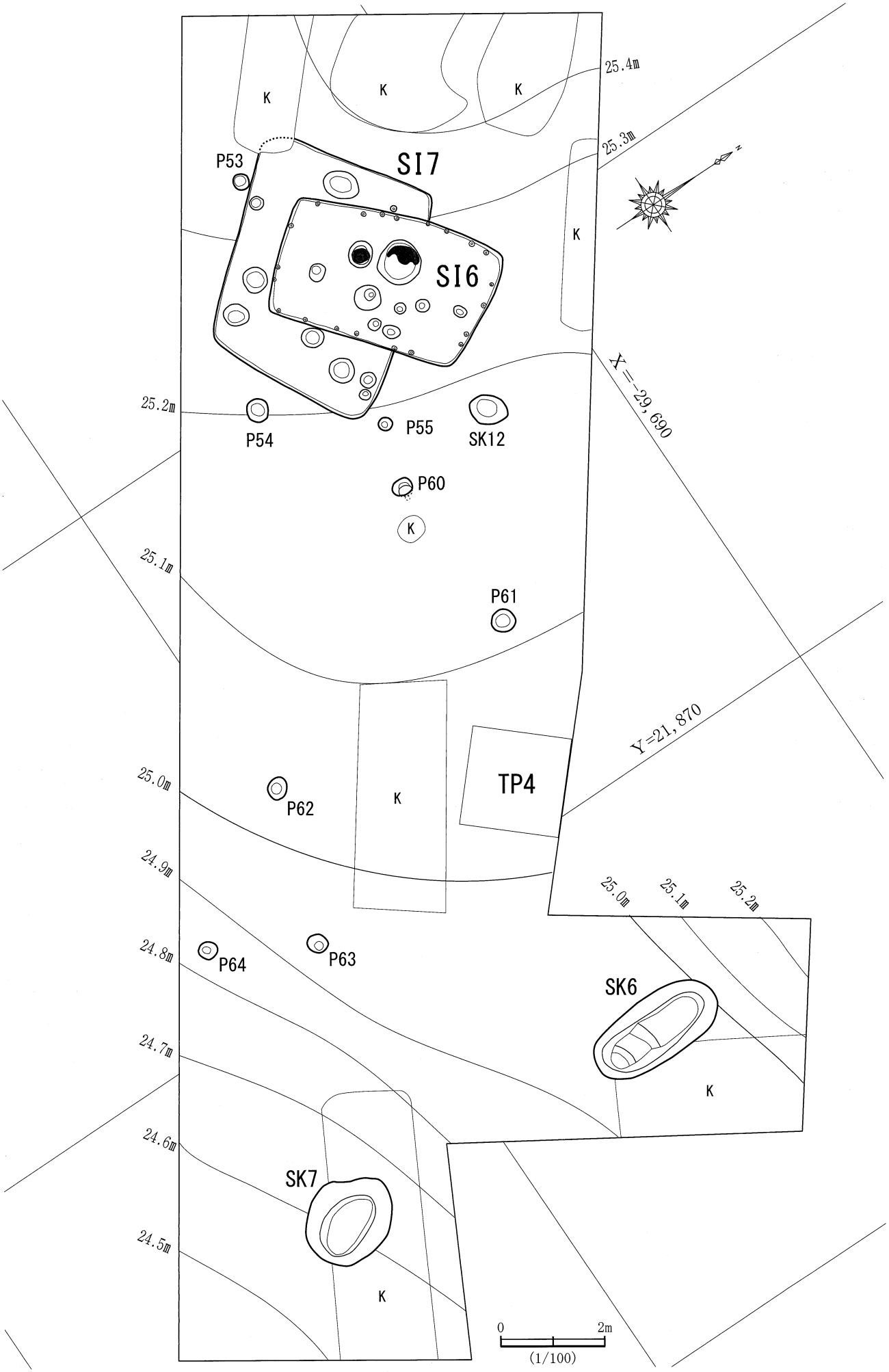
第６図　４区全体図


Y=21,850
X=-29,740
23.5m
23.4m
SK10
P35
P36
P37
風倒木痕
K
P25
P27
P26
P28
SI4
SK9
SK11
K
P38
P39
P24
P29
P40
P41
P32
P31
P30
P47
K
P42
P46
P48
P43
P44
P45
SI3
23.8m
23.7m
23.6m
23.5m
P20
P19
P21
K
SK5
P23
P18
P17
K
P22
0
2m
(1/100)
24.0m
23.9m

第７図　５区全体図


TP3
K
K
K
K
K
SI5
P56
P59
P57
SK13
P51
P52
P50
P58
P49
風倒木痕
風倒木痕
24.5m
24.4m
24.3m
24.2m
24.1m
24.0m
23.9m
23.8m
X=-29,730
Y=21,860
0
2m
(1/100)

第８図　６区全体図


K
K
K
25.4m
25.3m
P53
SI7
SI6
K
X=-29,690
25.2m
P54
P55
SK12
P60
K
25.1m
P61
Y=21,870
25.0m
P62
K
TP4
24.9m
25.0m
25.1m
25.2m
24.8m
P64
P63
SK6
24.7m
K
24.6m
SK7
24.5m
K
0
2m
(1/100)

第９図　７区全体図

第２章　検出された遺構と遺物

第１節　調査の概要

今回の発掘調査によって検出された遺構は竪穴住居跡７軒、土坑13基、ピット62基である。遺物は主に縄文時代前期中葉黒浜式期の土器と石器・石製品が出土した。収納箱で５箱（整理箱容量：縦54㎝×横34㎝×深さ15㎝）である。総点数で1,280点、総重量で32,105ｇである。その多くが住居に伴う遺物である。調査対象範囲は1,070㎡で、前述のように調査区は１～７区の７ヵ所に分かれている。調査区は北西から南東へ傾斜しており、現地表から遺構確認面までの深さは0.5～1.5m程で、斜面という地形上、表土は下位へ行くにつれ深度を増す。各遺構は前述のように2c層中、ローム層より上層にて検出している。工場として利用され、整地もおこなわれていたために検出された遺構は撹乱を受けた部分がみられる。周辺では奈良・平安時代の竪穴住居跡も散見されているが、今回は遺物も含め、その痕跡は検出されなかった。

第２節　竪穴住居跡

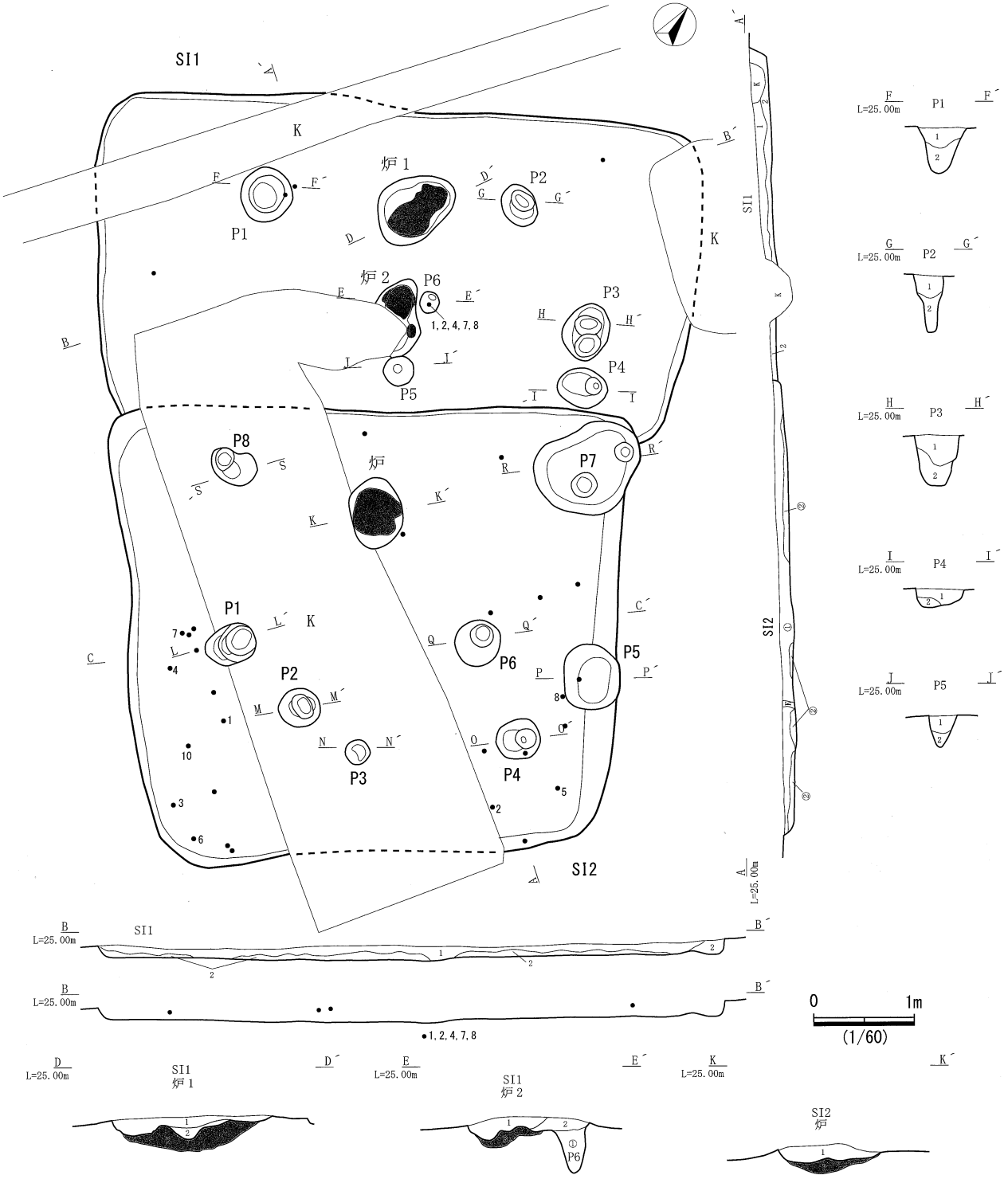
SI1（第10･11･12図、第２表、図版2･7）

〔位置〕４区F-6グリッドに位置する。南半をＳＩ２に壊されている。〔形態・規模〕一部が撹乱を受け失われている。残存する掘り込みも浅く、上部も削平されているとみられる。平面形状はやや歪な長方形を呈すると想定される。規模は、残存値で南北軸で3.1ｍ、東西軸で5.9ｍを測る。

〔覆土〕前述のように覆土は浅く含有物の違いにより分層した２層の暗褐色土と褐色土は自然堆積を呈し、床面までの深さは約15cmを測る。〔床面・壁〕床面は全体的にやや硬化している。周溝は検出されていない。壁は緩やかに立ち上がる。〔ピット〕P1～６のピット６基が検出されている。P1は最大径54cm･深さ45cm、P2は最大径43cm･深さ57cm、P3は最大径57cm･深さ50cm、P4は最大径52cm･深さ18cm、P5は最大径29cm･深さ31cm、P6は最大径22cm･深さ22cmを測る。P1～３は形状･規模より柱穴と想定されるが配置に規則性は見出せない。P5･P6は炉２に近接しており関連性が窺える。〔炉〕東西軸の中心に沿い２基を検出した。炉１の平面形状は楕円形で最大径84cm･深さ10cmを測り、よく被熱した火床面を残す。炉２は南側に撹乱を受けており失われている。平面形状は楕円形とみられ、最大径85cm･深さ10㎝を測り、よく被熱した火床面を残す。前述のようにP5･P6が近接しており、炉に関連するピットとみられる。〔遺物〕覆土中より出土した遺物は総点数で60点（うち石器１点）、総重量で2,575ｇで少なく、いずれも細片である。そのうち縄文土器８点、磨石１点を図示した。縄文土器の全ての胎土に繊維が含まれ、黒浜式土器と判断される。２の施文時の粘土隆起や４の追加成形がみられ、古相を示している。遺物の平面分布は炉周辺にやや多いように見受けられる。また、Ｐ６より出土した遺物が多く、1･2･4･7･8が含まれる。〔所見〕本遺構は、重複関係からＳＩ２より古く。出土遺物から縄文時代前期中葉黒浜式古～中段階の所産と考えられる。

SI2（第10･11･13図、第３表、図版3･7）

〔位置〕４区F-6グリッドに位置する。北側でＳＩ１を壊し構築されている。〔形態・規模〕一部が撹乱を受け失われている。残存する掘り込みも浅く、上部も削平されているとみられる。平面形状はやや歪な正方形を呈す。規模は、南北軸で4.9ｍ、東西軸で5.3ｍを測る。炉の位置より、南側が出入り口である可能性が高い。〔覆土〕覆土は浅く含有物の違いにより分層した２層の暗褐色土とに



ＳＩ１土層説明
1. 10YR3/4 暗褐色土　ローム粒・ロームブロック少量。粘性もち，締まる。
2. 10YR4/6 褐色土　褐色土混入。粘性もち，やや締まる。

ＳＩ１－Ｐ1～５土層説明
1. 10YR3/4 暗褐色土　ローム粒多量，ロームブロック少量。粘性もち，やや締まり欠く。
2. 10YR3/3 暗褐色土　ローム粒少量，ロームブロック中量。粘性もち，締まり欠く。

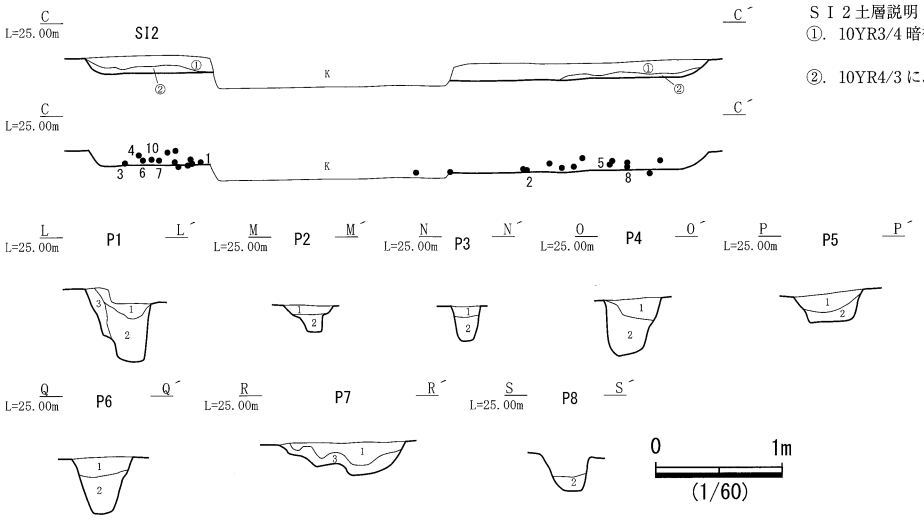
ＳＩ１－炉１土層説明
1. 10YR3/3 暗褐色土　焼土粒・焼土ブロック中量。粘性もち，締まる。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　焼土粒多量。粘性もち，締まる。
3. 2.5YR5/4 にぶい赤褐色土　焼土主体。よく被熱している。（火床）

ＳＩ２－炉土層説明
1. 10YR3/3 暗褐色土　焼土ブロック多量。粘性欠き，締まる。
2. 2.5YR5/4　にぶい赤褐色土　焼土主体。よく被熱している。（火床）

ＳＩ１－炉２土層説明
1. 10YR3/4 暗褐色土　焼土粒中量。粘性欠き，締まる。
2. 10YR4/6 暗褐色土　焼土粒少量。粘性欠き，締まる。
3. 2.5YR5/4 にぶい赤褐色土　焼土主体。よく被熱している。（火床）

ＳＩ１－Ｐ6 土層説明
①. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム粒少量。粘性もち，締まり欠く。

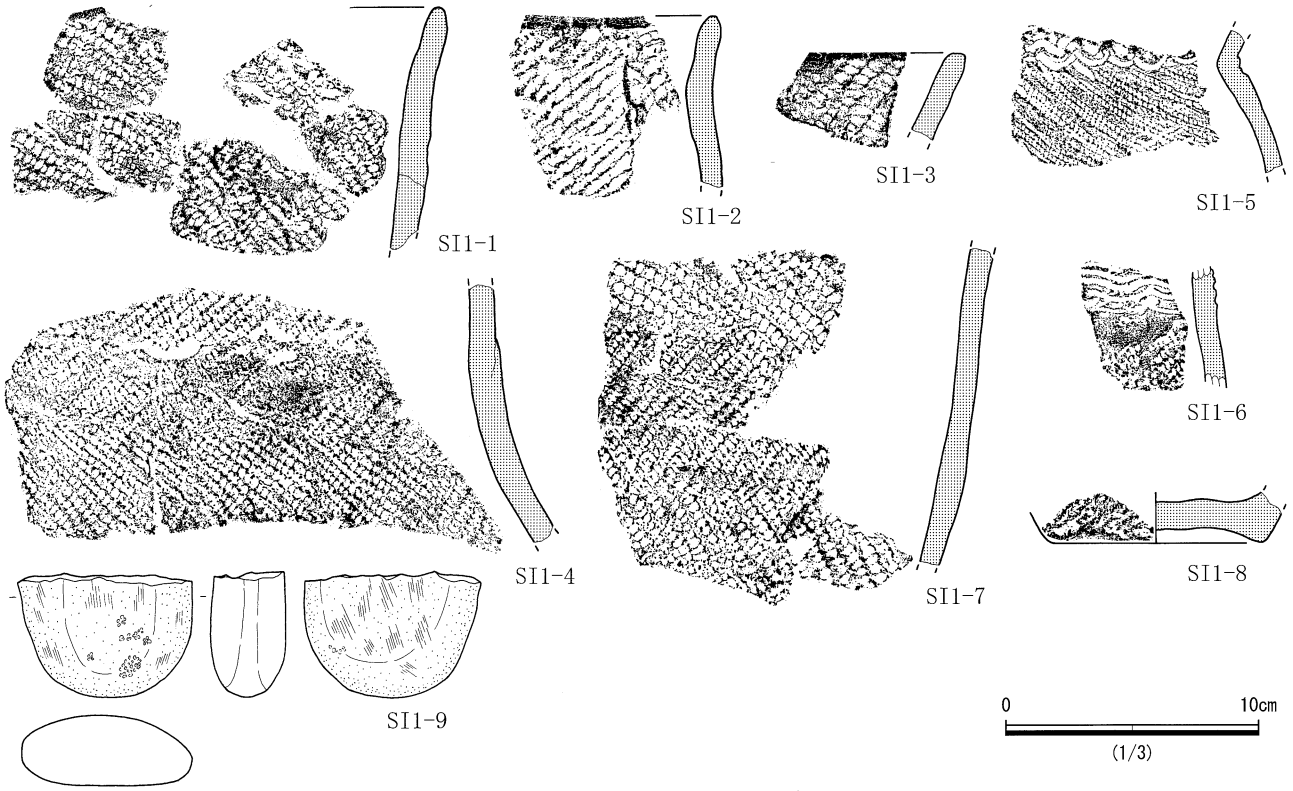
第10図　ＳＩ１・ＳＩ２①



ＳＩ２土層説明
①. 10YR3/4 暗褐色土　ローム粒少量，ロームブロック微量。粘性もち，締まる。
②. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム粒・ロームブロック中量。粘性もち，やや締まる。

ＳＩ２－P1～8土層説明
1. 10YR3/3 暗褐色土　ローム粒多量，ロームブロック・焼土粒微量。粘性もち，締まる。
2. 10YR3/4 暗褐色土　ローム粒少量。粘性もち，やや締まり欠く。
3. 10YR4/4 褐色土　ローム土主体。粘性もち，締まる。

第11図　ＳＩ１・ＳＩ２②

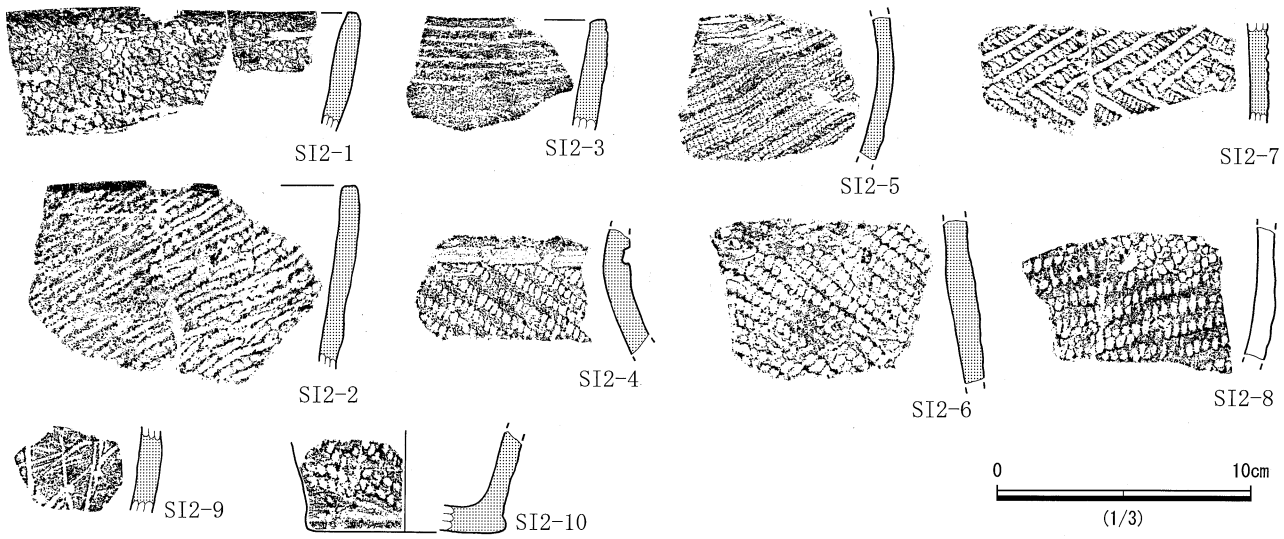


第12図　ＳＩ１出土遺物

第２表　ＳＩ１出土遺物観察表

遺構	No.	種類	器種	口径	器高	底径	文様	色調(外面:内面)	胎土	焼成	備考
SI1	1	縄文土器	深鉢	—	〈9.5〉	—	口縁部片。単節LR縄文を施文。内面は横方向の弱いナデ。	7.5YR6/4にぶい橙:7.5YR6/6橙	繊維、白色粒	普通	黒浜式
	2	縄文土器	深鉢	—	〈6.8〉	—	口縁部片。ゆるい波状口縁。無節R縄文を施文。施文時の粘土隆起。	5YR6/6橙:7.5YR5/3にぶい褐	繊維、白色粒、透明粒	普通	黒浜式
	3	縄文土器	深鉢	—	〈3.5〉	—	口縁部片。単節RL縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	5YR6/6橙:5YR6/6橙	繊維、白色粒	普通	黒浜式
	4	縄文土器	深鉢	—	〈10.2〉	—	胴部片。単節RL縄文を施文。追加成形。	7.5YR4/3褐:7.5YR7/6橙	繊維、白色粒、透明粒	普通	黒浜式
	5	縄文土器	深鉢	—	〈5.7〉	—	頸部片。頸部にコンパス文。2条1対の撚糸文Lを施文。	7.5YR5/3にぶい褐:7.5YR6/4にぶい橙	繊維、砂粒多	やや良好	黒浜式
	6	縄文土器	深鉢	—	〈4.8〉	—	胴部片。波状文、単節LR縄文を施文。	5YR5/8明赤褐:7.5YR5/4にぶい褐	繊維、砂粒少	普通	黒浜式
	7	縄文土器	深鉢	—	〈12.5〉	—	胴部片。羽状構成の単節RL縄文と単節LR縄文を施文。	7.5Y4/3褐:7.5YR6/4にぶい橙	繊維、白色粒	普通	黒浜式
	8	縄文土器	深鉢	—	〈2.0〉	8.0	底部片。単節RL縄文を施文。底部上げ底で丁寧なナデ。	7.5YR7/6橙:7.5YR6/6橙	繊維、砂粒少	普通	黒浜式
	9	石器	磨石	長さ:5.0，幅6.9，厚さ2.9，重さ:145.6g，石材:石英斑岩　50%存。表面はよく使用されている。							

＊単位:cm



第13図　ＳＩ２出土遺物

第３表　ＳＩ２出土遺物観察表

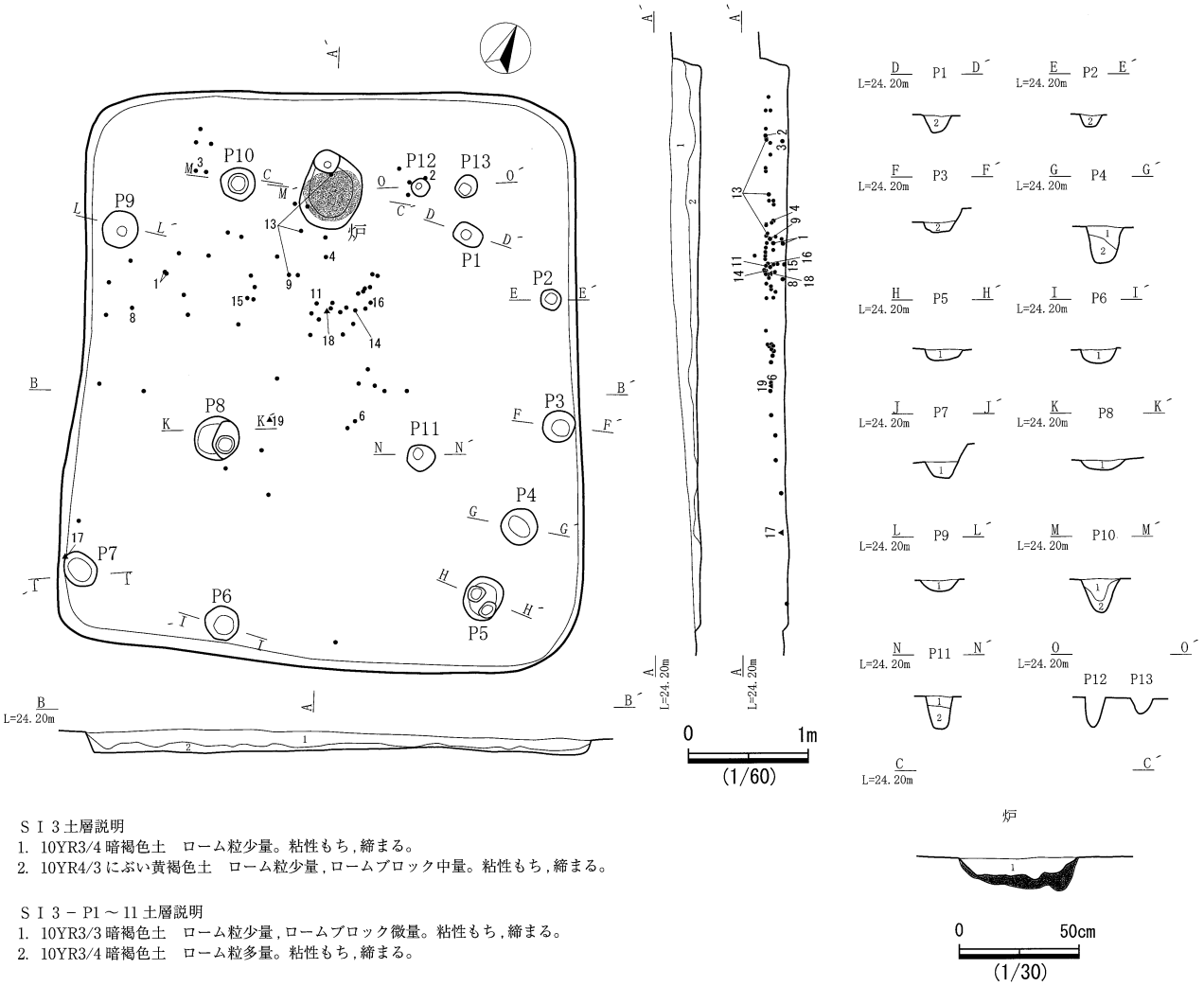
遺構	No.	種類	器種	口径	器高	底径	文様	色調(外面:内面)	胎土	焼成	備考
SI2	1	縄文土器	深鉢	—	〈4.6〉	—	口縁部片。単節RL縄文を施文。	7.5YR4/2灰褐: 7.5YR5/4にぶい褐	繊維、白色粒	普通	黒浜式
	2	縄文土器	深鉢	—	〈7.2〉	—	口縁部片。附加条1種、附加2条を施文。	7.5YR4/3褐: 5YR5/6明赤褐	繊維、白色粒、砂粒	普通	黒浜式
	3	縄文土器	深鉢	—	〈4.4〉	—	口縁部片。口縁直下に半截竹管による押引文が横走する。器面の消耗が著しい。	7.5YR5/6明褐: 7.5YR4/3褐	繊維、白色粒、砂粒	普通	黒浜式
	4	縄文土器	深鉢	—	〈4.9〉	—	胴部片。単沈線が横走する。単節RL縄文を施文。	5YR6/6橙: 7.5YR6/6橙	繊維、白色粒少	普通	黒浜式
	5	縄文土器	深鉢	—	〈5.6〉	—	胴部片。附加条1種、附加2条を施文。内面丁寧な横方向のミガキ。	7.5YR5/4にぶい褐: 10YR7/4にぶ黄橙	繊維、白色粒多	普通	黒浜式
	6	縄文土器	深鉢	—	〈6.5〉	—	胴部片。単節RL縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	5YR5/8明赤褐: 5YR5/4にぶい赤褐	繊維、白色粒少	普通	黒浜式
	7	縄文土器	深鉢	—	〈3.9〉	—	胴部片。菱形構成の附加条2種、附加1条を施文。内面は横方向のミガキ。	10YR5/4にぶい黄褐: 7.5YR6/4にぶい橙	繊維、白色粒、砂粒少	やや良好	黒浜式
	8	縄文土器	深鉢	—	〈5.3〉	—	胴部片。単節LR縄文を施文。内面は横方向の丁寧なナデ。堅緻。	5YR6/6橙: 5YR6/6橙	白色粒少、赤褐色粒微	良好	
	9	縄文土器	深鉢	—	〈3.4〉	—	胴部片。沈線による格子目文を施文。	7.5YR4/2灰褐: 7.5YR7/4にぶい橙	繊維、白色粒少	普通	黒浜式
	10	縄文土器	深鉢	—	〈4.0〉	(7.8)	底部片。単節LR縄文を施文。	7.5YR5/4にぶい褐: 7.5YR3/2黒褐	繊維、白色粒少	普通	黒浜式

＊単位:cm

ぶい黄褐色土は自然堆積を呈し、床面までの深さは約15cmを測る。〔**床面・壁**〕床面は全体的にやや硬化している。周溝は検出されていない。壁は緩やかに立ち上がる。〔**ピット**〕P1～8のピット8基が検出されている。P1･2･3･8は上部を撹乱により削平されている。P1は最大径51cm･深さ60cm、P2は最大径43cm･深さ22cm、P3は最大径25cm･深さ28cm、P4は最大径45cm･深さ44cm、P5は最大径65cm･深さ24cm、P6は最大径48cm･深さ45cm、P7は最大径105cm･深さ25cm、P8は最大径48cm･深さ30cmを測る。P1･4･6･8は形状･規模より柱穴と想定されるが配置に規則性は見出せない。P7は口径が開くが浅く、貯蔵穴の可能性もある。〔**炉**〕中心より北寄りに1基を検出した。炉の平面形状は楕円形で最大径71cm･深さ10cmを測り、よく被熱した火床面を残す。〔**遺物**〕覆土中より出土した遺物は総点数で83点、総重量で2,080ｇと少なく、石器は出土していない。土器はいずれも細片である。そのうち縄文土器10点を図示した。縄文土器のほぼ全てが胎土に繊維が含まれ、黒浜式土器と判断され、ＳＩ１より新相とみられる。2･5･7では附加条縄文、9では格子目文がみられ、8は胎土に繊維が含まれず「釈迦堂Ｚ３式」に類するような異系統土器であろうか。「釈迦堂Ｚ３式」の特徴はみられず、胎土は赤褐色粒が目立ち雲母は含まれていない。器壁は薄くはないが堅緻で外面は単節縄文が施文される。内面に指頭圧痕はなく、丁寧な横ナデが施される。出土位置は床面に近く、混入遺物とはみられない。遺物の平面分布は南半側に多いように見受けられる。〔**所見**〕本遺構は、重複関係からもＳＩ１より新しく。出土遺物から縄文時代前期中葉黒浜式中段階の所産と考えられる。

SI3（第14･15図、第4表、図版3･7･8）

〔位置〕5区I-7グリッドに位置する。〔形態・規模〕遺存状況は比較的良好であるが、南側でやや上部を削平されているとみられる。平面形状はやや歪な長方形を呈す。規模は、南北軸で4.8 m、東西軸で4.4 mを測る。炉の位置より、南側が出入り口である可能性が高い。〔覆土〕含有物の違いにより分層した2層の暗褐色土とにぶい黄褐色土は自然堆積を呈し、床面までの深さは約25cmを測る。〔床面・壁〕床面は全体的にやや硬化している。周溝は検出されていない。壁は緩やかに立ち上がる。〔ピット〕P1～13のピット13基が床面より検出されている。P1は最大径23cm･深さ13cm、P2は最大径18cm･深さ8cm、P3は最大径26cm･深さ8cm、P4は最大径29cm･深さ30cm、P5は最大径38cm･深さ8cm、P6は最大径29cm･深さ10cm、P7は最大径33cm･深さ12cm、P8は最大径37cm･深さ8cm、P9は最大径30cm･深さ10cm、P10は最大径30cm･深さ27cm、P11は最大径23cm･深さ26cm、P12は最大径16cm･深さ28cm、P13は最大径20cm･深さ13cmを測る。P4･10･11･12は形状・規模より柱穴と想定されるが配置に規則性は見出せない。位置関係のみで判断すれば、P8･10･11･12が柱穴となるが浅い貧弱なピットが含まれる。〔炉〕中心より北寄りに1基を検出した。炉の平面形状は楕円形で最大径66cm･深さ8cmを測り、よく被熱した火床面を残す。また、径20cm、深さ53cm



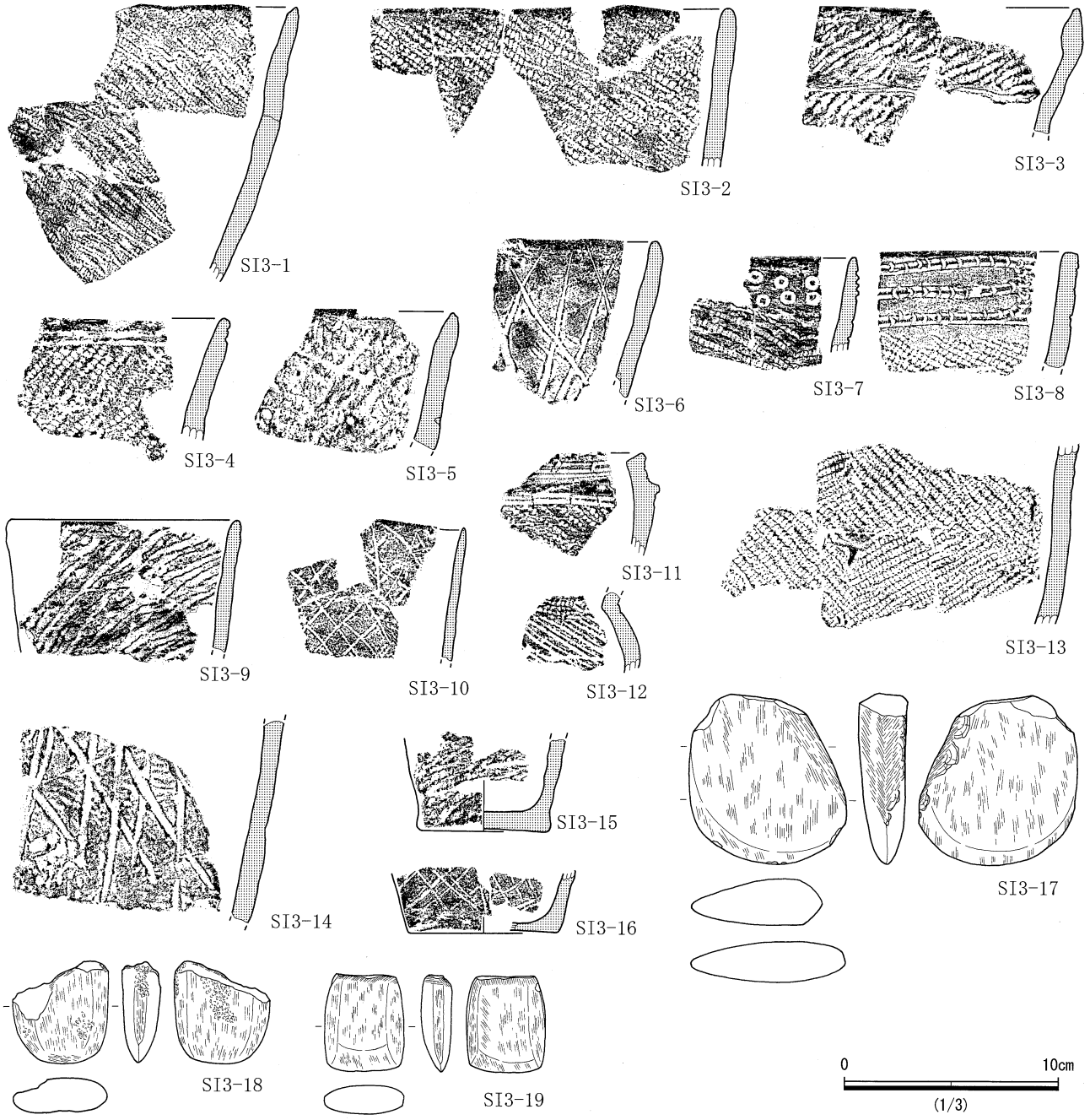
ＳＩ３土層説明
1. 10YR3/4暗褐色土　ローム粒少量。粘性もち，締まる。
2. 10YR4/3にぶい黄褐色土　ローム粒少量，ロームブロック中量。粘性もち，締まる。

ＳＩ３－P1～11土層説明
1. 10YR3/3暗褐色土　ローム粒少量，ロームブロック微量。粘性もち，締まる。
2. 10YR3/4暗褐色土　ローム粒多量。粘性もち，締まる。

ＳＩ３－炉土層説明
1. 10YR3/3暗褐色土　焼土粒中量，焼土ブロック微量。粘性もち，締まる。
2. 2.5YR5/4にぶい赤褐色土　焼土主体。よく被熱している。（火床）

第14図　ＳＩ３

の小ピットが伴う。〔**遺物**〕覆土中より出土した遺物は総点数で330点（うち石器3点）、総重量で7,370ｇと比較的まとまった量が出土している。土器はいずれも細片であるが、そのうち縄文土器16点、石器3点を図示した。縄文土器の全てが胎土に繊維が含まれ、黒浜式土器と判断される。1は結節回転文、2は附加条縄文、7は撚糸文、3･9･15が無節縄文、13では菱形構成の縄文と多様性に富む。6･10･14･16では沈線による格子目文がみられ、16は胴部の開き方により、鉢形土器の可能性が想定される。17･18･19はいずれも上端部を欠失している磨製石斧である。石材が乏しい状況であった古奥東京湾の同時期の遺跡と類するように石器は当地域でも貴重であり、大切に使用されていた状況が窺える。これら出土遺物はＳＩ１・２よりも新相を示している。遺物の平面分布は北側、炉周辺に多いように見受けられる。〔**所見**〕本遺構は、出土遺物から縄文時代前期中葉黒浜式中段階の所産と考えられる。



第15図　ＳＩ３出土遺物

第４表　ＳＩ３出土遺物観察表

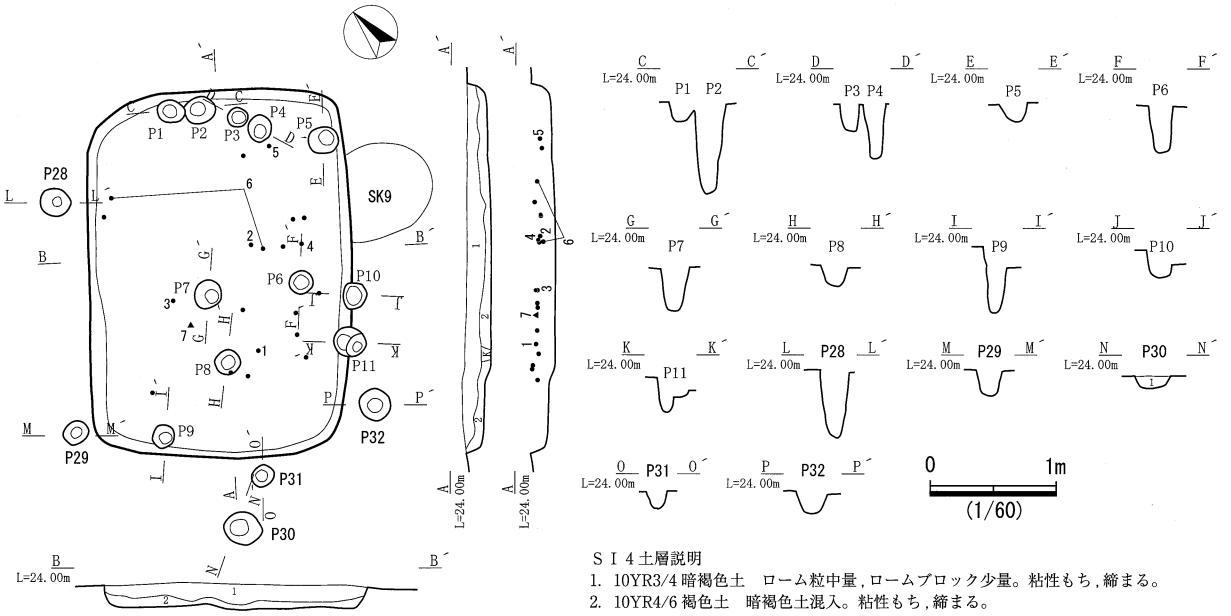
遺構	No.	種類	器種	口径	器高	底径	文様	色調(外面:内面)	胎土	焼成	備考
SI3	1	縄文土器	深鉢	—	〈12.8〉	—	口縁部片。結節縄文、単節RL縄文を施文。	5YR6/4にぶい橙: 5YR6/6橙	繊維、白色粒、砂粒少	普通	黒浜式
	2	縄文土器	深鉢	—	〈7.4〉	—	口縁部片。ゆるい波状口縁。附加条1種、附加1条を施文。	7.5YR7/6橙: 7.5YR6/4にぶい橙	繊維、白色粒、透明粒	普通	黒浜式
	3	縄文土器	深鉢	—	〈5.9〉	—	口縁部片。無節L縄文を施文。	7.5YR4/4褐: 5YR5/4にぶい赤褐	繊維、白色粒	普通	黒浜式
	4	縄文土器	深鉢	—	〈5.7〉	—	口縁部片。口縁直下に沈線が横走する。単節LR縄文を施文。	7.5YR4/3褐: 5YR6/6橙	繊維、白色粒	普通	黒浜式
	5	縄文土器	深鉢	—	〈6.4〉	—	口縁部片。棒状工具による刺突文、無節L縄文を施文。	7.5YR5/4にぶい褐: 7.5YR4/2灰褐	繊維、白色粒、砂粒	普通	黒浜式
	6	縄文土器	深鉢	—	〈7.3〉	—	口縁部片。沈線による格子目文を施文。	7.5YR4/3褐: 7.5YR4/1褐灰	繊維、白色粒、砂粒	普通	黒浜式
	7	縄文土器	深鉢	—	〈4.4〉	—	口縁部片。口縁直下に2列の円形刺突文、撚糸文Lを施文。内面は横方向のミガキ。	5YR4/6赤褐: 2.5YR4/6赤褐	繊維、白色粒	やや良好	黒浜式
	8	縄文土器	深鉢	—	〈5.4〉	—	口縁部片。口縁直下に半截竹管で爪形文が押引きするように施文され文様を描出する。単節RL縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5YR6/4にぶい橙: 10YR8/4浅黄橙	繊維多、白色粒	良好	黒浜式
	9	縄文土器	深鉢	(10.6)	〈6.2〉	—	口縁部片。無節R縄文を施文。	7.5YR4/3褐: 7.5YR5/4にぶい褐	繊維、白色粒、透明粒	普通	黒浜式
	10	縄文土器	鉢形土器	—	〈6.2〉	—	口縁部片。波状口縁。沈線による格子目文を施文。	7.5YR5/4にぶい褐: 5YR5/6明赤褐	繊維、白色粒少	普通	黒浜式 №16 同一個体ヵ。
	11	縄文土器	深鉢	—	〈4.8〉	—	口縁部片。口縁直下に半截竹管による押引文と隆帯が横走する。単節LR縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	5YR5/6明赤褐: 5YR6/6橙	繊維、白色粒少	普通	黒浜式
	12	縄文土器	深鉢	—	〈3.7〉	—	頸部片。頸部に連続刺突文。以下単沈線を密に施文する。器面の消耗が著しい。	7.5YR7/6橙: 7.5YR6/4にぶい橙	繊維、白色粒微	普通	黒浜式
	13	縄文土器	深鉢	—	〈8.4〉	—	胴部片。菱形構成の単節RL縄文と単節LR縄文を施文。内面は縦方向のミガキ。	10YR5/2灰黄褐: 10YR7/4にぶい黄橙	繊維、白色粒、透明粒	やや良好	黒浜式
	14	縄文土器	深鉢	—	〈9.5〉	—	胴部片。沈線による格子目文を施文。	5YR6/6橙: 7.5YR5/4にぶい褐	繊維、白色粒、透明粒	普通	黒浜式
	15	縄文土器	深鉢	—	〈4.3〉	(6.0)	胴部下端～底部片。無節R縄文を施文。	7.5YR5/3にぶい褐: 7.5YR5/2灰褐	繊維少、白色粒	普通	黒浜式
	16	縄文土器	鉢形土器	—	〈2.9〉	(7.0)	胴部下端～底部片。沈線による格子目文を施文。	5YR6/6橙: 5YR5/6明赤褐	繊維、白色粒少	普通	黒浜式 №10 同一個体ヵ。
	17	石器	磨製石斧	長さ:8.0, 幅7.2, 厚さ2.2, 重さ:172.3g, 石材:閃緑岩　50%存。上端部欠失。刃部は幅広。全面よく研磨されている。							
	18	石器	磨製石斧	長さ:4.8, 幅4.5, 厚さ1.8, 重さ:53.7g, 石材:緑色凝灰岩　20%存。刃部のみ。全面よく研磨されている。							
	19	石器	磨製石斧	長さ:4.6, 幅3.7, 厚さ1.4, 重さ:39.9g, 石材砂岩　50%存。上端部欠失。全面よく研磨されている。							

＊単位:cm

SI4（第 16･17 図、第 5 表、図版 4･8）

〔位置〕５区 I-7 グリッドに位置する。ＳＫ９を壊す。〔形態・規模〕他と比してやや小規模である。平面形状は長方形を呈す。規模は、南北軸で 3.0 m、東西軸で 2.1 m を測る。竪穴外となる周囲にピットがみられる（P28･29･30･31･32）が、関連性は不明瞭である。〔覆土〕覆土は浅く含有物の違いにより分層した 2 層の暗褐色土と褐色土は自然堆積を呈し、床面までの深さは約 20cm を測る。

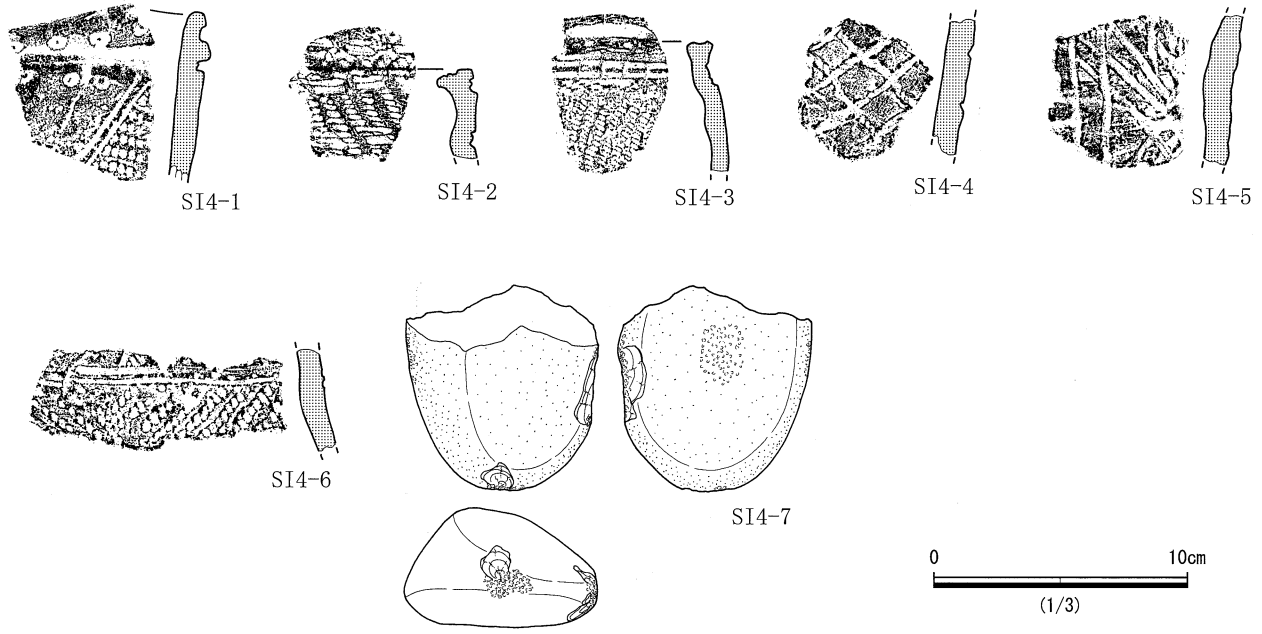
〔床面・壁〕床面は全体的にやや硬化している。周溝は検出されていない。壁は緩やかに立ち上がる。〔ピット〕P1 ～ 11 のピット 11 基が検出されている。P1 は最大径 23cm･ 深さ 15cm、P2 は最大径 24cm･ 深さ 70cm、P3 は最大径 16cm･ 深さ 23cm、P4 は最大径 23cm･ 深さ 45cm、P5 は最大径 23cm･ 深さ 15cm、P6 は最大径 19cm･ 深さ 36cm、P7 は最大径 23cm･ 深さ 35cm、P8 は最大径 20cm･ 深さ 15cm、P9 は最大径 19cm･ 深さ 36cm、P10 は最大径 19cm･ 深さ 22cm、P11 は最大径 25cm･ 深さ 29cm を測る。いずれも径が小さく、配置に規則性は見出せないが、深いものも含まれる。また、P10･11 は壁に掘り込まれている。単独のピットとして扱った P28･29･30･31･32 もＳＩ４を囲うように配されているようにも見受けられるが、関連するピットと断定は難しい。〔炉〕検出されなかった。〔遺物〕覆土中より出土した遺物は総点数で 39 点（うち石器 1 点）、総重量で 1,448 g と遺構の規模もあるが少ない。土器はいずれも細片であるが、そのうち縄文土器 6 点、石器 1 点を図示した。縄文土器の全てが胎土に繊維が含まれ、黒浜式土器と判断される。2 は口唇部に面を有し、口縁部同様に刺突文が施される。4 は網目状撚糸文であるが、大木 2a 式の影響により格子目文が変容したものであろうか。5 は 2 本 1 組の太く浅い沈線による格子目文である。7 は半分欠失しているが磨痕ももつ敲石とみられる。これら出土遺物はＳＩ３より古相を示し、ＳＩ２に近い時期とみられる。〔所見〕本遺構は、出土遺物から縄文時代前期中葉黒浜式中段階の所産と考えられる。



ＳＩ４土層説明
1. 10YR3/4 暗褐色土　ローム粒中量，ロームブロック少量。粘性もち，締まる。
2. 10YR4/6 褐色土　暗褐色土混入。粘性もち，締まる。

Ｐ 30 土層説明
1. 10YR3/4 暗褐色土　ローム粒少量。粘性もち，締まる。

第 16 図　ＳＩ４



第 17 図　ＳＩ４出土遺物

第５表　ＳＩ４出土遺物観察表

遺構	No.	種類	器種	口径	器高	底径	文様	色調(外面:内面)	胎土	焼成	備考
SI4	1	縄文土器	深鉢	—	〈6.8〉	—	口縁部片。ゆるやかな波状口縁。隆帯貼付、円形刺突文、2条1組の平行沈線で区画し単節RL縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5YR7/4にぶい橙: 7.5YR5/3にぶい褐	繊維、白色粒、赤褐色粒	やや良好	黒浜式
	2	縄文土器	深鉢	—	〈3.5〉	—	口縁部片。口唇部平坦。口唇部と口縁直下に2本1組の棒状工具による刺突文が横走する。単節LR縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5YR7/6橙: 5YR6/6橙	繊維、白色粒	普通	黒浜式
	3	縄文土器	深鉢	—	〈5.1〉	—	口縁部片。口縁直下に隆帯、半截竹管状工具による押引き文、単節LR縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5YR4/2灰褐: 5YR6/6橙	繊維、白色粒	普通	黒浜式
	4	縄文土器	深鉢	—	〈5.3〉	—	胴部片。網目状撚糸文Lを施文。	5YR2/3極暗赤褐: 7.5YR3/2黒褐	繊維、白色粒、赤褐色粒	普通	黒浜式
	5	縄文土器	深鉢	—	〈5.9〉	—	胴部片。沈線による格子目文を施文。	10YR7/4にぶい黄橙: 10YR4/2灰黄褐	繊維、白色粒	普通	黒浜式
	6	縄文土器	深鉢	—	〈4.0〉	—	胴部片。沈線が横走、単節LR縄文を施文。	7.5YR3/1黒褐: 7.5YR6/6橙	繊維、白色粒、砂粒少	普通	黒浜式
	7	石器	敲石	長さ:8.1，幅7.6，厚さ4.7，重さ:323.5g，石材:安山岩　50%存。断面三角形。広い面の中央窪む。よく使用され、被熱している。							

＊単位:cm

SI5（第18·19·20·21図、第6表、図版4·5·8·9·10）

〔位置〕6区F·G–8·9グリッドに位置する。〔形態·規模〕東側の一部が撹乱を受け失われているが、比較的遺存度は良好である。平面形状はやや歪な長方形を呈す。規模は、南北軸で6.9 m、東西軸で5.3 mを測る。今回、検出された7軒中最も規模が大きい。〔覆土〕含有物の違いにより分層した4層のにぶい黄褐色土と暗褐色土は自然堆積を呈し、床面までの深さは約32cmを測る。〔床面・壁〕床面

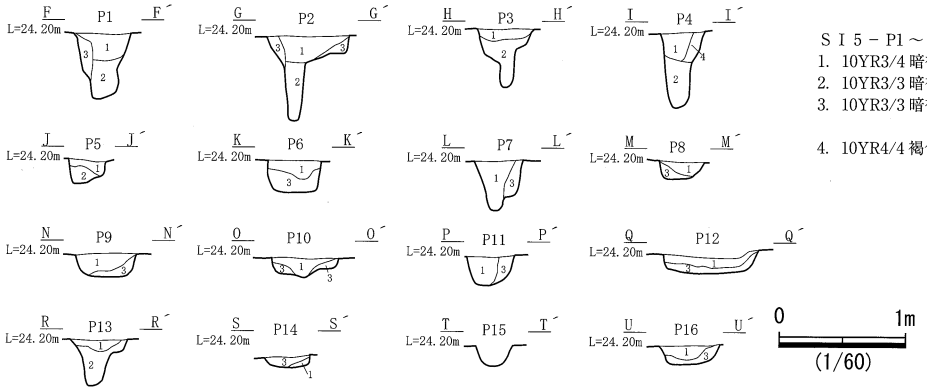
ＳＩ５土層説明
1. 10YR4/3にぶい黄褐色土　ロームブロック多量。粘性もち，やや締まり欠く。
2. 10YR3/3暗褐色土　ローム粒中量，焼土粒微量。粘性もち，やや締まり欠く。
3. 10YR3/4暗褐色土　ローム粒・ロームブロック中量・焼土粒少量。粘性もち，締まる。
4. 10YR3/4暗褐色土　ローム粒中量・焼土粒中量。粘性もち，締まる。

ＳＩ５－炉1～3土層説明
1. 10YR4/3にぶい黄褐色土　焼土粒多量。粘性もち，締まる。
2. 10YR5/3にぶい黄褐色土　焼土粒中量。粘性もち，やや締まり欠く。
3. 10YR3/3暗褐色土　ローム粒・ロームブロック少量・焼土粒多量。粘性もち，締まる。
4. 2.5YR5/4にぶい赤褐色土　焼土主体。よく被熱している。（火床）

ＳＩ５－炉4土層説明
1. 10YR3/3暗褐色土　焼土粒中量。粘性もち，締まる。
2. 10YR4/3にぶい黄褐色土　被熱している。粘性欠き，締まる。
3. 10YR4/4褐色土　ローム土主体。よく被熱している。

ＳＩ５－炉5土層説明
1. 10YR3/3暗褐色土　ローム少量・焼土粒中量。粘性もち，締まる。
2. 10YR4/4褐色土　ローム土主体。よく被熱している。

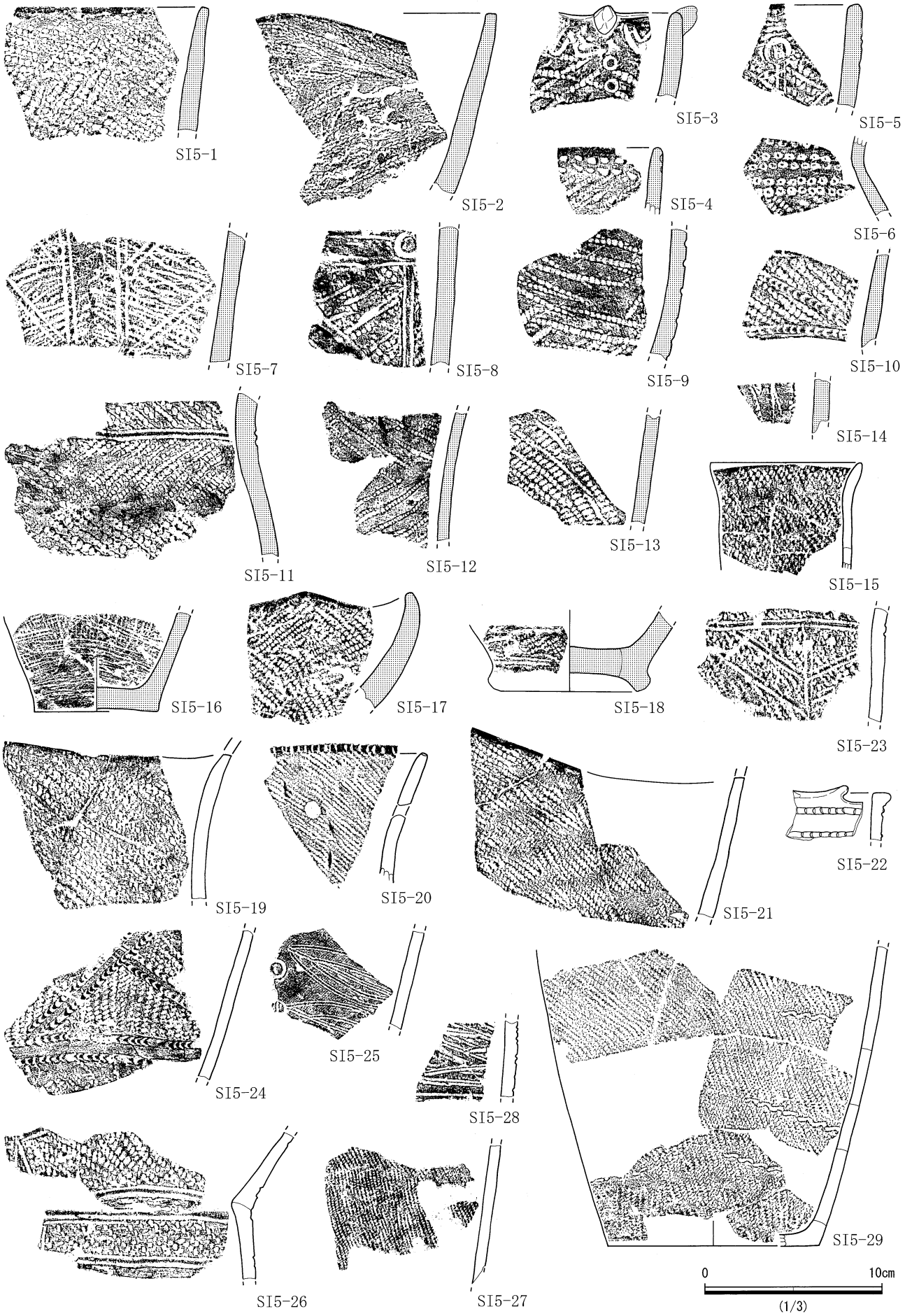
第18図　ＳＩ５①



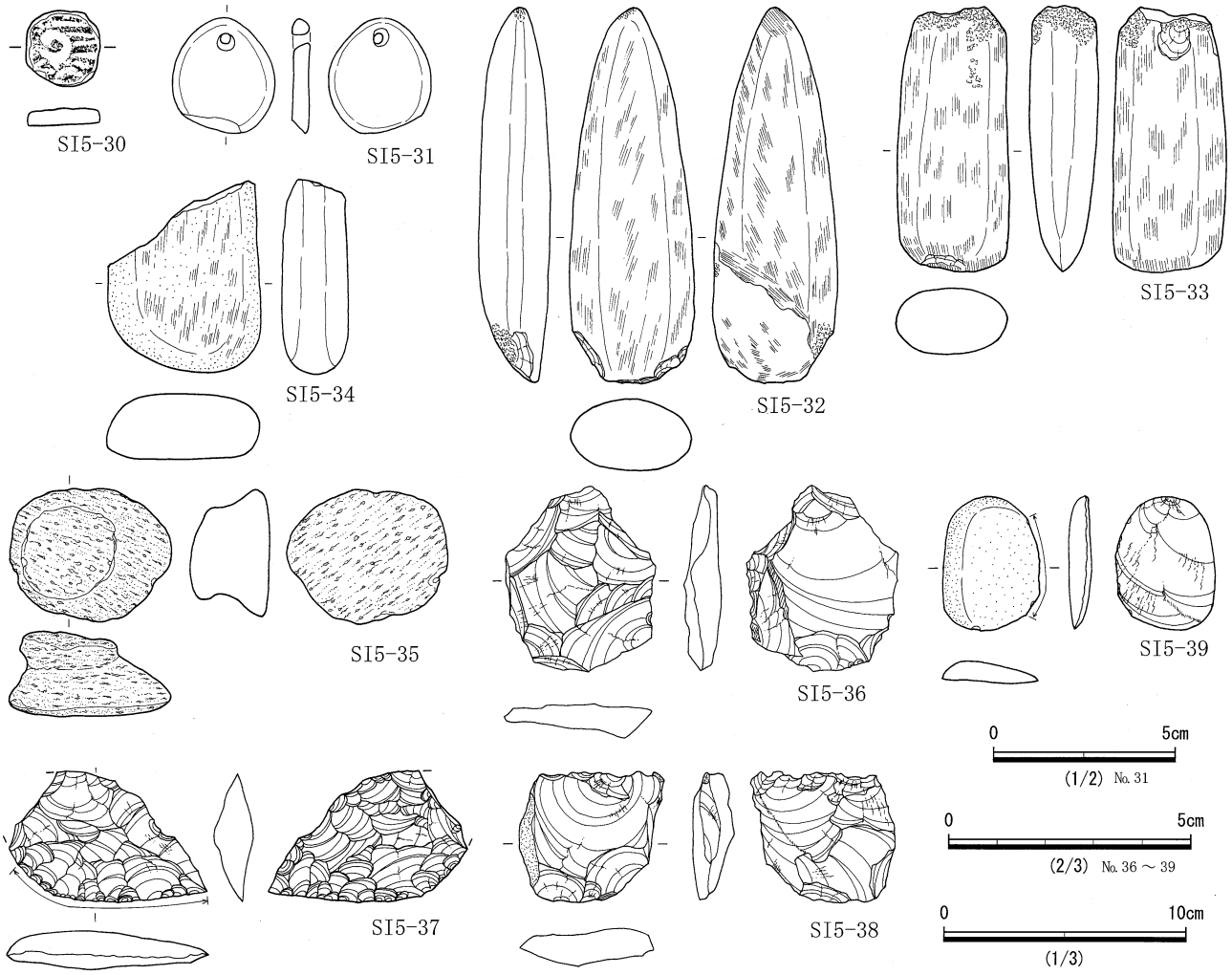
ＳＩ５－P1～14･16 土層説明
1. 10YR3/4 暗褐色土　ローム粒少量。粘性もち，締まる。
2. 10YR3/3 暗褐色土　ローム粒少量粘性もち，やや締まり欠く。
3. 10YR3/3 暗褐色土　ローム粒・ロームブロック少量。粘性もち，締まる。
4. 10YR4/4 褐色土　ローム土主体。粘性もち，締まる。

第19図　ＳＩ５②

は全体的にやや硬化している。周溝は検出されていない。壁は緩やかに立ち上がる。〔**ピット**〕P1～16のピット16基が床面より検出されている。P1は最大径54cm･深さ52cm、P2は最大径65cm･深さ67cm、P3は最大径40cm･深さ47cm、P4は最大径44cm･深さ58cm、P5は最大径39cm･深さ15cm、P6は最大径45cm･深さ26cm、P7は最大径42cm･深さ38cm、P8は最大径34cm･深さ13cm、P9は最大径58cm･深さ18cm、P10は最大径60cm･深さ15cm、P11は最大径41cm･深さ11cm、P12は最大径72cm･深さ15cm、P13は最大径44cm･深さ46cm、P14は最大径42cm･深さ10cm、P15は最大径28cm･深さ16cm、P16は最大径70cm･深さ75cmでテラス部分は15cmを測る。P1･2･3･4は形状･規模、配置状況より主柱穴と想定される。P7･13･16も柱穴とみられるが補助的なものか。あるいは建て替えも想定される。P12は口径が開き浅く、貯蔵穴の可能性もある。〔**炉**〕中央より北寄りに3基が並ぶように検出された。炉1･2･3は近接して規則的に並んでおり、同時に使用されていたものとみられる。また、炉4･5も並ぶように検出されており、よく被熱しているが焼土は少ない。あるいは建て替え前に使用されていた炉である可能性も想定される。炉1の平面形状は長楕円形で最大径110cm･深さ8cm、炉2の平面形状は楕円形で最大径60cm･深さ9cmで径20cm、深さ45cmほどの小ピットを伴う。炉3の平面形状は歪な長楕円形で最大径88cm･深さ7cmを測る。いずれもよく被熱した火床面を残す。炉4の平面形状は楕円形で最大径48cm･深さ6cm、炉5の平面形状は楕円形で最大径56cm･深さ8cmを測る。炉1･2･3に比して炉4･5の火床面の遺存度はわるい。〔**遺物**〕覆土中より出土した遺物は総点数で295点（うち土製品1点・石器10点・石製品1点）、総重量で8,855ｇと比較的まとまった量が出土している。土器はいずれも細片であるが、そのうち縄文土器29点、土製品1点、石器8点、石製品1点を図示した。ＳＩ５の縄文土器には繊維土器と無繊維土器の両者が含まれ共伴している。図示した1～14･16には胎土に繊維が含まれ、15･19～29には胎土に繊維が含まれていなかった。無繊維土器は全体で47点出土し、そのほとんどが諸磯ａ式古段階とみられ約17％を占める。1～18には羽状縄文、円形竹管文、菱形構成をとる撚糸文、爪形文による米字文など黒浜式新段階の諸特徴がみられる。19～29はいずれも堅緻であり、20･27の緻密な縄文、24の対角線状の爪形文間の磨消縄文、23･25の黒浜式より引き継がれた肋骨文など諸磯ａ式古段階の諸特徴がみられる。次に前述のように石材が乏しい地域下でＳＩ５からは多くの石器･石製品が検出された。P16からは31の石製垂飾、炉1からは黒曜石製の石匙とみられる石器が出土したほか、32の乳棒状磨製石斧や35の特徴的な石冠状の浮子など豊富な石器類が出土している。出土遺物の平面分布は全体的に散在しており、偏重は認められない。〔**所見**〕本遺構は、出土遺物から縄文時代前期中葉黒浜式新段階から諸磯ａ式古段階の過渡的な時期の所産と考えられる。



第20図　ＳＩ５出土遺物①



第21図　ＳＩ５出土遺物②

第６表　ＳＩ５出土遺物観察表

遺構	No.	種類	器種	口径	器高	底径	文様	色調(外面:内面)	胎土	焼成	備考
SI5	1	縄文土器	深鉢	—	〈7.1〉	—	口縁部片。羽状構成の単節RL縄文と単節LR縄文を施文。	7.5YR4/2灰褐: 7.5YR5/3にぶい褐	繊維、白色粒、砂粒少	普通	黒浜式
	2	縄文土器	深鉢	—	〈10.2〉	—	口縁部片。羽状構成をとる2条1単位の撚糸文LとRを施文。内面は横方向のミガキ。	7.5YR5/3にぶい褐: 7.5YR7/4にぶい橙	繊維、白色粒	普通	黒浜式
	3	縄文土器	深鉢	—	〈5.2〉	—	口縁部片。ゆるい波状口縁。小突起を付し、縦位野円形竹管文、撚糸文Lを施文。	10YR5/3にぶい黄褐: 7.5YR5/3にぶい褐	繊維、白色粒微	普通	黒浜式
	4	縄文土器	深鉢	—	〈3.9〉	—	口縁部片。口縁直下に2列の単沈線。単節LR縄文を施文。	7.5YR5/3にぶい褐: 7.5YR5/6明褐:	繊維、白色粒、透明粒微	普通	黒浜式
	5	縄文土器	深鉢	—	〈5.8〉	—	口縁部片。口縁直下に3本1組の刺突文を巡らし、隆帯が横走する。円形竹管文、単節RL縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5YR5/3にぶい褐: 7.5YR6/4にぶい橙:	繊維、白色粒微	普通	黒浜式
	6	縄文土器	深鉢	—	〈4.5〉	—	頸部片。2列1組の円形竹管文が横走する。単節RL縄文を施文。	7.5YR5/6明褐: 7.5YR3/1黒褐	繊維、白色粒、砂粒	普通	黒浜式
	7	縄文土器	深鉢	—	〈7.5〉	—	胴部片。2条1組の平行沈線による肋骨文。単節LR縄文を施文。内面は縦方向のミガキ。	7.5YR6/6橙: 7.5YR8/3浅黄橙	繊維、白色粒、透明粒	普通	黒浜式
	8	縄文土器	深鉢	—	〈7.8〉	—	胴部片。半截竹管状工具による2条1組の平行沈線で米字文。円形竹管文、附加条1種、附加1条を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5YR4/1褐灰: 7.5YR6/4にぶい橙	繊維、白色粒、砂粒少	普通	黒浜式
	9	縄文土器	深鉢	—	〈7.4〉	—	胴部片。撚糸文Lを施文。内面は横方向のミガキ。	7.5YR6/6橙: 7.5YR7/4にぶい橙	繊維、白色粒、赤褐色微	普通	黒浜式
	10	縄文土器	深鉢	—	〈5.2〉	—	胴部片。爪形文による米字文。単節RL縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5YR7/4にぶい橙: 7.5YR7/4にぶい橙	繊維、白色粒微、砂粒微	やや良好	黒浜式
	11	縄文土器	深鉢	—	〈9.2〉	—	頸～胴部片。頸部を2条1組の平行沈線が横走する。羽状構成の単節RL縄文と単節LR縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5YR5/2灰褐: 5YR6/6橙	繊維、白色粒、砂粒少	普通	黒浜式
	12	縄文土器	深鉢	—	〈7.2〉	—	胴部片。菱形構成の撚糸文Lを施文。内面は横方向のミガキ。	5YR6/6橙: 5YR6/4にぶい橙	繊維、白色粒少	普通	黒浜式
	13	縄文土器	深鉢	—	〈6.0〉	—	胴部片。附加条2種、附加1条を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5YR4/1褐灰: 7.5YR5/4にぶい褐	繊維、白色粒、透明粒微	普通	黒浜式
	14	縄文土器	深鉢	—	〈3.0〉	—	胴部片。鋸歯状に貝殻復縁文を施文。内面は横方向のミガキ。	5YR6/6橙: 5YR6/4にぶい橙	繊維少、白色粒微	普通	黒浜式
	15	縄文土器	深鉢	—	〈6.0〉	—	口縁～胴部片。単節RL縄文を施文。内面は丁寧な横方向のミガキ。	5YR4/2灰褐: 2.5YR5/6明赤褐	白色粒、透明粒微	良好	黒浜式
	16	縄文土器	深鉢	—	〈5.5〉	6.8	胴部下端～底部片。横方向の条線文。	5YR6/6橙: 7.5YR4/2灰褐	繊維、白色粒、砂粒少	普通	黒浜式
	17	縄文土器	深鉢	—	〈6.5〉	—	口縁部片。ゆるい波状口縁。菱形構成の単節RL縄文と単節LR縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	5YR6/6橙: 7.5YR6/2灰褐	繊維、白色粒、砂粒	普通	黒浜式 No.18 同一個体ヵ。

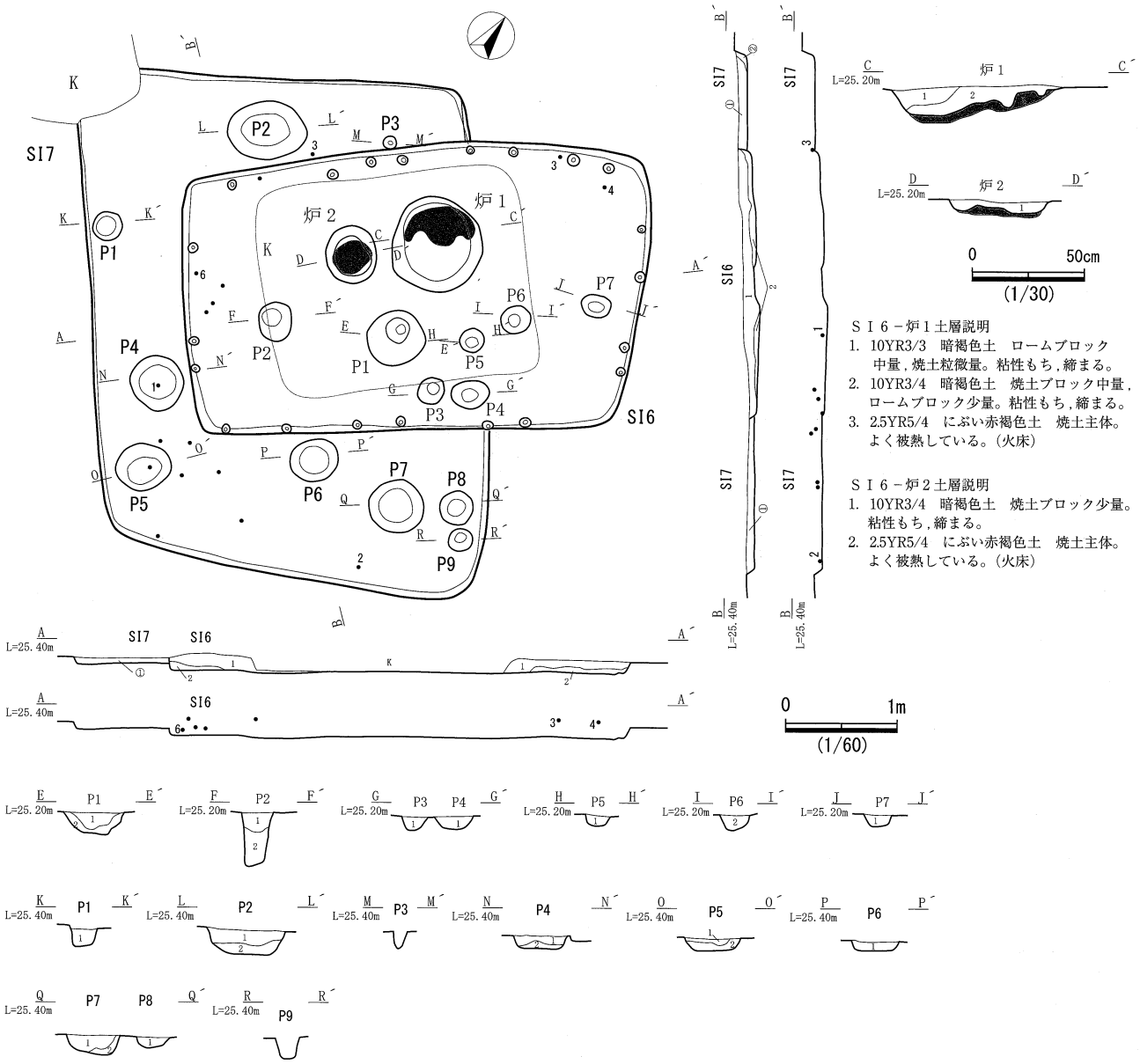
＊単位:cm

遺構	No.	種類	器種	口径	器高	底径	文様	色調(外面:内面)	胎土	焼成	備考
SI5	18	縄文土器	深鉢	—	〈4.4〉	—	底部片。単節RL縄文を施文。上げ底。	5YR6/4にぶい橙: 5YR4/1褐灰	繊維少、白色粒、砂粒	普通	黒浜式 No.17同一個体ヵ。
	19	縄文土器	深鉢	—	〈8.2〉	—	口縁部片。波状口縁。単節RL縄文を施文。内面横ナデ。	7.5YR5/3にぶい褐: 7.5YR6/2灰褐	白色粒、砂粒	普通	諸磯a(古)式
	20	縄文土器	深鉢	—	〈7.3〉	—	口縁部片。口唇部に刻み。穿孔あり。単節RL縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	10YR6/4にぶい黄橙: 7.5YR7/4にぶい橙	白色粒、砂粒	普通	諸磯a(古)式
	21	縄文土器	深鉢	—	〈7.9〉	—	口縁部片。波状口縁。単節RL縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5YR3/1黒褐: 7.5YR7/4にぶい橙	白色粒、雲母	良好	諸磯a(古)式
	22	縄文土器	深鉢	—	〈3.1〉	—	口縁部片。貼付突起。2列の爪形文が横走する。突起部や内面は丁寧な横方向のミガキ。	5YR5/2灰褐: 2.5YR6/4にぶい橙	白色粒、砂粒微	良好	諸磯a(古)式 No.24同一個体ヵ。
	23	縄文土器	深鉢	—	〈6.3〉	—	胴部片。半截竹管状工具による2条1組の平行沈線で肋骨文。単節RL縄文を施文。	7.5YR7/6橙: 7.5YR6/6橙	白色粒、砂粒多	普通	諸磯a(古)式
	24	縄文土器	深鉢	—	〈8.4〉	—	胴部片。擂り消し縄文に爪形文を沿わせ、対角線文を描出する。地文は単節RL縄文を施文。内面は丁寧な縦方向のミガキ。	7.5YR7/6橙: 5YR7/4にぶい橙	白色粒、砂粒微	良好	諸磯a(古)式 No.22同一個体ヵ。
	25	縄文土器	深鉢	—	〈5.5〉	—	胴部片。縦方向に円形竹管文、半截竹管状工具による2条1組の平行沈線で肋骨文を施文。内面は丁寧な横方向のミガキ。	7.5YR4/3褐: 5YR4/6赤褐	白色粒、砂粒少	良好	諸磯a(古)式
	26	縄文土器	深鉢	—	〈8.4〉	—	頸部片。頸部に半截竹管状工具による2条1組の平行沈線が横走する。単節RL縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	5YR6/6橙: 5YR5/6明赤褐	白色粒、砂粒、雲母微	普通	諸磯a(古)式
	27	縄文土器	深鉢	—	〈7.8〉	—	胴部片。細かな単節RL縄文を施文。内面は縦方向のミガキ。	7.5YR5/2灰褐: 7.5YR6/3にぶい褐	白色粒、砂粒	やや良好	諸磯a(古)式
	28	縄文土器	深鉢	—	〈4.3〉	—	胴部片。半截竹管状工具による2条1組の平行沈線を密に施文。	7.5YR7/6橙: 7.5YR5/2灰褐	白色粒、砂粒	普通	諸磯a(古)式
	29	縄文土器	深鉢	—	〈16.8〉	(11.8)	胴～底部片。S字状結節文、単節RL縄文を施文。内面は横ナデ。	5YR5/6明赤褐: 5YR3/3暗赤褐	白色粒、砂粒少	やや良好	諸磯a(古)式
	30	土製品	土製円盤	長さ:3.2, 幅3.1, 厚さ0.7, 重さ:8.1g, 完形。平行沈線文と円形竹管文。				5YR4/4にぶい赤褐: 5YR3/3暗赤褐	繊維少、白色粒、砂粒	普通	
	31	石製品	垂飾	長さ:3.20, 幅2.85, 厚さ0.45, 重さ:3.5g, 石材:泥岩　ほぼ完形。両側より穿孔径4㎜。表面は橙色(7.5YR7/6)で、何らかを塗布していた可能性がある。							
	32	石器	磨製石斧	長さ:15.6, 幅5.1, 厚さ2.95, 重さ:347.4g, 石材:緑色凝灰岩　90%存。乳棒状磨製石斧。刃部欠失。全面よく研磨されている。							
	33	石器	磨製石斧	長さ:11.0, 幅4.6, 厚さ2.8, 重さ:261.3g, 石材:緑色凝灰岩　80%存。乳棒状磨製石斧ヵ。上端部欠失。全面よく研磨されている。							
	34	石器	磨石	長さ:7.9, 幅6.3, 厚さ2.8, 重さ:217.0g, 石材:安山岩　50%存。表面はよく使用されている。							
	35	石器	浮子	長さ:5.5, 幅6.7, 厚さ3.5, 重さ:15.4g, 石材:軽石　ほぼ完形。石冠状。							
	36	石器	剝片	長さ:3.9, 幅3.15, 厚さ0.8, 重さ:8.8g, 石材:頁岩。							
	37	石器	石匙ヵ	長さ:2.75, 幅4.15, 厚さ0.8, 重さ:7.3g, 石材:黒曜石。							炉1出土。
	38	石器	楔形石器	長さ:2.7, 幅3.0, 厚さ0.85, 重さ:7.5g, 石材:チャート。							
	39	石器	剝片	長さ:2.8, 幅2.0, 厚さ0.5, 重さ:2.8g, 石材:チャート。使用痕あり。							

＊単位:cm

SI6（第22･23図、第7表、図版5･6･10）

〔位置〕7区D-8･9グリッドに位置する。ＳＩ７を壊し構築されている。〔形態・規模〕中央部の覆土の一部がわずかに撹乱を受けている。掘り込みは浅い。平面形状はやや歪な長方形を呈す。規模は、南北軸で2.6ｍ、東西軸で4.2ｍを測る。〔覆土〕前述のように覆土は浅く含有物の違いにより分層した2層の暗褐色土は自然堆積を呈し、床面までの深さは約15cmを測る。〔床面・壁〕床面は全体的にやや硬化している。周溝は検出されていない。壁は緩やかに立ち上がる。〔ピット〕P1～7のピット7基と21基の壁際の小ピットが全周する。いずれも床面より検出されている。P1は最大径54cm･深さ19cm、P2は最大径35cm･深さ48cm、P3は最大径27cm･深さ12cm、P4は最大径35cm･深さ12cm、P5は最大径22cm･深さ8cm、P6は最大径27cm･深さ12cm、P7は最大径28cm･深さ10cmを測る。P2以外はいずれも浅く、主柱穴と想定されるような規則的な配置を示すピットはみられない。壁際に掘り込まれ全周するように配置された21基の小ピットはいずれも径が8cm前後、深さが5～12cmである。あるいは壁立ちの簡易的な上屋構造も想定される。〔炉〕中央に2基を検出した。炉1の平面形状はほぼ円形で最大径87cm･深さ14㎝を測り、よく被熱した火床面を残す。建物の規模に比して大きい炉である。炉2の平面形状は楕円形で最大径52cm･深さ5㎝を測り、わずかな火床面を残し、上部を削平されている可能性もあり、ＳＩ７に伴う炉であった可能性もある。〔遺物〕覆土中より出土した遺物は総点数で37点、総重量で845ｇと少なく、石器は出土していない。土器はいずれも細片であるが、そのうち縄文土器6点を図示した。縄文土器の全てが胎土に繊維を含み、黒浜式土器と判断される。1は2本1組の沈線によるコンパス文・波状文、5も格子目文を描出する。内面に丁寧な横磨きが施されたものが多い。これらの出土遺物は新相を示す。重複関係よりＳＩ７より新しいが遺物では大きな時期差は見出せない。出土遺物の平面分布は全体的に散在しており、偏重は認められない。〔所見〕本遺構は、出土遺物から縄文時代前期中葉黒浜式中段階の所産と考えられる。



ＳＩ６－炉１土層説明
1. 10YR3/3　暗褐色土　ロームブロック中量，焼土粒微量。粘性もち，締まる。
2. 10YR3/4　暗褐色土　焼土ブロック中量，ロームブロック少量。粘性もち，締まる。
3. 2.5YR5/4　にぶい赤褐色土　焼土主体。よく被熱している。（火床）

ＳＩ６－炉２土層説明
1. 10YR3/4　暗褐色土　焼土ブロック少量。粘性もち，締まる。
2. 2.5YR5/4　にぶい赤褐色土　焼土主体。よく被熱している。（火床）

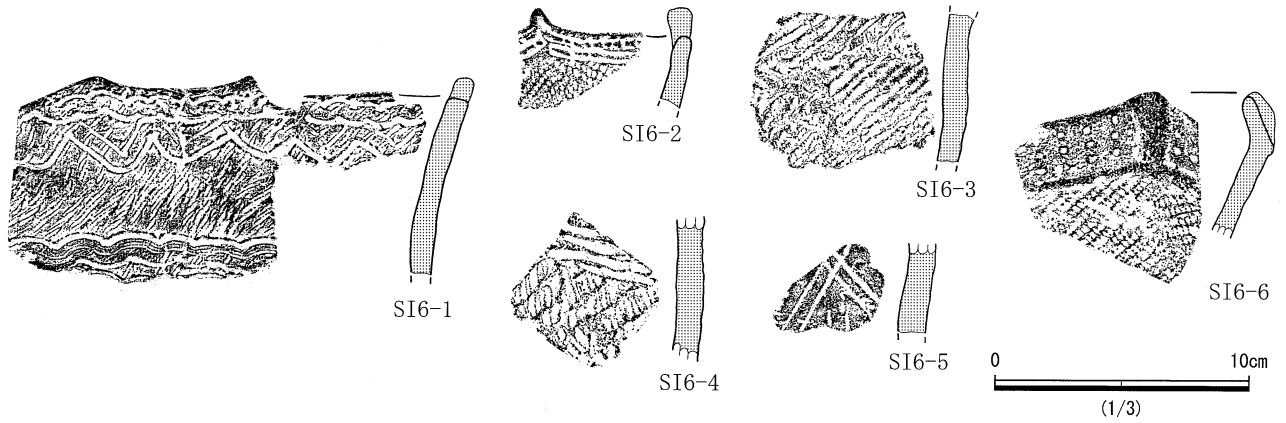
ＳＩ６土層説明
1. 10YR3/3暗褐色土　ローム粒少量。粘性もち，締まる。
2. 10YR3/4暗褐色土　ローム粒，ロームブロック中量。粘性もち，締まる

ＳＩ６－Ｐ１～７土層説明
1. 10YR3/4暗褐色土　ロームブロック少量。粘性もち，締まる。
2. 10YR3/3暗褐色土　ローム粒，ロームブロック少量。粘性もち，締まる。
3. 10YR4/3にぶい黄褐色土　ロームブロック多量。粘性もち，締まる。

ＳＩ７土層説明
①. 10YR3/4暗褐色土　ローム粒中量。粘性もち，締まる。
②. 10YR4/4褐色土　ローム土主体。粘性もち，締まる。

ＳＩ７－Ｐ1･2･4～８土層説明
1. 10YR3/4暗褐色　ロームブロック少量。粘性もち，締まる。
2. 10YR4/4褐色土　ローム土主体。粘性もち，締まる。

第22図　ＳＩ６・ＳＩ７



第23図　ＳＩ６出土遺物

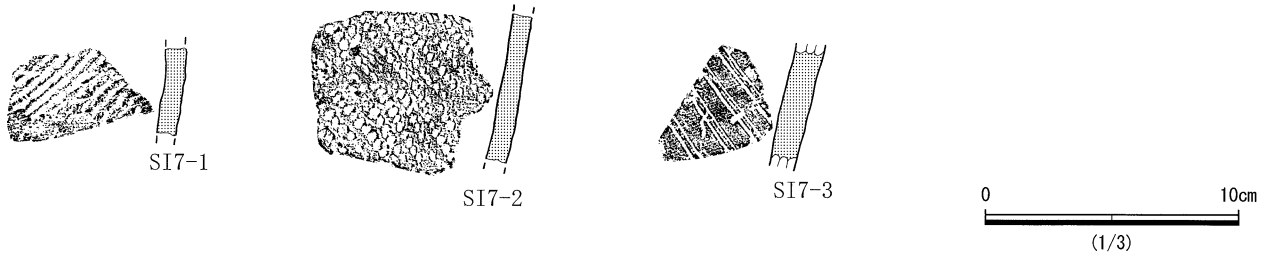
第７表　ＳＩ６出土遺物観察表

遺構	No.	種類	器種	口径	器高	底径	文様	色調(外面:内面)	胎土	焼成	備考
SI6	1	縄文土器	深鉢	—	〈7.7〉	—	口縁部片。2山1組の波状口縁。コンパス文と2本1組の平行沈線による波状文が横走する。無節L縄文を施文。	7.5YR6/6橙: 7.5YR6/6橙	繊維、白色粒、砂粒	やや良好	黒浜式
	2	縄文土器	深鉢	—	〈4.0〉	—	口縁部片。波状口縁で波頂部に突起。口縁直下に半截竹管状工具による2本1組の押引き文。単節RL縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5YR6/4にぶい橙: 7.5YR7/4にぶい橙	繊維、白色粒	やや良好	黒浜式
	3	縄文土器	深鉢	—	〈5.8〉	—	胴部片。無節L縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	10YR6/3にぶい黄橙: 10YR7/4にぶい黄橙	繊維、白色粒、砂粒少	普通	黒浜式
	4	縄文土器	深鉢	—	〈5.7〉	—	胴部片。無節L縄文を施文。	7.5YR3/1黒褐: 7.5YR4/3褐	繊維、白色粒微	普通	黒浜式
	5	縄文土器	深鉢	—	〈3.5〉	—	胴部片。2本1組の平行沈線による格子目文。	5YR6/6橙: 10YR6/3にぶい黄橙	繊維、白色粒微	普通	黒浜式
	6	縄文土器	深鉢	—	〈5.7〉	—	口縁部片。波状口縁で波頂部より貼付突起が垂下。口縁部を隆帯により区画し、3本1組の刺突文を巡らす。単節LR縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5YR5/3にぶい褐: 5YR6/6橙	繊維、白色粒、砂粒	普通	黒浜式

＊単位:cm

SI7（第22･24図、第８表、図版5･6･11）

〔位置〕７区D-8･9グリッドに位置する。ＳＩ６に壊される。〔形態・規模〕中央部がＳＩ６により大きく失われている。掘り込みは浅い。平面形状はやや歪な長方形を呈す。規模は、南北軸で4.5ｍ、東西軸で3.6ｍを測る。〔覆土〕前述のように覆土は浅く含有物の違いにより分層した２層の暗褐色土と褐色土は自然堆積を呈し、床面までの深さは約8cmを測る。〔床面・壁〕床面は全体的にわずかに硬化している。周溝は検出されていない。壁は緩やかに立ち上がる。〔ピット〕P1～９のピット９基が床面より検出されている。P1は最大径28cm･深さ15cm、P2は最大径73cm･深さ22cm、P3は最大径12cm･深さ16cm、P4は最大径50cm･深さ13cm、P5は最大径50cm･深さ11cm、P6は最大径44cm･深さ7cm、P7は最大径50cm･深さ18cm、P8は最大径30cm･深さ9cm、P9は最大径22cm･深さ19cmを測る。いずれも浅く、柱穴と想定されるような規則的な配置を示すピットはみられない。〔炉〕検出されていないが前述のようにＳＩ６の炉２がＳＩ７に伴う炉である可能性もある。〔遺物〕覆土中より出土した遺物は総点数で24点、総重量で545ｇと少なく、石器は出土していない。土器はいずれも細片であるが、そのうち縄文土器３点を図示した。縄文土器の全てが胎土に繊維を含み、黒浜式土器と判断される。１は無節縄文、２は単節縄文、３は半截竹管状工具による２本１組の平行沈線による肋骨文が施文される。重複関係よりＳＩ６より古いが遺物では大きな時期差は見出せない。出土遺物の平面分布は散在しており、偏重は認められない。〔所見〕本遺構は、出土遺物から縄文時代前期中葉黒浜式中段階の所産と考えられる。



第24図　ＳＩ７出土遺物

第８表　ＳＩ７出土遺物観察表

遺構	No.	種類	器種	口径	器高	底径	文様	色調(外面:内面)	胎土	焼成	備考
SI7	1	縄文土器	深鉢	—	〈3.5〉	—	口縁部片。無節L縄文を施文。	5YR5/6明赤褐: 7.5YR3/1黒褐	繊維、白色粒	普通	黒浜式
	2	縄文土器	深鉢	—	〈5.9〉	—	胴部片。単節RL縄文を施文。	7.5YR5/6明褐: 7.5YR6/6橙	繊維、白色粒、砂粒少	普通	黒浜式
	3	縄文土器	深鉢	—	〈5.0〉	—	胴部片。半截竹管状工具による2本1組の平行沈線による肋骨文。	10YR4/2灰黄褐: 10YR6/3にぶい黄橙	繊維、白色粒	普通	黒浜式

＊単位:cm

第３節　土坑

今回の調査では、縄文時代の土坑13基を検出している。そのうち７基ＳＫ１～７は形状から陥し穴と判断した。出土遺物は13基中９基から合計28点の縄文土器が出土した。出土した土器はそのほとんどが細片であるが繊維土器で、住居跡と同時期の縄文時代前期中葉黒浜式土器で占められている。ＳＫ3･6･7の陥し穴の覆土中からも黒浜式土器が出土している。出土遺物より判断すれば陥し穴は前期中葉黒浜式期の所産と判断されるが、前期には集落域となっており、隣接する他地点では早期後半の住居･炉穴が検出されていることから早期後半を含めて、早期後半～前期の範疇と想定したい。また後述する第３章にてさらなる検討を加える。陥し穴の主軸方向は斜面に対し直交するように配されている。ＳＫ1･4･5は平面形状が類似する。

SK1（第25図、図版6）

[位置] 1区G-2グリッドに位置する。一部が調査区外となるため調査区を拡張した。**[規模と形状]** 平面が隅丸長方形を呈す。規模は、長軸1.64 m、短軸0.89 m、深さ1.03m、主軸方向はN -52° - Wを測る。底部には平坦面を持ち、ピットはみられなかった。**[覆土]** 覆土は5層に分層され、上層は暗褐色土が主体を為し、下層はローム粒・ブロックが混じる。自然堆積と考えられる。**[遺物]** 遺物は出土していない。**[所見]** 遺構の形状より陥し穴と判断した。本地点の遺構・遺物を鑑みれば縄文時代前期とみられるが、更に古い早期後半の可能性もある。

SK2（第25図、図版6）

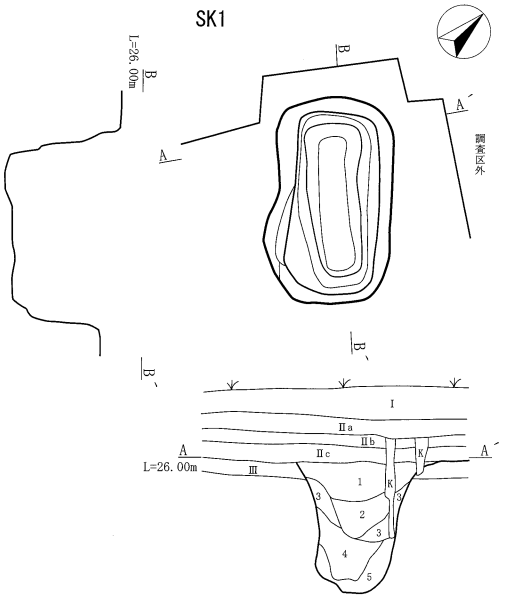
[位置] 2区E･F-3グリッドに位置する。北側2/3が撹乱を受け底面以外は失われている。**[規模と形状]** 平面が長楕円形を呈すると想定される。規模は、残存値で長軸3.10 m、短軸1.40 m、深さ0.51m、主軸方向はN -23° - Wを測る。底部には平坦面を持ち、中央に浅い窪みと深さ28cmの小ピットがみられる。**[覆土]** 覆土は暗褐色土とにぶい黄褐色土と褐色土の5層に分層され、自然堆積と考えられる。**[遺物]** 遺物は出土していない。**[所見]** 遺構の形状より陥し穴と判断した。本地点の遺構・遺物を鑑みれば縄文時代前期とみられるが、更に古い早期後半の可能性もある。

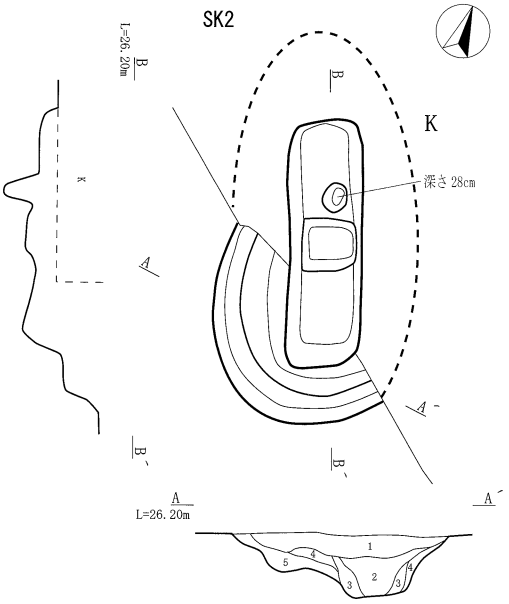
SK3（第25図、図版6）

[位置] 3区D-5グリッドに位置する。**[規模と形状]** 平面が長楕円形を呈す。規模は、長軸2.30 m、短軸1.33 m、深さ2.02m、主軸方向はN -27° - Wを測る。底部はやや起伏を持ち、ピットはみられなかった。**[覆土]** 覆土は黒褐色土と暗褐色土とにぶい黄褐色土と褐色土の9層に分層され、自然堆積と考えられる。**[遺物]** 遺物はいずれも細片であるが胎土に繊維を含む黒浜式土器が7点出土している。**[所見]** 遺構の形状より陥し穴と判断したが、深さが2 m程と際立っている。出土遺物から縄文時代前期中葉黒浜式期の所産とみられる。

SK4（第25図、図版6）

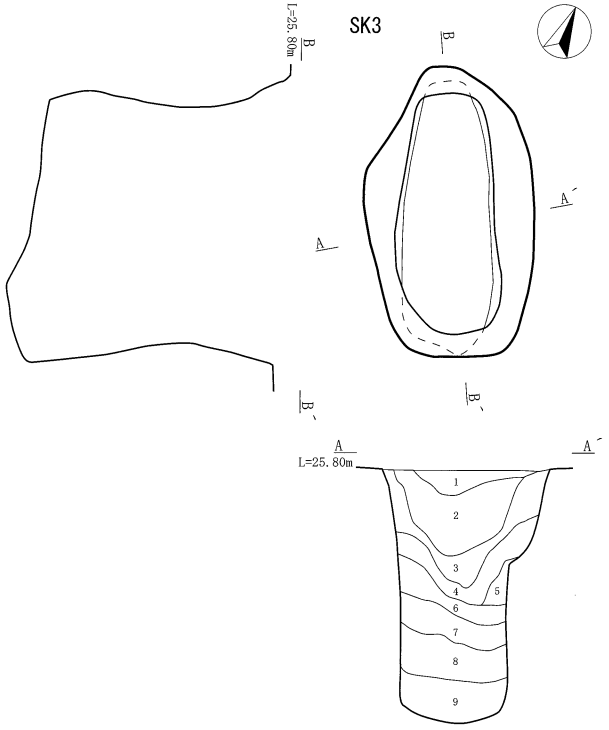
[位置] 4区E-6グリッドに位置する。**[規模と形状]** 平面が隅丸長方形を呈す。規模は、長軸1.75 m、短軸1.06 m、深さ0.80mを測る。主軸方向はほぼN -0°である。底部には平坦面を持ち、小ピットが2基、壁面にも小ピットが2基みられる。底面のものはいずれも浅く東側が深さ4cm、西側が深さ12cmを測る。壁面のものは東側のピットが深さ6cm、南側が深さ40cmを測る。**[覆土]** 覆土は黒褐色土と暗褐色土と褐色土の5層に分層され、自然堆積と考えられる。**[遺物]** 遺物は出土していない。**[所見]** 遺構の形状より陥し穴と判断した。本地点の遺構･遺物を鑑みれば縄文時代前期とみられるが、更に古い早期後半の可能性もある。

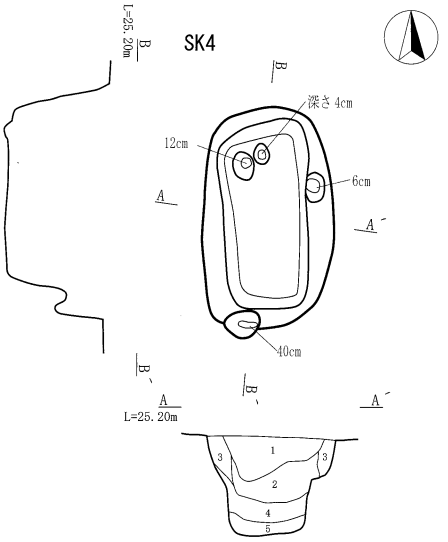




ＳＫ１土層説明
1. 10R3/3 暗褐色土　ローム粒少量。粘性もち，締まる。
2. 10YR3/3 暗褐色土　ローム粒中量，炭化物粒微量。粘性もち，締まる。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム粒・ロームブロック微量。粘性もち，やや締まり欠く。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム粒・ロームブロック少量。粘性もち，やや締まり欠く。
5. 10YR4/4 褐色土　ロームブロック多量。粘性もち，締まる。

ＳＫ２土層説明
1. 10YR3/3 暗褐色土　ローム粒微量，ロームブロック少量。粘性もち，締まる。
2. 10YR3/3 暗褐色土　ローム粒多量。粘性もち，締まる。
3. 10YR3/4 暗褐色土　ローム粒・ロームブロック多量。粘性もち，締まる。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　ロームブロック少量。粘性もち，締まる。
5. 10YR4/4 褐色土　ロームブロック多量。粘性もち，締まる。





ＳＫ３土層説明
1. 10YR3/2 黒褐色土　ローム粒少量。粘性もち，締まる。
2. 10YR3/2 黒褐色土　ローム粒中量，ロームブロック少量，炭化物粒微量。粘性もち，締まる。
3. 10YR3/3 暗褐色土　ローム粒・ロームブロック中量。粘性もち，締まり欠く。
4. 10YR4/4 褐色土　ローム土主体。粘性もち，締まり欠く。
5. 10YR4/4 褐色土　ロームブロック主体。粘性もち，締まる。
6. 10YR3/4 暗褐色土　ロームブロック少量。粘性もち，やや締まり欠く。
7. 10YR3/4 暗褐色土　ロームブロック多量。粘性もち，締まり欠く。
8. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム土主体。ロームブロック多量。粘性もち，締まる。
9. 10YR3/4 暗褐色土　ロームブロック中量。粘性もち，締まり欠く。

ＳＫ４土層説明
1. 10YR3/2 黒褐色土　ローム粒少量。粘性もち，締まる。
2. 10YR3/2 黒褐色土　ローム粒・ロームブロック少量。粘性もち，締まる。
3. 10YR3/4 暗褐色土　ロームブロック中量。粘性もち，締まる。
4. 10YR4/4 褐色土　ローム土主体。粘性もち，締まり欠く。
5. 10YR3/3 暗褐色土　ローム粒少量。粘性もち，締まる。

0　1m
(1/60)

第25図　ＳＫ1・2・3・4

SK5（第26図、図版6）

［位置］ 5区J-7グリッドに位置する。一部が撹乱を受け消失している。［規模と形状］ 平面が隅丸長方形を呈す。規模は、長軸1.39 m、短軸0.88 m、深さ0.98m、主軸方向はN -8° - Eを測る。底部には平坦面を持ち、ピットはみられなかった。［覆土］ 覆土は黒褐色土とにぶい黄褐色土の5層に分層され、自然堆積と考えられる。［遺物］ 遺物は出土していない。［所見］ 遺構の形状より陥し穴と判断した。本地点の遺構・遺物を鑑みれば縄文時代前期とみられるが、更に古い早期後半の可能性もある。

SK6（第26図、図版6）

［位置］ 7区D-10グリッドに位置する。［規模と形状］ 平面が長楕円形を呈する。規模は、長軸2.67 m、短軸1.24 m、深さ1.19m、主軸方向はN -2° - Wを測る。底部は起伏を持ち、段がみられる。

［覆土］ 覆土は黒褐色土と暗褐色土とにぶい黄褐色土と褐色土の5層に分層され、自然堆積と考えられる。［遺物］ 遺物はいずれも細片であるが胎土に繊維を含む黒浜式土器が5点出土している。［所見］ 遺構の形状より陥し穴と判断した。出土遺物から縄文時代前期中葉黒浜式期の所産とみられる。

SK7（第26図、図版6）

［位置］ 7区E-10グリッドに位置する。［規模と形状］ 平面が楕円形を呈す。規模は、長軸1.89 m、短軸1.57 m、深さ2.25m、主軸方向はN -24° - Wを測る。底部にピットはみられなかった。

［覆土］ 覆土は黒褐色土と暗褐色土とにぶい黄褐色土と褐色土の7層に分層され、自然堆積と考えられる。［遺物］ 遺物はいずれも細片であるが胎土に繊維を含む黒浜式土器が7点出土している。［所見］ 遺構の形状より陥し穴と判断したが、深さが2.2 mと際立っている。出土遺物から縄文時代前期中葉黒浜式期の所産とみられる。

SK8（第26図）

［位置］ 4区F-6グリッドに位置する。〔形態・規模〕 平面は楕円形で、断面鍋底状を呈し、テラスを有す。規模は、長軸1.27 m、短軸1.02 m、深さ0.34mを測る。［覆土］ 覆土は暗褐色土を主体とし2層に分層される。［遺物］ 黒浜式土器の細片がわずかに1点出土している。［所見］ 本遺構は、細片ではあるが出土遺物から、縄文時代中期前葉黒浜式期の所産である可能性が高い。

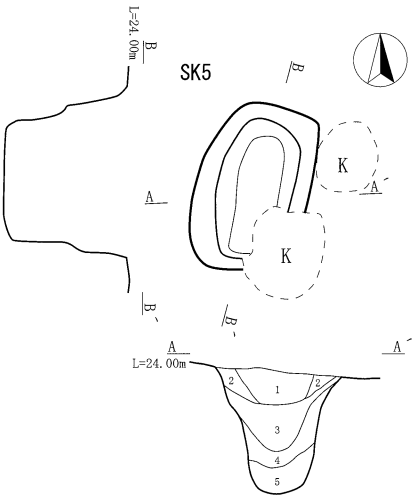
SK9（第26図、第9表、図版11）

［位置］ 5区I-7グリッドに位置する。ＳＩ４に壊される。〔形態・規模〕 ＳＩ４により西側が失われている。平面は楕円形とみられ、断面鍋底状を呈す。規模は、残存値で長軸0.78 m、短軸0.75 m、深さ0.38mを測る。［覆土］ 覆土は暗褐色土を主体とし3層に分層される。［遺物］ 縄文土器細片がわずかに3点出土している。そのうち2点を図示した。いずれも胎土に繊維を含み黒浜式土器とみられる。［所見］ 本遺構は、細片ではあるが出土遺物から、縄文時代中期前葉黒浜式期の所産である可能性が高い。

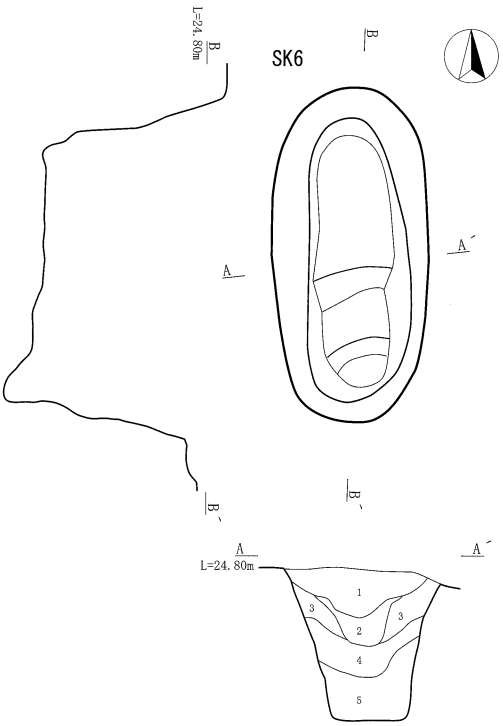
第９表　土坑出土遺物観察表

遺構	No.	種類	器種	口径	器高	底径	文様	色調(外面:内面)	胎土	焼成	備考
SK9	1	縄文土器	深鉢	—	〈5.0〉	—	口縁部片。結節回転文ｶ。	7.5YR6/4にぶい橙:7.5YR4/2灰褐	繊維、白色粒、砂粒	普通	黒浜式
	2	縄文土器	深鉢	—	〈4.3〉	—	口縁部片。波状口縁。半截竹管状工具による2本1組の平行沈線が横走。附加条1種、附加1条を施文。内面は横方向のミガキ。	10YR6/4にぶい黄橙:7.5YR7/4にぶい橙	繊維、白色粒、砂粒少	普通	黒浜式

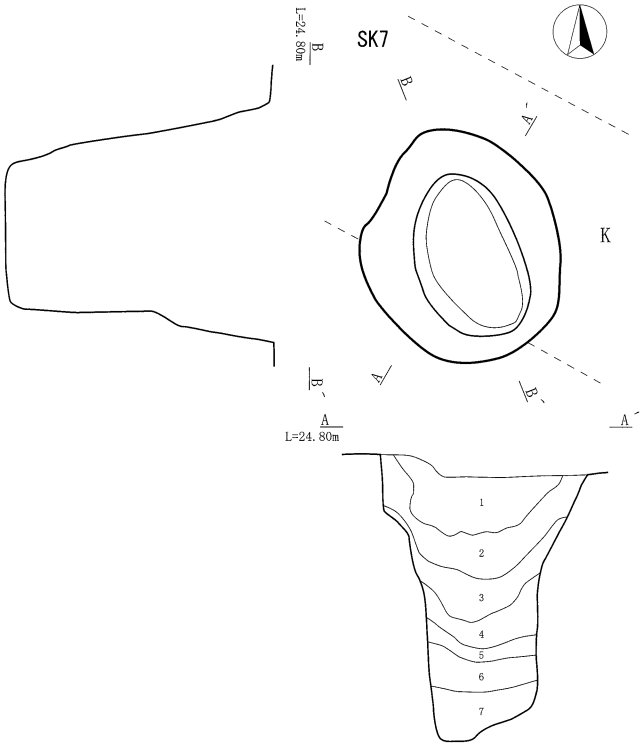
＊単位:cm



ＳＫ５土層説明
1. 10YR3/2 黒褐色土　ロームブロック少量。粘性もち，締まる。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　ロームブロック中量。粘性もち，締まる。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　ロームブロック少量。粘性もち，締まる。
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色土　ロームブロック少量。粘性もち，締まる。
5. 10YR5/4 にぶい黄褐色土　ロームブロック中量。粘性もち，締まり欠く。

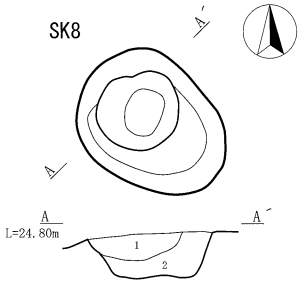


ＳＫ６土層説明
1. 10YR3/2 黒褐色土　ロームブロック少量。粘性もち，締まる。
2. 10YR3/4 暗褐色土　ロームブロック中量。粘性もち，締まる。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム粒少量・，ームブロック多量。粘性もち，締まる。
4. 10YR4/4 褐色土　ロームブロック多量。粘性もち，締まり欠く。
5. 10YR4/4 褐色土　ロームブロック主体。粘性もち，締まり欠く。

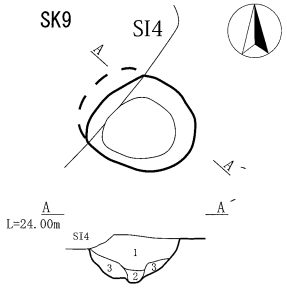


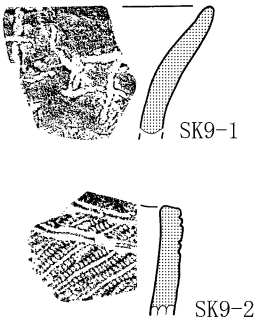
ＳＫ７土層説明
1. 10YR3/2 黒褐色土　ロームブロック中量。粘性もち，締まる。
2. 10YR3/3 暗褐色土　ローム粒少量，ロームブロック多量。粘性もち，締まる。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム粒多量，ロームブロック少量。
粘性もち，締まり欠く。
4. 10YR4/4 褐色土　ロームブロック主体。粘性もち，締まり欠く。
5. 10YR3/4 暗褐色土　ローム粒中量。粘性もち，締まり欠く。
6. 10YR4/4 褐色土　ロームブロック主体。粘性もち，締まり欠く。
7. 10YR5/4 にぶい黄褐色土　ロームブロック多量。粘性もち，締まり欠く。

0　1m
(1/60)



ＳＫ８土層説明
1. 10YR3/3 暗褐色土　ローム粒中量。粘性もち，締まる。
2. 10YR3/3 暗褐色土　ローム粒中量，ロームブロック少量。粘性もち，締まる。





0　10cm
(1/3)

ＳＫ９土層説明
1. 10YR3/4 暗褐色土　ローム粒中量。粘性もち，締まる。
2. 10YR3/3 暗褐色土　ローム粒少量。粘性もち，締まり欠く。
3. 10YR3/4 暗褐色土　ローム粒少量。粘性もち，締まる。

第26図　ＳＫ５・６・７・８・９・ＳＫ９出土遺物

SK10（第27図）

［位置］5区I-8グリッドに位置する。〔形態・規模〕平面は楕円形で、断面鍋底状を呈し、底面中央に小ピットが1基みられる。規模は、長軸1.02 m、短軸0.70 m、深さ0.18mを測る。［覆土］覆土は暗褐色土と褐色土の2層に分層される。［遺物］黒浜式土器の細片がわずかに1点出土している。［所見］本遺構は、細片ではあるが出土遺物から、縄文時代中期前葉黒浜式期の所産である可能性が高い。

SK11（第27図）

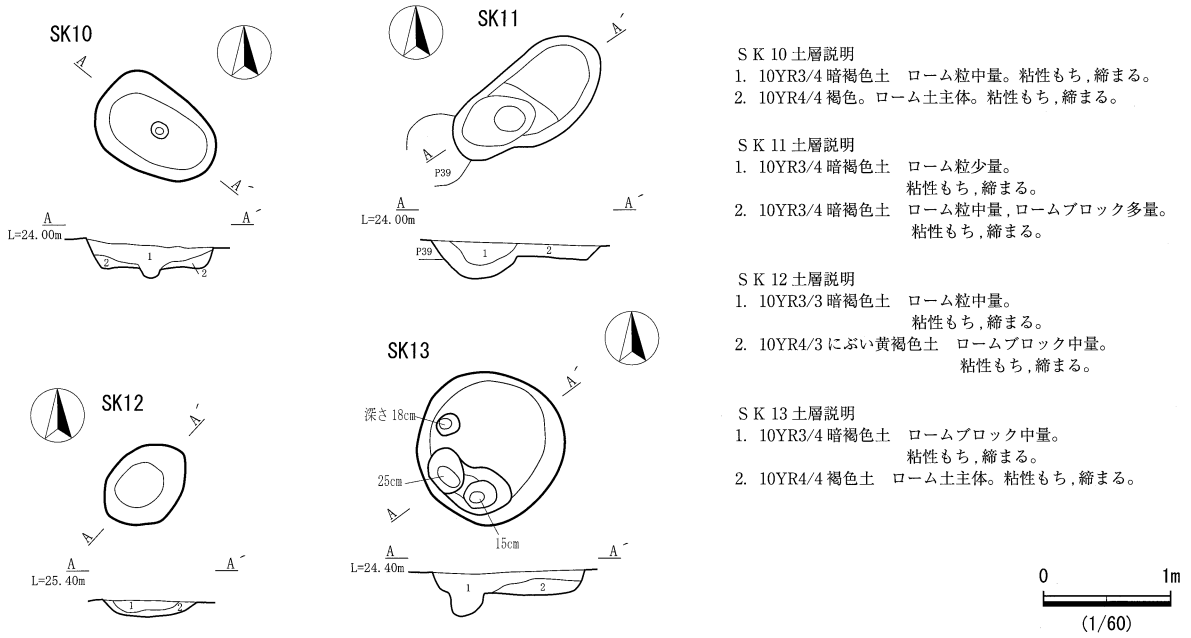
［位置］5区I-8グリッドに位置する。P39を壊す。〔形態・規模〕平面は長楕円形で、テラスを有す。規模は、長軸1.34 m、短軸0.68 m、深さ0.28mを測る。［覆土］覆土は暗褐色土の2層に分層される。［遺物］黒浜式土器の細片がわずかに2点出土している。［所見］本遺構は、細片ではあるが出土遺物から、縄文時代中期前葉黒浜式期の所産である可能性が高い。

SK12（第27図）

［位置］7区D-9グリッドに位置する。〔形態・規模〕平面は楕円形で、断面皿状を呈す。規模は、長軸0.77 m、短軸0.56 m、深さ0.13mを測る。［覆土］覆土は暗褐色土とにぶい黄褐色土の2層に分層される。［遺物］黒浜式土器の細片がわずかに1点出土している。［所見］本遺構は、細片ではあるが出土遺物から、縄文時代中期前葉黒浜式期の所産である可能性が高い。

SK13（第27図）

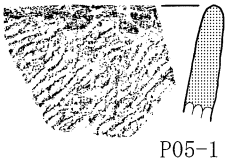
［位置］6区G-8グリッドに位置する。〔形態・規模〕平面はほぼ円形で、断面鍋底状を呈す。規模は、長軸1.21 m、短軸1.18 m、深さ0.18mを測る。底面に小ピットが3基みられる。南側のピットは深さ25cmと15cm、西側のピットが深さ18cmを測る。［覆土］覆土は暗褐色土と褐色土の2層に分層される。［遺物］黒浜式土器の細片がわずかに1点出土している。［所見］本遺構は、細片ではあるが出土遺物から、縄文時代中期前葉黒浜式期の所産である可能性が高い。



第27図　SK10・11・12・13

第４節　ピット（第5･6･7･8･9･28図、第10･11表、図版11）

今回の調査では、ピット62基を検出している。第11表にピットについてまとめた。P01が１区で単独で検出された他は４区～７区で検出されている。掘立柱建物跡や竪穴建物跡の痕跡となるような規則的な配置はみられなかった。ピットの覆土は暗褐色土を主体としている。P28～32についてはＳＩ４のところでも前述したが、ＳＩ４に近接して周囲に配されているようにもみえるが関連性は不明である。他に確認されたピットで明らかに近・現代のものと判断されるものは撹乱としている。遺物は62基中18基から、いずれも細片ではあるが25点出土している。そのほとんどが胎土に繊維を含んでおり、住居と同時期の黒浜式土器で占められている。P08では施文時の粘土隆起がみられる土器片が１点出土しており、黒浜式古段階のものとみられる。また、P38･39･42ではそれぞれ胎土が無繊維の土器片が１点ずつ検出されている。P05で出土した黒浜式土器を１点だが図示した。平縁口縁で、全面に無節縄文が施文されている。



P05-1

0　10cm
(1/3)

第28図　P05出土遺物

第10表　ピット出土遺物観察表

遺構	No.	種類	器種	口径	器高	底径	文様	色調(外面:内面)	胎土	焼成	備考
P05	1	縄文土器	深鉢	—	<4.6>	—	口縁部片。無節L縄文を施文。	5YR4/6赤褐: 5YR3/3暗赤褐	繊維、白色粒	普通	黒浜式

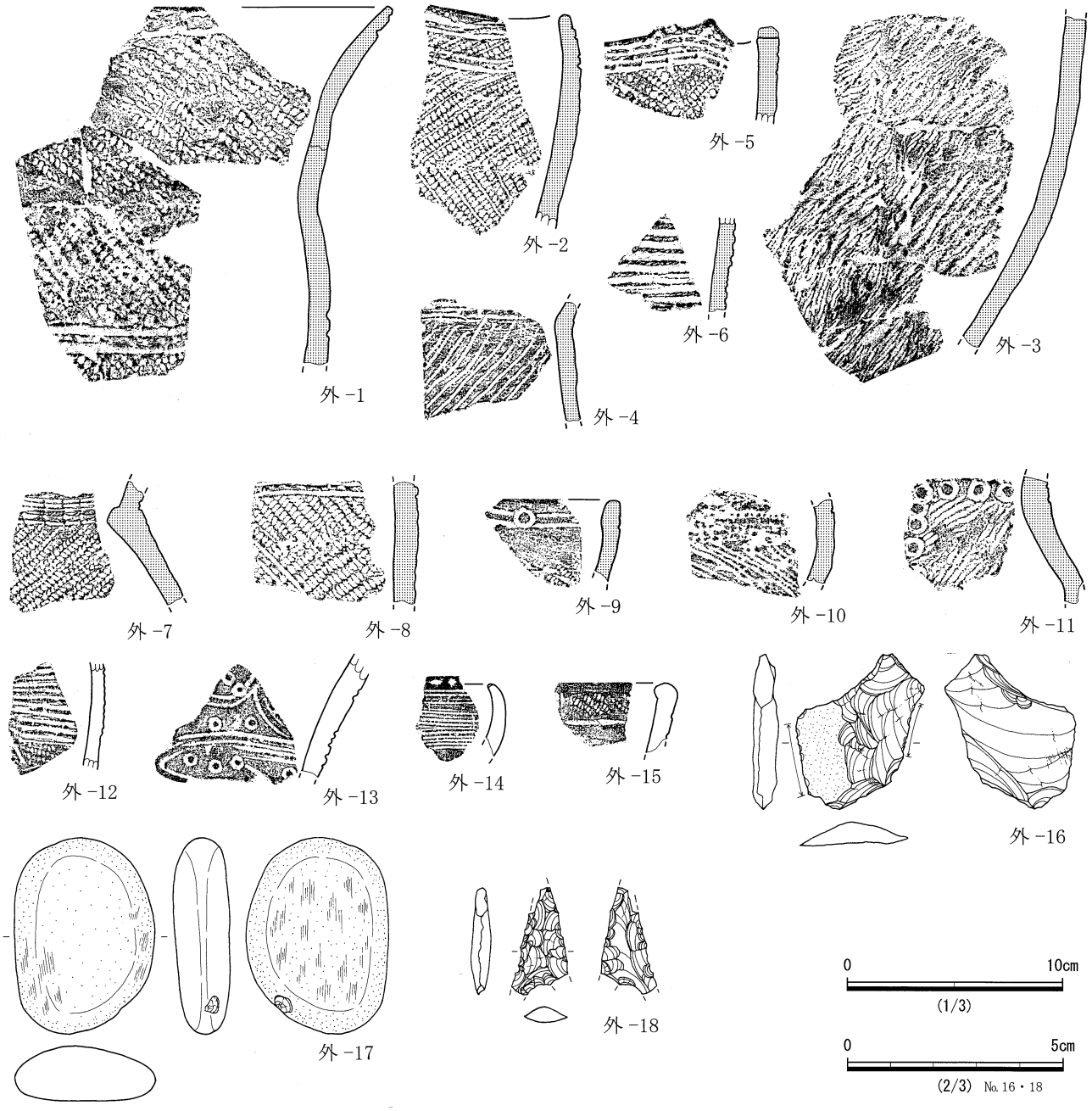
＊単位:cm

第11表　ピット一覧表

遺構名	位置		形態	規模（cm）		備考
	グリッド	調査区	平面	最大径	深さ	
P01	G-2	1区	楕円形	65	27	
P02	G-5	4区	楕円形	38	42	
P03	G-5	4区	円形	44	16	
P04	G-6	4区	円形	50	36	
P05	G-6	4区	円形	52	22	黒浜式土器出土。
P06	G-6	4区	円形	41	41	
P07	G-6	4区	円形	46	18	黒浜式土器出土。
P08	G-6	4区	円形	48	19	黒浜式(古)土器出土。
P09	F-7	4区	楕円形	61	59	黒浜式土器出土。
P10	G-6	4区	円形	45	27	黒浜式土器出土。
P11	F-6	4区	楕円形	34	31	黒浜式土器出土。
P12	F-7	4区	楕円形	76	34	
P13	F-7	4区	円形	39	19	
P14	F-7	4区	楕円形	80	14	
P15	F-6	4区	楕円形	80	10	黒浜式土器出土。
P16	E-6	4区	楕円形	50	36	
P17	J-6	5区	円形	48	25	
P18	I-6	5区	円形	37	27	
P19	I-6	5区	楕円形	40	30	黒浜式土器出土。
P20	I-6	5区	楕円形	90	11	
P21	I-6	5区	楕円形	65	19	黒浜式土器出土。
P22	J-6	5区	楕円形	29	35	
P23	J-7	5区	円形	30	66	
P24	I-7	5区	楕円形	44	32	
P25	H･I-7	5区	楕円形	55	38	
P26	I-7	5区	円形	26	24	
P27	I-7	5区	円形	25	13	
P28	I-7	5区	円形	23	50	
P29	I-7	5区	楕円形	20	13	
P30	I-7	5区	楕円形	30	11	黒浜式土器出土。
P31	I-7	5区	円形	18	12	
P32	I-7	5区	円形	25	14	
P33	—	—	—	—	—	＊木根と判断し欠番とした。
P34	—	—	—	—	—	＊木根と判断し欠番とした。
P35	I-8	5区	楕円形	43	64	
P36	I-8	5区	円形	20	22	
P37	I-8	5区	楕円形	43	42	
P38	I-8	5区	楕円形	65	47	黒浜式土器出土。無繊維含。
P39	I-8	5区	楕円形	56	47	黒浜式土器出土。無繊維含。SK11に壊される。
P40	I-8	5区	楕円形	74	29	P39に壊される。
P41	I-8	5区	楕円形	40	22	
P42	I-7	5区	楕円形	30	30	黒浜式土器出土。無繊維含。
P43	I-7	5区	楕円形	62	41	
P44	I･J-7	5区	円形	29	27	
P45	J-8	5区	円形	33	29	
P46	J-8	5区	円形	34	25	黒浜式土器出土。
P47	I･J-8	5区	円形	35	14	
P48	J-8	5区	円形	30	22	
P49	G-8	6区	楕円形	44	7	
P50	G-8	6区	楕円形	45	37	黒浜式土器出土。
P51	H-9	6区	円形	28	17	黒浜式土器出土。
P52	H-9	6区	円形	33	20	
P53	D-8	7区	円形	35	12	
P54	D-9	7区	円形	46	22	
P55	D-9	7区	円形	28	20	黒浜式土器出土。
P56	G-9	6区	楕円形	36	33	
P57	G-8	6区	円形	28	37	
P58	G-8	6区	楕円形	42	53	
P59	G-8	6区	楕円形	25	26	
P60	D-9	7区	楕円形	42	68	
P61	D-9	7区	円形	46	11	黒浜式土器出土。
P62	D-9	7区	楕円形	45	29	
P63	E-9	7区	楕円形	40	34	
P64	E-9	7区	楕円形	39	20	

第５節　遺構外出土遺物（第 29 図、第 12 表、図版 11）

今回の調査において、表土掘削及び遺構検出中に出土した遺構外出土遺物は、364 点、総重量 7,717 g である。そのうち 18 点を掲載した。表土中に含まれていた遺物はいずれも細片であり、主に検出遺構と同時期の縄文時代前期中葉黒浜式期の遺物で占められていた。わずかに後続する時期の遺物も散見される。外 -12 は 5 区で、外 -13 は 6 区で出土した諸磯 a 式土器の細片である。また 6 区のＳＩ５に混入したものとみられる外 -14 は諸磯 b（新）～ c（古）式土器とみられる。数点だがいずれも調査区の東側で、斜面上位の未調査部分に後続する時期の痕跡が遺存している可能性も想定される。また、外 -15 は縄文時代後期の曽谷式あるいは安行式土器の細片である。隣接する d 地点でも該期の土器片は出土しているが遺構は未検出である。また、a 地点では奈良時代の竪穴住居跡も 1 軒検出されているが、今回は土師器・須恵器片なども出土していない。



第 29 図　遺構外出土遺物

第12表　遺構外出土遺物観察表

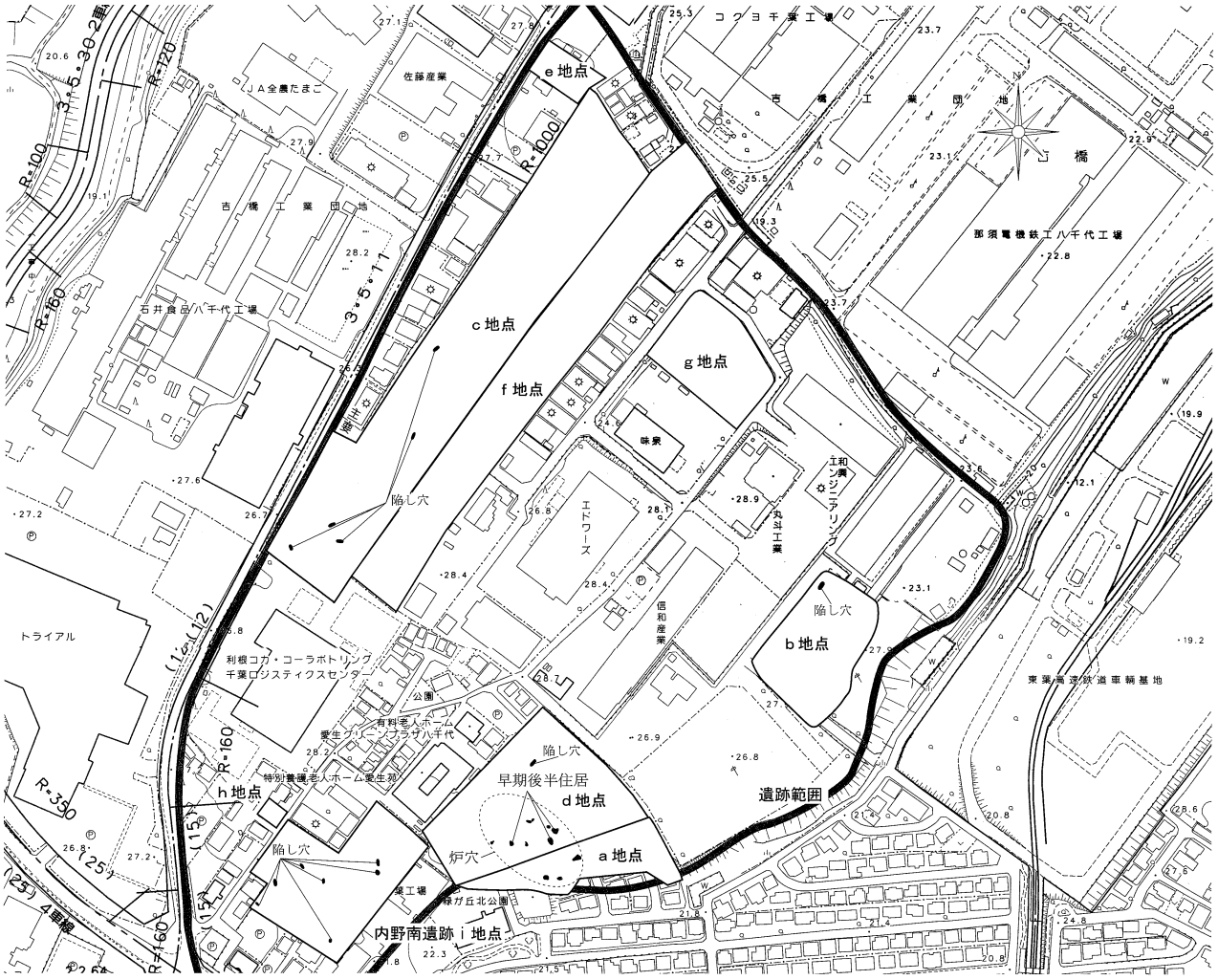
遺構	No.	種類	器種	口径	器高	底径	文様	色調(外面:内面)	胎土	焼成	備考
遺構外	1	縄文土器	深鉢	—	〈16.6〉	—	口縁～胴部片。口縁直下にコンパス文。2本1組の平行沈線が横走する。単節RL縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5YR6/6橙: 7.5YR7/4にぶい橙	繊維、白色粒少	普通	7区D-9グリッド 出土　黒浜式
	2	縄文土器	深鉢	—	〈9.9〉	—	口縁部片。波状口縁。口縁直下に半截竹管状工具による2本1組の平行沈線が2段横走する。菱形構成の附加条1種、附加1条を施文。内面は横方向のミガキ。	5YR5/4にぶい赤褐: 5YR6/6橙	繊維、白色粒	普通	7区D-9グリッド 出土　黒浜式
	3	縄文土器	深鉢	—	〈16.3〉	—	胴部片。無節L縄文(反撚ヵ)を施文。	5YR6/6橙: 7.5YR4/1褐灰	繊維、白色粒	普通	7区D-9グリッド 出土　黒浜式
	4	縄文土器	深鉢	—	〈5.6〉	—	頸～胴部片。頸部に沈線が横走。以下斜位の沈線が施文される。	7.5YR7/6橙: 7.5YR7/6橙	繊維、白色粒、透明粒	普通	2区出土 黒浜式
	5	縄文土器	深鉢	—	〈4.5〉	—	口縁部片。波状口縁。波頂部に2つの小突起。口縁直下に半截竹管状工具による2本1組の押引き文が2段横走。単節RL縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	2.5YR5/6明赤褐: 2.5YR4/6赤褐	繊維、白色粒	普通	6区出土 黒浜式
	6	縄文土器	深鉢	—	〈4.4〉	—	胴部片。地文縄文に沈線を密に横走させる。	7.5YR5/4にぶい褐: 10YR4/3にぶい黄褐	繊維、白色粒多	普通	6区出土 黒浜式
	7	縄文土器	深鉢	—	〈5.8〉	—	頸～胴部片。頸部に櫛歯状工具による押引き文が横走。以下多条縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5YR7/6橙: 5YR6/4にぶい橙	繊維、白色粒多	やや良好	7区出土 黒浜式
	8	縄文土器	深鉢	—	〈5.7〉	—	胴部片。羽状構成の単節RL縄文と単節LR縄文と横・斜位の2本1組の平行沈線を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5YR7/6橙: 7.5YR5/2灰褐	繊維、白色粒微	普通	7区出土 黒浜式
	9	縄文土器	深鉢	—	〈3.8〉	—	口縁部片。口縁直下に2本1組の平行沈線が横走。円形竹管文、単節LR縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5YR5/2灰褐: 7.5YR7/4にぶい橙	繊維、白色粒微	普通	調査区出土 黒浜式
	10	縄文土器	深鉢	—	〈3.9〉	—	口縁部片。口縁直下に3列の爪形文。以下斜位の沈線。消耗が著しい。	5YR7/6橙: 7.5YR4/3褐	繊維	普通	表採 黒浜式
	11	縄文土器	深鉢	—	〈5.9〉	—	胴部片。無節L縄文を施文。縦・横位に1列の円形竹管文。内面は横方向のミガキ。	5YR6/4にぶい橙: 7.5YR6/6橙	繊維、白色粒微、透明粒微	普通	表採 黒浜式
	12	縄文土器	深鉢	—	〈4.9〉	—	胴部片。密に沈線が横走し、以下単節RL縄文を施文。内面丁寧なナデ。	5YR5/6明赤褐: 5YR5/6明赤褐	白色粒微、透明粒微	普通	5区出土 諸磯a式
	13	縄文土器	深鉢	—	〈5.8〉	—	胴部片。2本1組の平行沈線により文様を描出。円形竹管文が施文される。内面丁寧なナデ。	7.5YR5/2灰褐: 7.5YR6/3にぶい褐	白色粒、透明粒、砂粒微	良好	6区出土 諸磯a式
	14	縄文土器	深鉢	—	〈3.4〉	—	口縁部片。集合沈線文。	10YR8/2灰白: 10YR7/2にぶい黄橙	砂粒微	やや良好	SI5出土諸磯b 新～c古式
	15	縄文土器	深鉢	—	〈3.2〉	—	口縁部片。口唇部内面に隆起帯。単節LR縄文を施文。	5YR5/6明赤褐: 5YR5/6明赤褐	白色粒、透明粒	やや良好	7区出土 縄文後期
	16	石器	剥片	長さ:3.6, 幅:3.0, 厚さ:0.6, 重さ:6.3g, 石材:黒曜石　削器ヵ。							6区出土
	17	石器	磨石	長さ:9.1, 幅:6.5, 厚さ:2.6, 重さ:220.5g, 石材:安山岩　ほぼ完形。表面はよく使用されている。							7区出土
	18	石器	石鏃	長さ:2.5, 幅1.3, 厚さ0.4, 重さ:1.2g, 石材:頁岩　80%存。片翼欠失。							7区出土

＊単位:cm

第3章　まとめ

今回の調査では、縄文時代の竪穴住居跡7軒、土坑13基（そのうち陥し穴7基）、ピット62基を検出した。陥し穴を除けば、いずれも縄文時代前期中葉黒浜式期を主とした時期のものである。出土遺物の総量は、総点数で1,280点、総重量で32,105ｇが出土した。そのほとんどが黒浜式土器で占められているが、後続する諸磯ａ(古)式土器が黒浜式土器に伴ってＳＩ５からまとまって出土したほか、諸磯ｂ(新)～ｃ（古）式土器も細片であるものの少量だが調査区の東側を中心に出土している。また、縄文時代後期の曽谷式あるいは安行式土器の細片も出土した。今回の調査では、近隣の地点で出土している縄文時代早期後半や奈良・平安時代の遺物は検出されていない。

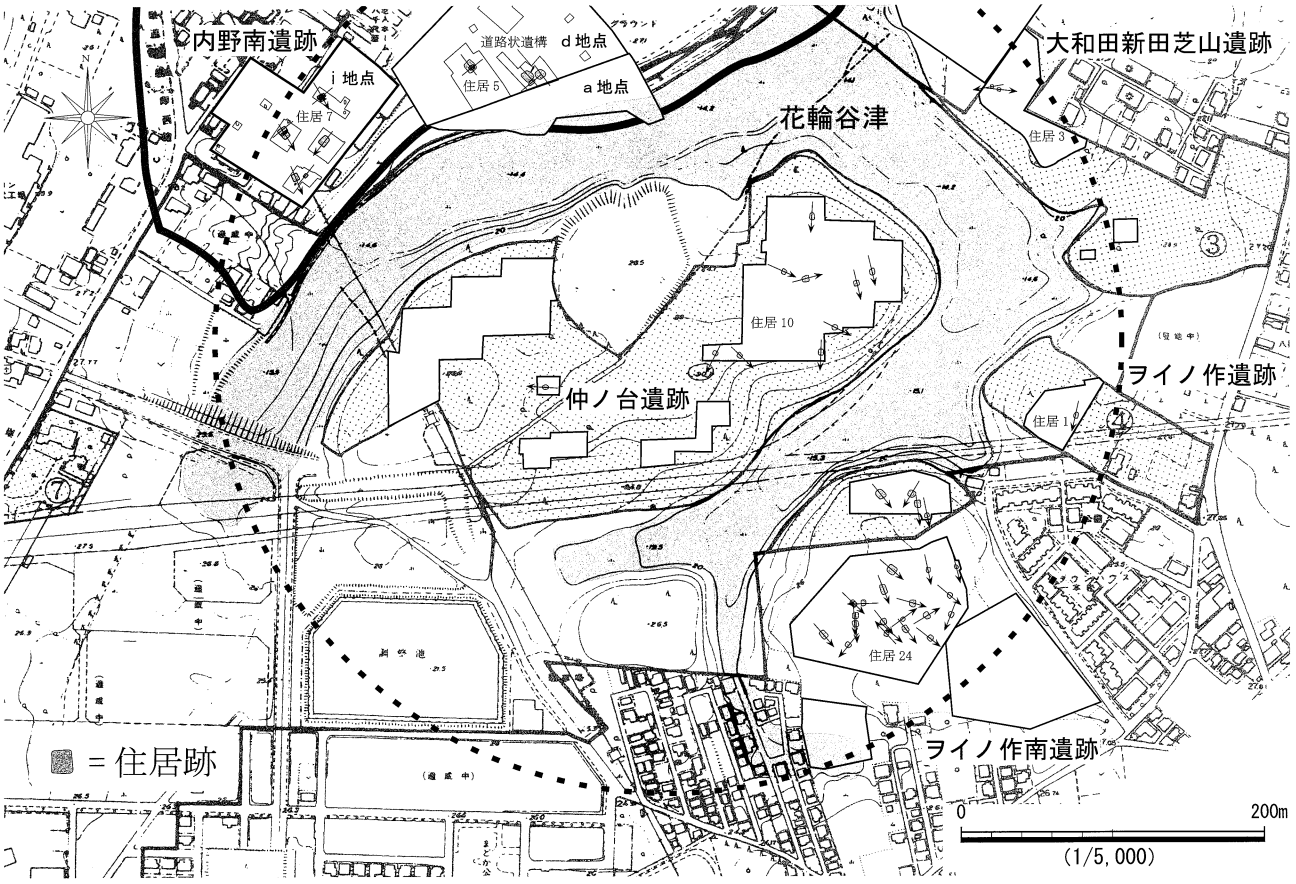
今回確認されたＳＫ１～７の７基はその形状から縄文時代の陥し穴とみられる。ＳＫ３・６・７からは覆土中より細片ではあるが黒浜式土器が出土している。その他は遺物が検出されず時期の判断は難しい。規則的に配列されたような状況は窺えないが、いずれも斜面の傾斜に対し、長軸方向が直交するように設けられている。陥し穴については本跡より南東へ500ｍほどで谷を挟んで位置するヲイノ作南遺跡（b1地点）で15基が検出されており、分類し検討がなされている。出土遺物から楕円形よりやや丸みをもつものは黒浜式期古段階、平面隅丸長方形で平坦面をもつものは加曽利Ｅ式期、狭長な楕円形のものは黒浜式期古段階よりやや古い可能性が指摘され、時期が新しくなるにつれ、丸くなる傾向が示されている（森・玉井2000)。それに従えば、ＳＫ２･６が狭長な楕円形のものに該当し、ＳＫ２・６は早期後半～前期前半、次にＳＫ７は楕円形よりやや丸みをもつものに該当し、ＳＫ３は狭長な傾向を残すものとみれば、ややＳＫ７より古いとみられ、ＳＫ３・７は前期後半。ＳＫ１・４・５は隅丸長方形で平坦面をもつものに該当し、ＳＫ１・４・５は中期とおよそ以上のような時期が想定される。ＳＫ３・６・７から出土した黒浜式土器についてもこの時期観と齟齬はないものとみられる。



第30図　縄文時代陥し穴分布図

内野南遺跡では他にも本地点の北東側のｄ地点で１基、ｂ地点で１基、北側のｃ地点で５基、本地点の７基を含め、計14基の陥し穴が検出されている（第30図）。他地点の陥し穴も遺物の出土がないものが多く、時期判断が難しい。しかしながら、ｂ・ｄ地点のものは狭長な楕円形のものに該当し、ｃ地点の５基は１基が狭長な楕円形のもの、４基が隅丸長方形で平坦面をもつがやや狭長な傾向が残るものとみられる。隣接するａ・ｄ地点では縄文時代早期後半の住居跡３軒、炉穴10基も検出されている。更に北へ300ｍほどの同じ台地上の別遺跡となる西内野遺跡でも８基の陥し穴が検出され１基から阿玉台Ｉａ式土器が出土している。以上を鑑みれば、これらの陥し穴は早期後半～中期まで作られ続けていた可能性が高い。早期後半～中期にかけての長きにわたり、台地上は狩猟場ともなっていた状況が窺える。台地上に散在し、等高線に対し長軸方向を直交させる陥し穴は、規則的に配列されたような追い込み猟に使用された状況ではなく、獲物の通り道、いわゆる「ケモノ道」に配置された定置的な罠猟である可能性が想定される。

次いで縄文時代前期中葉黒浜式期を主とした竪穴住居跡７軒を検出している。これらは出土遺物から判断して、ＳＩ１が黒浜式古～中段階、ＳＩ2･4がＳＩ１よりやや新相を示し中段階、さらにＳＩ3･6･7が後続するも中段階の範疇とみられる。そしてＳＩ５が黒浜式新段階から諸磯ａ式古段階にかけての移行期であった。黒浜式期をとおして断続的に集落が営まれていた状況が窺える。他地点も加味すれば、隣接するｄ地点で黒浜式期（古段階）の住居跡１軒・道路状遺構１条、浮島式期の住居跡２軒、興津式期の住居跡２軒が検出されている。内野南遺跡では前期の住居跡が検出されているのは、これ



第31図　縄文時代前期中葉～後葉遺構分布図

までのところ南端部の花輪谷津最奥部に面した台地の縁辺部に限られており、計12軒となる（第31図）。更に周辺遺跡もあわせてみると、第1章第4節でも前述したが、本跡を含む花輪谷津の最奥部には谷の先端部を取り囲むように近接して、仲ノ台遺跡、ヲイノ作遺跡、ヲイノ作南遺跡、大和田新田芝山遺跡が展開しており、前期の遺跡が確認されている。仲ノ台遺跡では黒浜式期（古～中段階）の住居跡10軒と浮島式期の小竪穴状遺構1基、ヲイノ作遺跡では黒浜式期（古段階）の住居跡1軒、ヲイノ作南遺跡では黒浜式期（中～新段階）の住居跡24軒、大和田新田芝山遺跡では黒浜式期（古～中段階）の住居跡3軒が検出されている（森・玉井2000）。第31図の破線の円は径600 m、この範囲内に谷を挟み、縄文時代前期の住居跡50軒、黒浜式期に限れば住居跡46軒が分布している。同時並存であれば谷向いに見える距離に対峙するように存在し、関連性が深いことは容易に想定される。活況を呈した黒浜式期とは相反して、後続する浮島・興津式期には大幅に住居数を減らしている。

本跡を含む古奥東京湾岸は石器の材料となる石材が乏しい環境にあり、石材は遠隔地より運ばれてきたものが多くを占めていた。こうした環境下の縄文時代前期中～後葉には、石器・石材は希少であり、それらを多く保有する集落は「広場集落」（環状集落：中核的な集落）を形成することが多くみられる。一方でそうした石器類が僅少な集落は「非広場集落」（非環状集落：一般的な集落）であるといった状況が指摘されている。また、「広場集落」と「非広場集落」間では儀礼執行や石材保有など様々な面で階層構造が醸成され、中核的な集落では石器・石材などの交易センターとして役割を担うといった機能も想定されている（小川2001）。前代の関山式期に比して黒浜式期には人口増加にあわせ、中核的な集落との関係を維持しながら、一般的な小規模集落が増える傾向にあった。

今回の調査でも出土した石器は欠損品が多く、修復しながら大切に使用されていた状況が窺える。また、ＳＩ５から出土した乳棒状磨製石斧は、壁際に並べるように出土している（図版4）。本来伐

採具である乳棒状磨製石斧は、貴重な石材を遠隔地より入手し、時間と労力を掛け加工した希少財となり、斧としての機能以上の意味が附加され、余剰品≒富としての側面も持っていた。ＳＩ５はやや規模も大きく、出土遺物も多く、石器類も比較的豊富であった。希少財でもある乳棒状磨製石斧や石製垂飾なども保有しており、一定程度の余剰の蓄積を持った居住集団（≒家族）が住していたとみられる。

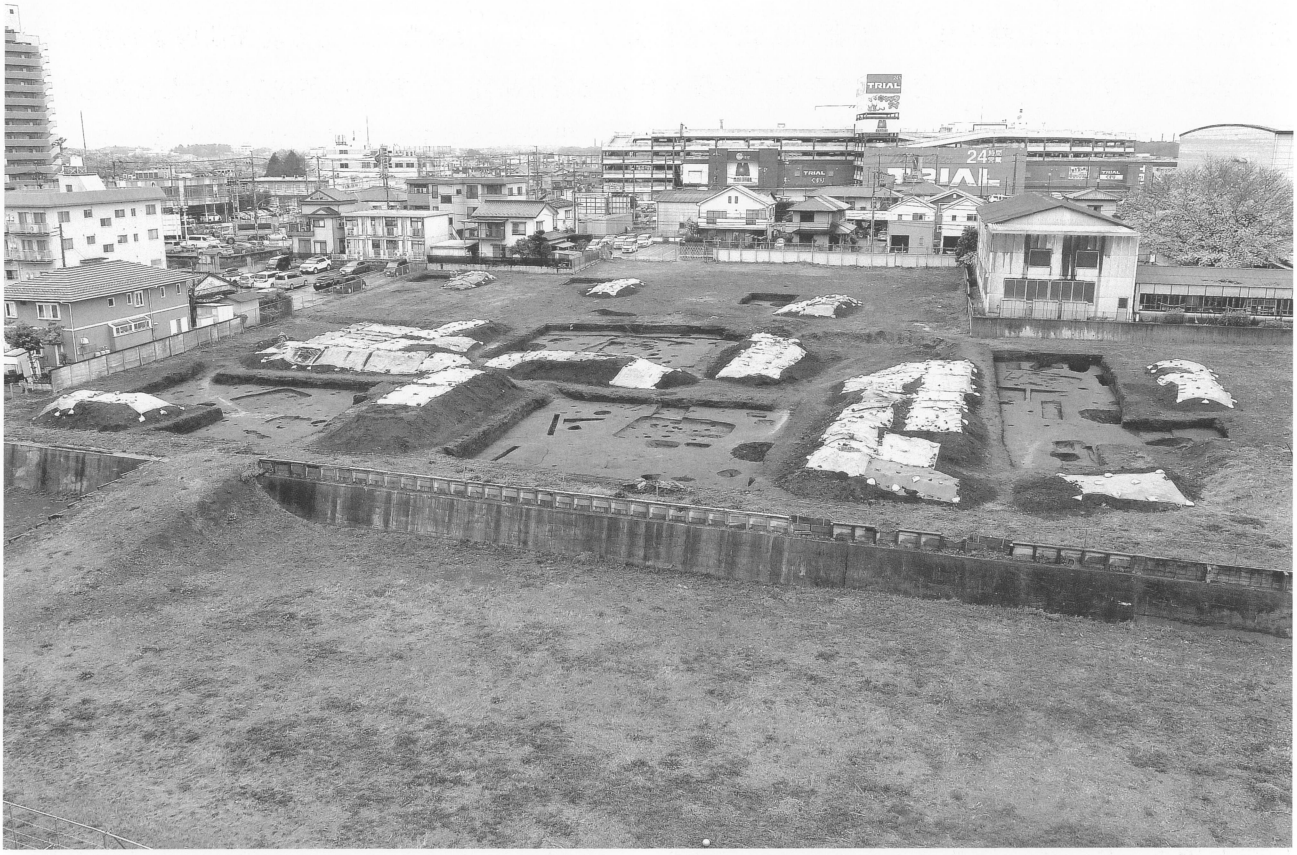
内野南遺跡の集落は断続的に前期をとおして営まれ、黒浜式古段階には開始されている。更にその関連性を別とすれば早期後半にまで遡り、近接する他の４遺跡よりも古い集落となる。しかしながら、その規模は小さく、一時期に存在した住居は１～２軒、あるいは未調査部分も含めても数軒程度とみられる。中核的な集落と儀礼への参加などで関係性を保ちながら、そこを介して石器・石材を入手していた可能性が想定される一般的な集落の一つと判断される。

第31図の各住居跡に付した矢印は住居の主軸方向と炉跡より推測した出入り口の開口部の方向を示している。内野南遺跡では出入り口がおよそ谷へ向っている傾向が窺える。他の遺跡でも台地の縁辺部では谷を向く傾向がみられる。一方で台地上にまとまった住居群を形成するヲイノ作南遺跡をみると主軸方向や出入り口に中心広場を意識したような環状構造はみられず、出入り口が南方向を中心に向くといった状況である。その南側で住居は検出されておらず広場自体が存在しない。住居の居住性を重視して南方向を向いているといった状況とみられる。環状集落は形成されなかったが黒浜式期の中～新段階にかけ24軒もの住居が集中し、地点貝層も検出されている。貝類の入手先について、花輪谷津の最奥部からでは印旛沼側で最も海進が進行した時期の海岸線でも新川中流域の宮内橋付近が想定されており、北東方向へ直線で約3km離れている。また、東京湾側では現在程ではないが更に距離があった。離れた海から運び込まれた貝類は儀礼行為に使用され、「モノ送り」のような儀礼の痕跡として地点貝層が残されたとする指摘もある。こうした儀礼行為などもある程度の中核的な性格を有していた可能性を示唆するものとみれば、やはりヲイノ作南遺跡の集落が花輪谷津の最奥部の中核的な集落と想定される。

今回の調査で検出された集落は、単独ではその性格を判断しかねるため、他地点、更には関連性が想定される周辺遺跡までも含め検討を試みた。本跡を含む花輪谷津最奥部の縄文時代前期中葉黒浜式期の様相の一端が明らかとなる調査となった。開発が目覚ましい八千代緑が丘駅周辺であることからも今後も調査が積み重ねられ、該期の様相がより明らかとなるよう更新されていくことが望まれる。

【参考文献】

朝比奈竹男・森竜哉・中野修秀　2008　『千葉県八千代市ヲイノ作南遺跡ｂ地点発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会
今村啓爾　1983　「陥穴（おとし穴）」『縄文文化の研究 2 生業』雄山閣
小川岳人　2001　『縄文時代の生業と集落－古奥東京湾沿岸の社会－』アム・プロモーション
奥野麦生　1989　「黒浜式土器の系統性とその変遷」『土曜考古』第13号　土曜考古学会
齋藤弘道　2006　『茨城県立歴史館叢書９　茨城の縄文土器』茨城県立歴史館
谷口康浩　2005　『環状集落と縄文社会構造』学生社
千葉県　1998　『千葉県の歴史』資料編　考古３　千葉県
千葉県文化財センター／編　1990　『千葉県文化財センター埋蔵文化財報告 第176集 八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡 東葉高速鉄道引き込み線および車庫用地内埋蔵文化財調査報告書』東葉高速鉄道株式会社 千葉県文化財センター
　2007　『千葉県教育振興財団調査報告 第564集 西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書 1』都市再生機構千葉地域支社　千葉県教育振興財団
常松成人　2000　『千葉県八千代市内野南遺跡ａ地点発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会
星野保則・小川将之　2011　『野田市埋蔵文化財調査報告 第43冊　鹿野第２遺跡』野田市教育委員会
松川由次ほか　2013　『千葉県市川市東新山遺跡－第M地点発掘調査報告書－』㈱地域文化財研究所
森竜哉　1996　『千葉県八千代市仲ノ台・ヲイノ作遺跡ｂ地点発掘調査報告書』八千代市西八千代遺跡群調査会
森竜哉・玉井庸弘　2000　『千葉県八千代市ヲイノ作南遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会
森竜哉・中野修秀　2007　『千葉県八千代市西内野遺跡発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会
　2008　『千葉県八千代市内野南遺跡ｄ地点発掘調査報告書』八千代市教育委員会
八千代市教育委員会　1999　「内野南遺跡ｂ地点」『千葉県 八千代市 市内遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会
　2004　「内野南遺跡ｃ地点」『千葉県 八千代市 市内遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会
　2012　「内野南遺跡ｅ地点」『千葉県 八千代市 市内遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会
　2014　「内野南遺跡ｆ・ｇ地点」『千葉県 八千代市 市内遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会
　2017　「内野南遺跡ｈ地点」『千葉県 八千代市 市内遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会



調査区全景　南東から

1区全景　南東から

2区全景　南東から

3区全景　南東から

4区全景　北から

図版２

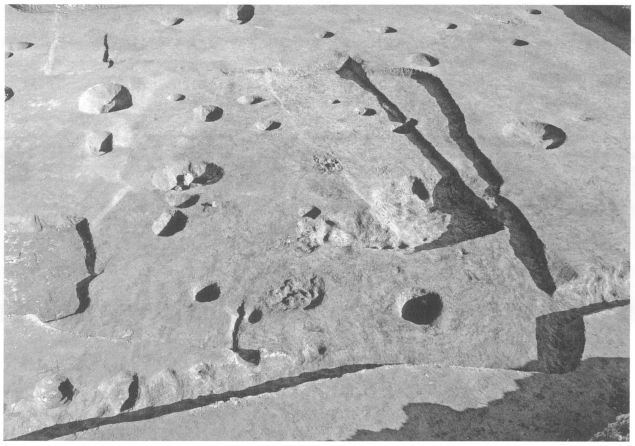
５区全景　北東から

６区全景　西から

７区全景　南東から

SI1 土層断面　東から

SI1 遺物出土状況　北東から



SI1 全景　北西から

SI1 炉１全景　南東から

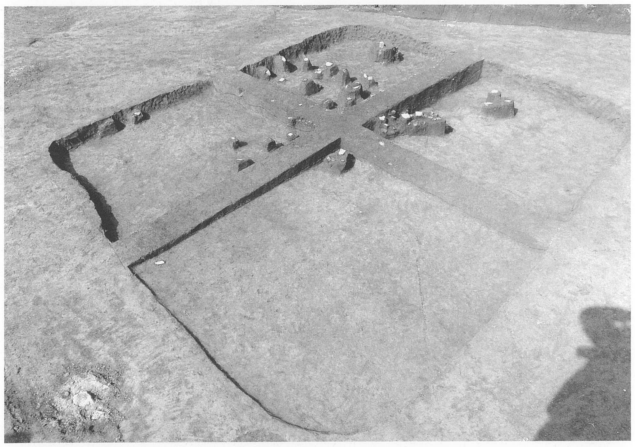
SI1 炉２全景　南東から

SI2 土層断面　東から

SI2 遺物出土状況　南東から

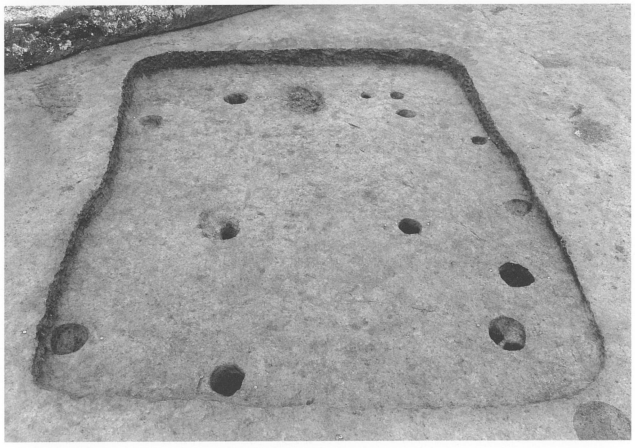
SI2 全景　南東から

SI2 炉全景　南東から

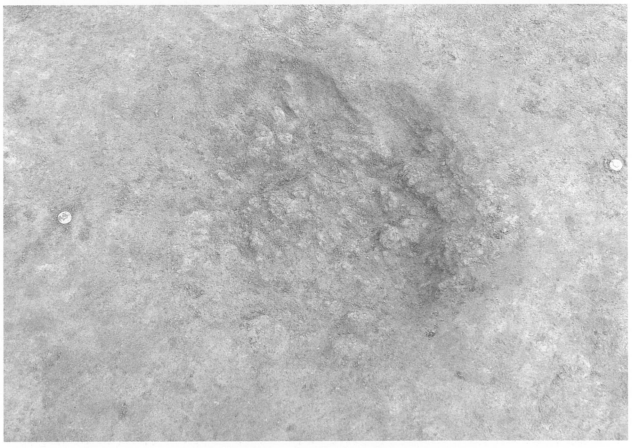


SI3 土層断面　南東から

SI3 遺物出土状況　南から



SI3 全景　南から

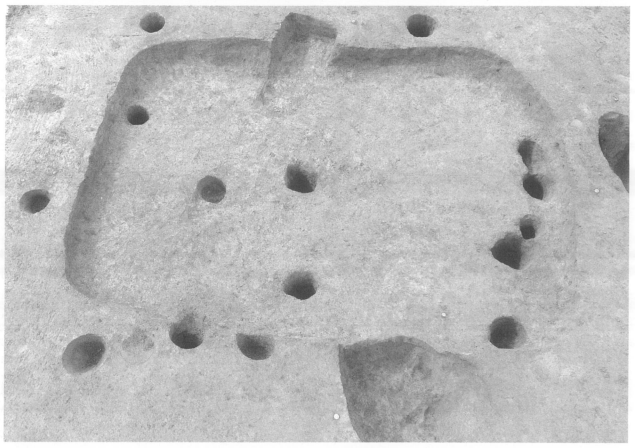


SI3 炉 1 全景　南から

図版４

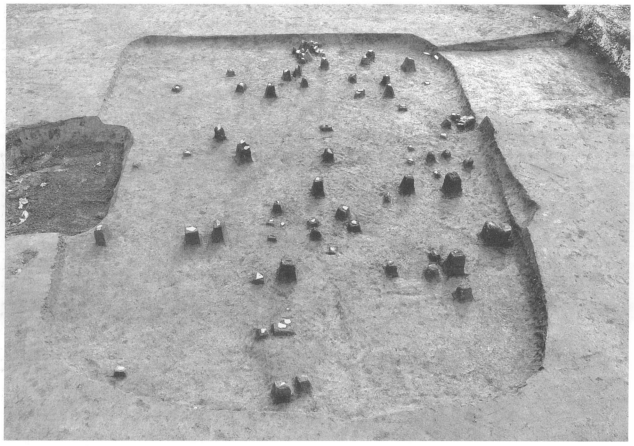
SI4 土層断面　北東から

SI4 遺物出土状況　東から



SI4 全景　東から

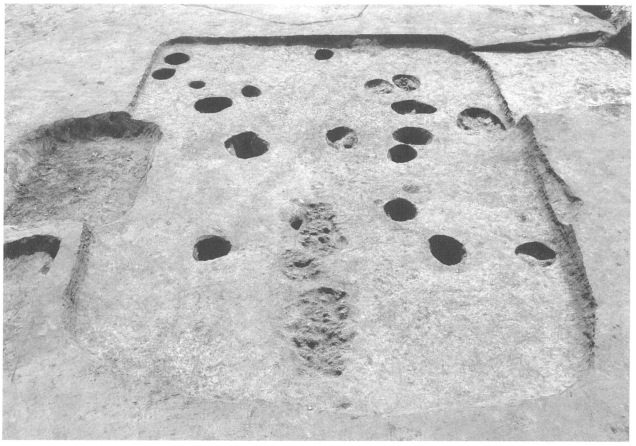
SI5 土層断面　東から



SI5 遺物出土状況　北東から

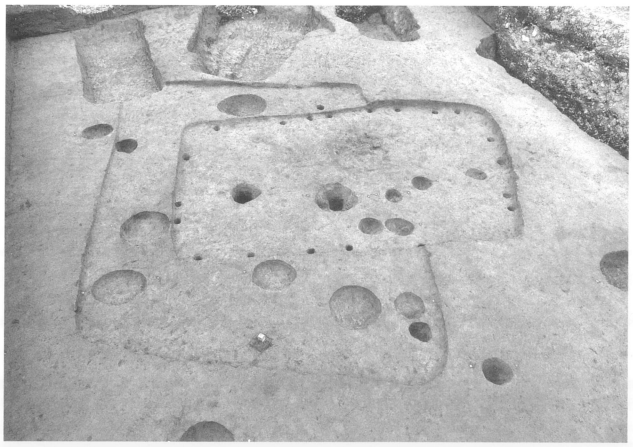
SI5 磨製石斧出土状況　南西から

SI5-P16 石製垂飾出土状況　南東から



SI5 全景　北東から

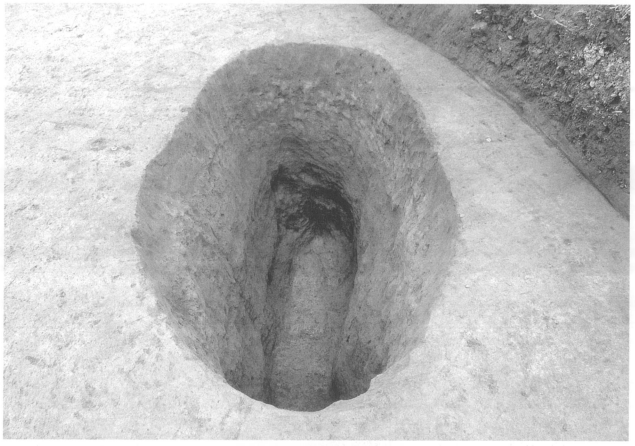
図版６



SI6･7 全景　南東から

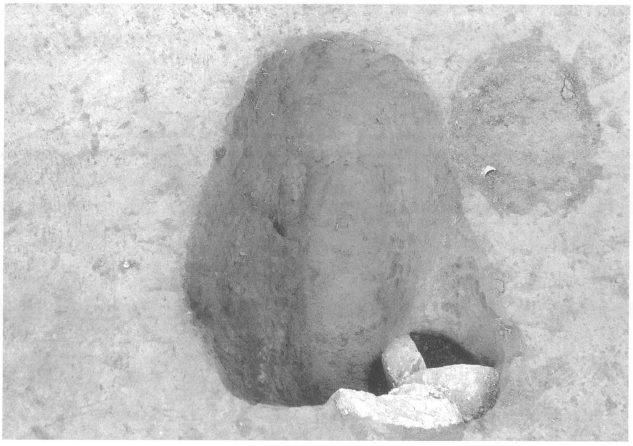
SK1 全景　南東から

SK2 全景　北から

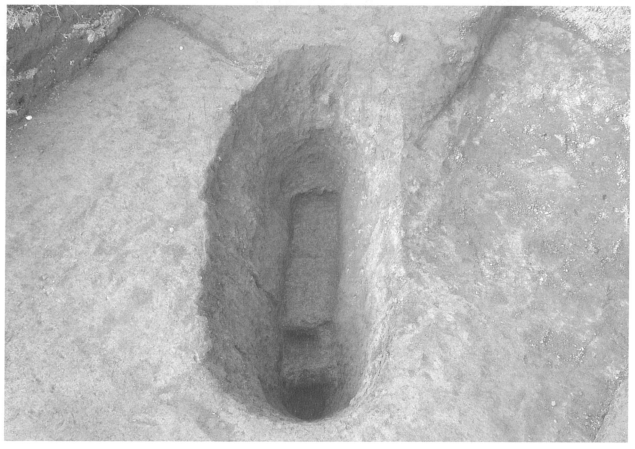


SK3 全景　北から

SK4 全景　南から

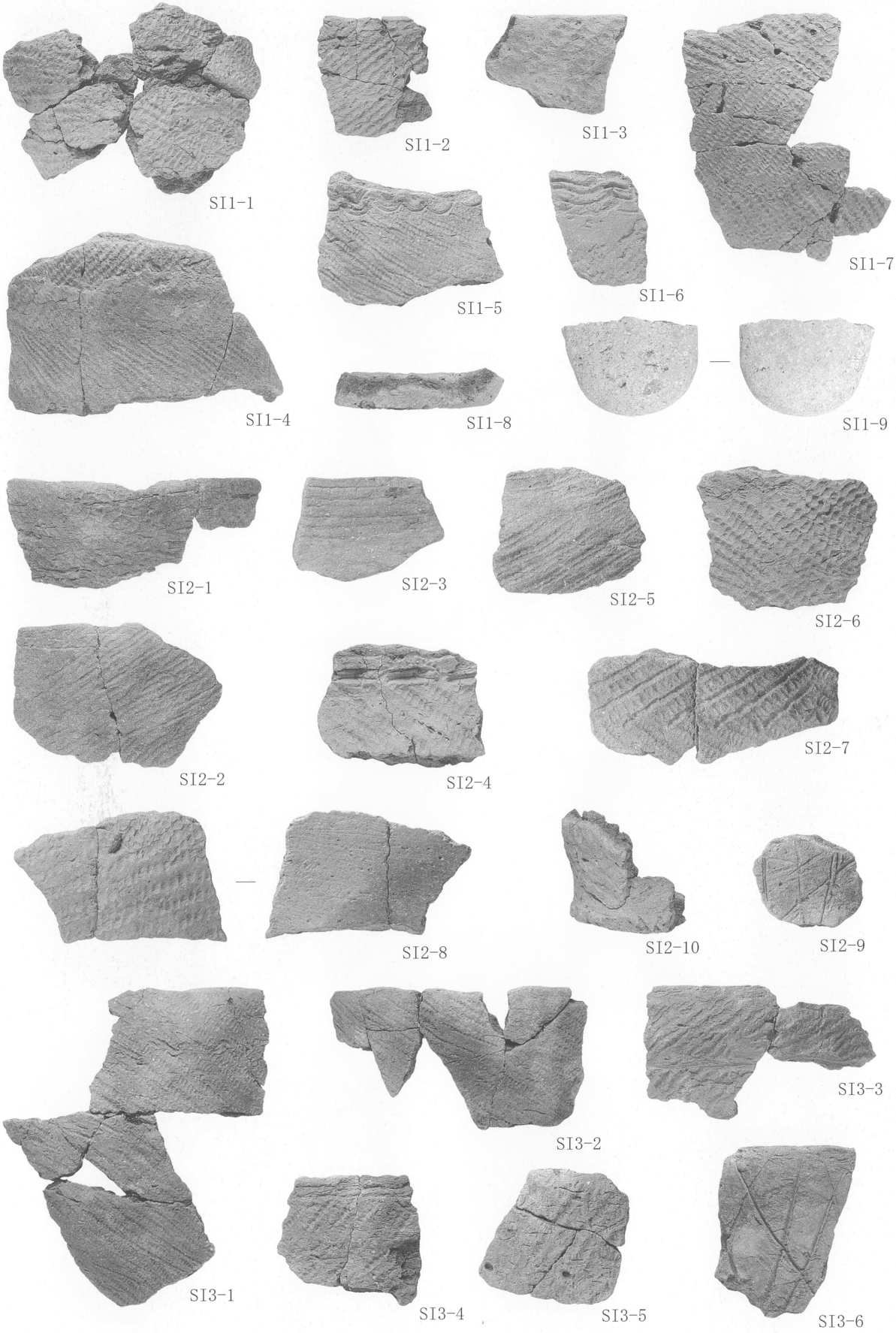


SK5 全景　南から



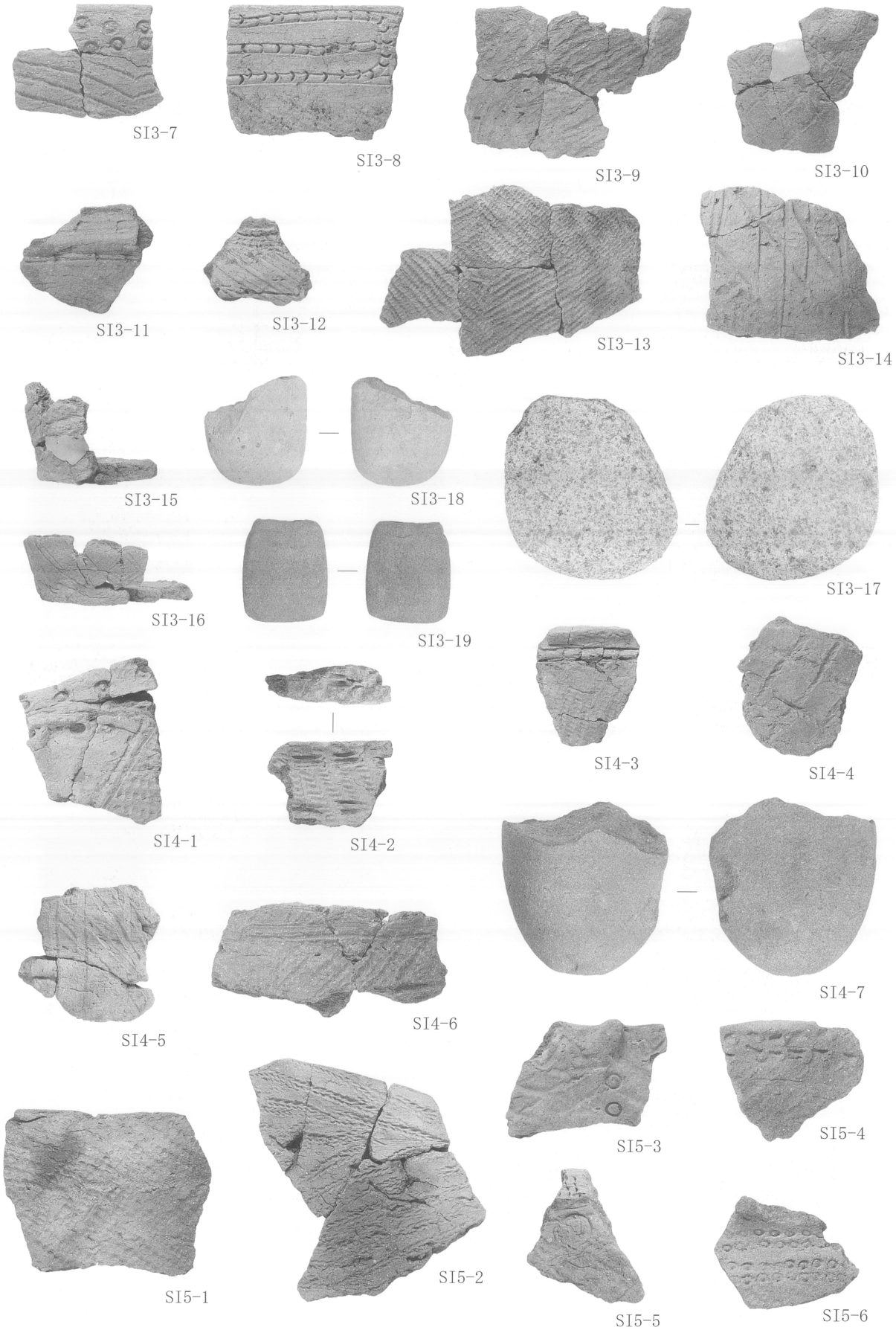
SK6 全景　南から

SK7 全景　南から


SI1-1
SI1-2
SI1-3
SI1-7
SI1-5
SI1-6
SI1-4
SI1-8
SI1-9
SI2-1
SI2-3
SI2-5
SI2-6
SI2-2
SI2-4
SI2-7
SI2-8
SI2-10
SI2-9
SI3-3
SI3-2
SI3-1
SI3-4
SI3-5
SI3-6

SI1・2・3 ①出土遺物

図版８



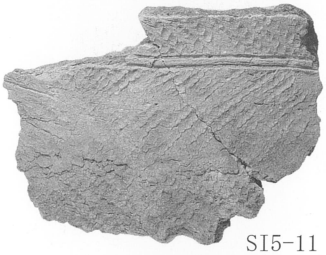
SI3②・4・5①出土遺物

SI5-7

SI5-8

SI5-9

SI5-10


SI5-11

SI5-12

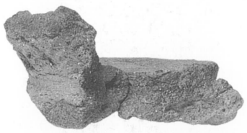
SI5-13

SI5-14

SI5-15

SI5-16

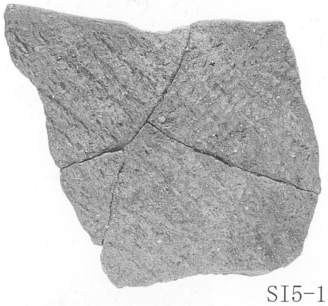
SI5-17


SI5-18

SI5-20

SI5-21

SI5-22


SI5-19

SI5-23

SI5-24

SI5-25

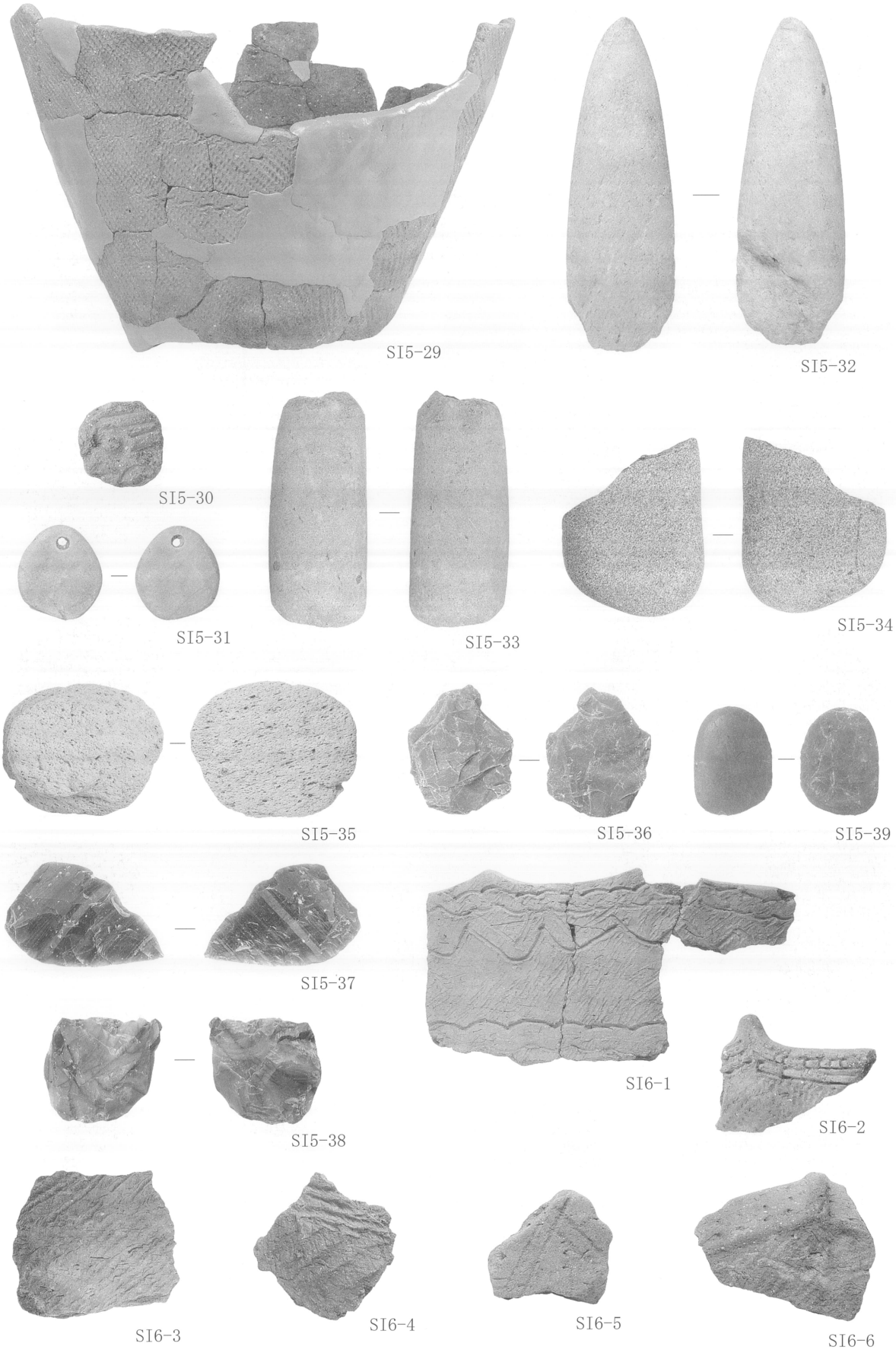
SI5-26

SI5-27

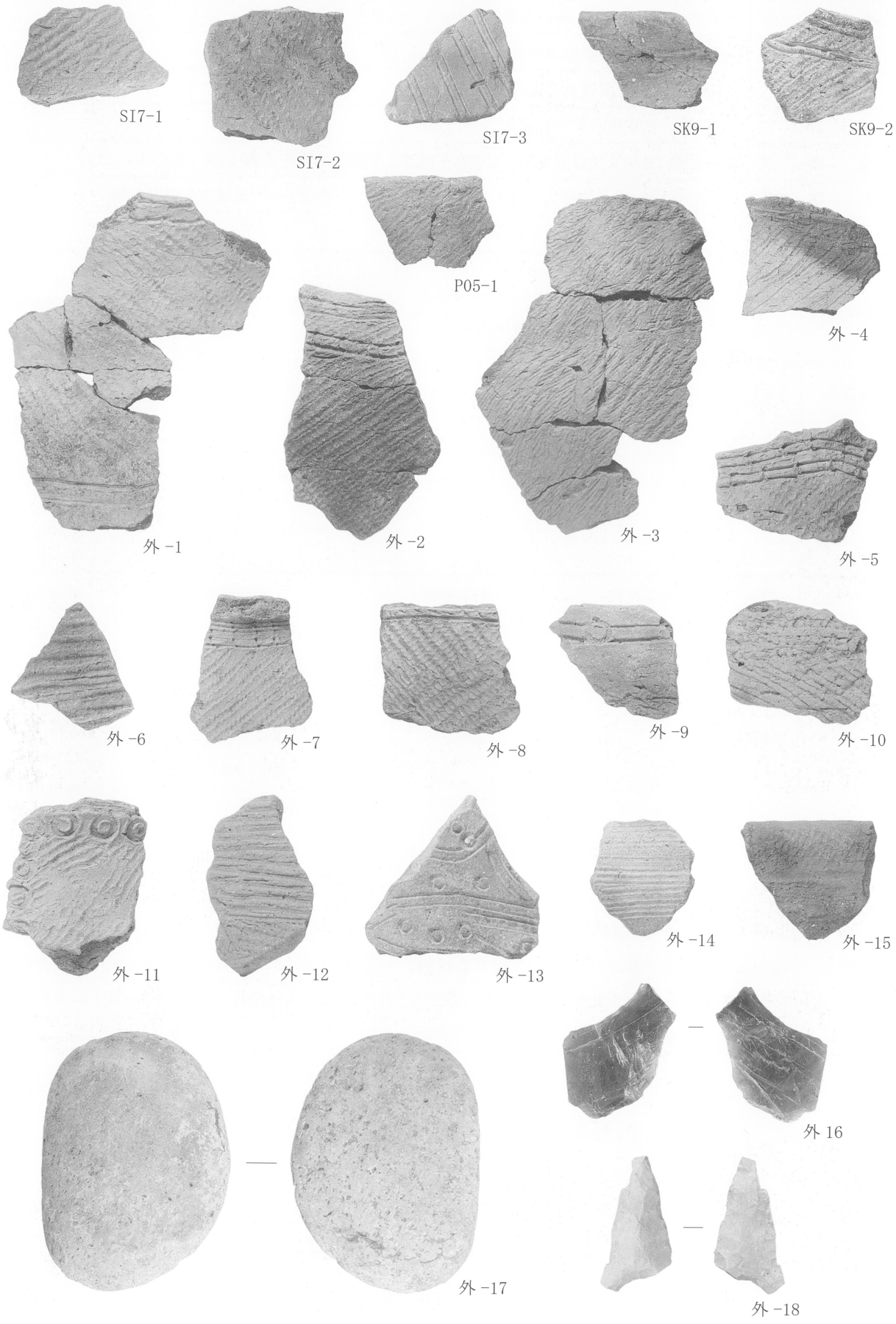
SI5-28

SI5 ②出土遺物

図版 10



SI5 ③ ·6 出土遺物



SI7,SK9,P05, 遺構外出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	うちのみなみいせき あいちてん はっくつちょうさほうこくしょ
書名	内野南遺跡ｉ地点発掘調査報告書
副書名	宅地造成に伴う埋蔵文化財調査
編著者名	大橋 生　八千代市教育委員会
編集機関	株式会社 地域文化財研究所　〒270－1327　千葉県印西市大森 2596－9
発行機関	三 信 住 建 株式会社 ／ 八千代市教育委員会 ／ 株式会社 地域文化財研究所
発行年月日	西暦 2017 年 10 月 30 日　(平成 29 年)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
内野南遺跡（うちのみなみいせき） ｉ地点	千葉県八千代市（ちばけんやちよし） 吉橋字内野（よしはしあざうちの） 1063－3 ほか	122221	289	35° 43′ 55″	140° 04′ 29″	2017.02.20 ～ 2017.04.06	1,070 ㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
内野南遺跡（うちのみなみいせき） ｉ地点	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 7 軒 土坑 13 基（陥し穴 7 基） ピット 62 基	縄文土器：深鉢・鉢形土器 土製品：土製円盤 石器：石鏃・磨製石斧・打製石斧・磨石・敲石・浮子・剝片 石製品：垂飾	SI5 は、縄文時代前期中葉黒浜式新段階から諸磯 a 式古段階にかけての過渡期にあたり、両型式が共伴して出土している。

要約	縄文時代の竪穴住居跡 7 軒、土坑 13 基、ピット 62 基を確認した。縄文時代前期中葉黒浜式期を中心とした集落跡である。住居跡は黒浜式古段階から黒浜式新段階・諸磯 a 式古段階にかけての黒浜式期の各段階にみられる。また、陥し穴は 7 基検出されており、SK3・SK7 は深さが 2m 以上に及ぶ。縄文時代に台地上が狩猟場ともなっていたことが窺える。

千葉県八千代市

内野南遺跡ｉ地点発掘調査報告書

－宅地造成に伴う埋蔵文化財調査－

平成29(2017)年10月30日 発行

編集　株式会社 地域文化財研究所

発行　三信住建株式会社
八千代市教育委員会
株式会社 地域文化財研究所

印刷　能登印刷 株式会社